每月十日廿五日發行

家庭雜誌

壹冊 定價金五錢

明治三十年十一月十五日發兌



第百拾號

重要目録

毎月二回 新小説



第二年第十二卷十一月五日發行

本號には懸賞和歌俳句第二回披露あり中原の鹿果して誰が手にか落つ小説は例によつて愈愈斬新奇抜雜錄以下時報に至りては特に從來の面目を一新したるもの一段出色の異彩を放てり

本紙實價
一冊十七錢郵税二錢
五冊前金八十二錢五厘
十冊前金一圓六十錢

發行所　東京日本橋通四丁目　電話本局五十一番　春陽堂

明治三十一年

吾家の歴史

（注意）卅一年用には特に●●●●●●●家眷錄及親戚、朋友、の住所姓名表を増加す

總クロース、リボン入 上製定價三十錢 郵税六錢 十部以上無料

日記傳としては吾國在來の意匠と異り其の秩序の整然たる恐くは之れが比なからん是れ實に吾家の歴史と謂ふ所以なり**吾家の歴史**は僅かに其の日の金錢出入を記するが如き普通賤價の小冊子にあらず故に**新古社會の出來事**を列記し以て參考に供し左に**古人の金言**を記し座右の銘とし加ふるに**大家の傑作詩歌**を以てせり欄には**往來**には友人と往來したる事を記すべく**爲したる事**業には其日の事を記すべく**得たる思想**には今日思ひつきたる事を記すべく**社會の出來事**には其日社會に起りたる事を記して後日の便に供し以上の欄に入るべからざる事は**雜事**に記すべし雅俗共に通じて一箇人としては一日も欠くべからざる**記錄**なり

東京京橋區出雲町 警醒社書店

○新刊 **社會改良家列傳** 定價三十錢

○十版 大日本青年精神的教育 **立志之礎** 定價廿五錢

○四版 アブラハム **倫古龍** 定價二十錢 郵税四錢

○三版 **人物論** 定價十錢 郵税二錢

發兌 東京京橋區出雲町一番地 **警醒社書店**

民友社雜誌大賣捌店社告

今般新たに左の一店に於て民友社發行雜誌國民之友、欧文極東、家庭雜誌賣捌開始特約仕候間尚從來取扱ひ來り候關西各店同樣御愛顧の程偏に願上候

大阪市東區備後町四丁目 **盛文館**

大阪市東區備後町 岡島新聞舗

同 中村峯雄

京都市佛光寺通 東枝律書房

同三條通り 便利堂

同寺町通り 飯田信文堂

神戸市榮町通り 船井新聞舗

右廣告す 十一月十五日 東京 **民友社**

民友社出版書籍總目錄

- ○家庭の和樂　定價十錢　郵稅二錢
- ○夏の家庭　定價十錢　郵稅二錢
- ○玩具と遊戲　定價十錢　郵稅二錢
- ○家庭教育　定價十錢　郵稅二錢
- ○小兒養育　定價十錢　郵稅二錢
- ○家庭衛生　定價十錢　郵稅二錢
- ○家政整理　定價十錢　郵稅二錢
- ○簡易料理　定價十錢　郵稅二錢
- ○社交一斑　定價十錢　郵稅二錢
- ○婦人と職業　定價十錢　郵稅二錢
- ○家庭理財　定價十錢　郵稅二錢
- ○名士と家庭　定價十錢　郵稅二錢
- ○紫式部　定價十五錢　郵稅二錢
- ○清少納言　定價十三錢　郵稅二錢
- ○進歩乎退歩乎　德富猪一郎著　定價十錢　郵稅二錢
- ○人物管見　德富猪一郎著　定價十五錢　郵稅四錢

- ○青年と教育　德富猪一郎著　定價十五錢　郵稅四錢
- ○靜思餘錄　德富猪一郎著　定價十五錢　郵稅四錢
- ○文學斷片　德富猪一郎著　定價十五錢　郵稅四錢
- ○天然と人　德富猪一郎著　定價二十錢　郵稅六錢
- ○第二靜思餘錄　德富猪一郎著　定價十錢　郵稅二錢
- ○風雲漫錄　德富猪一郎著　定價十五錢　郵稅四錢
- ○家庭小訓　德富猪一郎著　定價十二錢　郵稅二錢
- ○經世小策　上下各　平田久著　定價二十錢　郵稅四錢
- ○カーライル　竹越與三郎著　定價十八錢　郵稅四錢
- ○マコウレー　竹越與三郎著　定價十八錢　郵稅四錢
- ○荻生徂徠　山路彌吉著　定價十八錢　郵稅四錢
- ○ヲルヅヲルス　宮崎八百吉著　定價十八錢　郵稅四錢

高木伊作著
○ゲーテ　定價十八錢　郵税四錢

北村門太郎著
○エマルソン　定價十八錢　郵税四錢

塚越芳太郎著
○近松門左衛門　定價十八錢　郵税四錢

山路彌吉著
○新井白石　定價十八錢　郵税四錢

人見一太郎著
○ユーゴー　定價三十錢　郵税六錢

內田貢著
○ジヨンソン　定價二十錢　郵税四錢

緒方維嶽著
○シルレル　定價十八錢　郵税四錢

德富猪一郎著
○吉田松陰（肖像入）　定價五十錢　郵税八錢

德富猪一郎著
○新日本之青年　定價二十錢　郵税四錢

德富猪一郎編著　久保田米僊畫
○誕生日（上製定價廿錢郵税四錢）　定價十五錢　郵税四錢

○今世名家文鈔　定價二十錢　郵税四錢

湖處子宮崎八百吉著
○歸省　定價十五錢　郵税四錢

乾坤一布衣著
○最暗黑之東京　定價十三錢　郵税二錢

福地源一郎著
○幕府衰亡論　定價三十五錢　郵税六錢

福地源一郎著
○懷往事談　定價二十錢　郵税四錢

人心の明鏡處世の秘寶
○第一第二合本一語千金　定價十錢　郵税二錢

奥中將題字　東條中佐序文
○兵營小訓　定價十五錢　郵税四錢

○金貨本位はやわかり　定價十錢　郵税二錢

○名家紀行文選　定價三十錢　郵税六錢

○社會百方面　定價十五錢　郵税四錢

○十九世紀外交史　定價五十錢　郵税六錢

○十九世紀の大勢　定價十二錢　郵税二錢

○世界經濟上之變動　定價十二錢　郵税二錢

○國家と政府　定價十二錢　郵税二錢

○教育と遺傳　定價十二錢　郵税二錢

○文明之弊及其救治　定價十二錢　郵税二錢

○現時之社會主義　定價十二錢　郵税二錢

○經濟と道德　定價十二錢　郵税二錢

○歷史攻究法　定價十二錢　郵税二錢

○哲學變遷史　定價十二錢　郵税二錢

- ○白皙人種の前途　定價十二錢　郵税二錢
- ○金貨之過去現在未來　定價十二錢　郵税二錢
- ○責任内閣　定價十二錢　郵税二錢
- ○山縣有朋　附渡邊國武○岡本柳之助　定價十五錢　郵税四錢
- ○大隈重信　附矢野文雄○大石正巳　定價十三錢　郵税四錢
- ○伊藤博文　附伊東巳代治○末松謙澄　定價二十錢　郵税四錢
- ○海の日本人　定價十錢　郵税二錢
- ○簡易生活　定價十錢　郵税二錢
- ○娛樂倶樂部　定價十錢　郵税二錢
- ○事務世界　定價十錢　郵税二錢
- ○資本の活用　定價十錢　郵税二錢
- ○學問の應用　定價十錢　郵税二錢
- ○懷舊　ヴヰクトル、ユーゴー著　森田思軒譯　定價二十錢　郵税四錢
- ○グラッドストン（肖像入）　德富健次郎纂譯　定價廿錢　郵税四錢
- ○格(コ)武(ブ)電(デン)（肖像入）　德富健次郎纂譯　定價二十錢　郵税四錢
- ○英文日本及日本人　内村鑑三著　定價三十錢　郵税六錢

- ○新日本史 上　竹越與三郎著　定價四十錢　郵税六錢
- ○新日本史 中　竹越與三郎著　定價三十錢　郵税六錢
- ○近世欧米歴史の片影　德富健次郎著　定價二十錢　郵税四錢
- ○露西亞帝國　平田久著　定價三十五錢　郵税六錢
- ○外交と外征　稲垣滿次郎述　定價十五錢　郵税二錢
- ○阪本龍馬（題字肖像及手蹟入）　弘松宣枝著　定價十五錢　郵税四錢
- ○朝鮮王國　菊地長風著　柴四朗德富猪一郎序　定價五十錢　郵税八錢
- ○藤田東湖（肖像入）　雨谷一菜庵著　定價十八錢　郵税四錢
- ○警世雜著　内村鑑三著　定價二十錢　郵税四錢
- ○詩人西行（口繪入）　中龍兒著　定價十三錢　郵税四錢
- ○雲井龍雄　縁亭主人著　定價十二錢　郵税二錢
- ○古反古　幌帆の屋主人著　定價二十錢　郵税四錢
- ○木戸孝允　定價二十錢　郵税四錢
- ○兼好法師　定價十三錢　郵税二錢

- ○日本文學梗概　定價二十錢　郵税四錢
- ○征塵餘錄　定價十五錢　郵税二錢
- ○ダーウ井ン　定價十五錢　郵税四錢
- ○鐵道王グールド　定價二十錢　郵税四錢
- ○マゼラン　定價二十錢　郵税八錢
- ○武備教育　定價十二錢　郵税二錢
- ○遠　　征　定價十二錢　郵税二錢
- ○本朝美術　定價十二錢　郵税二錢
- ○市　　民　定價十二錢　郵税二錢
- ○職業論　定價十二錢　郵税二錢
- ○技　　術　定價十二錢　郵税二錢
- ○學　　校　定價十二錢　郵税二錢
- ○フランクリンの少壯時代　定價十二錢　郵税二錢
- ○兩ケトー　定價十二錢　郵税二錢
- ○リンコルン　定價十二錢　郵税二錢
- ○子ルソン　上　定價十錢　郵税二錢
- ○同　下　定價八錢　郵税二錢

- 德富猪一郎著　○大日本膨脹論　定價十錢　郵税二錢
- 平田久著　○伊太利建國三傑（肖像入）　定價二十錢　郵税四錢
- 民友社編纂　○比律賓群島　定價十八錢　郵税四錢
- 渡邊修二郎著　○內政外教衝突史　定價廿五錢　郵税四錢
- ○日臺會話大全　定價三十錢　郵税四錢
- 塚越芳太郎著　○近松著作一斑　定價三十五錢　郵税八錢
- 近松著作一斑附錄　○巢林子戲曲　上下各　定價十八錢　郵税四錢
- 德富猪一郎深井英五合著　○歐洲大勢三論　定價十五錢　郵税四錢
- 雨谷一栄庵著　○大石良雄　定價三十九錢　郵税六錢
- 島川三郎君稻垣滿次郎君序　○己成西比利亞鐵道　定價十二錢　郵税二錢
- ○ウエリントン　定價十二錢　郵税二錢
- ○日清軍記前編　定價十五錢　郵税四錢
- ○日清軍記後編　定價十五錢　郵税四錢

東京市京橋區
日吉町四番地

發行所　民友社

再版!!!

名家紀行文選

定價卅錢
郵稅四錢

讀賣評　或は物故したる或は現存する明治漢文家の紀行に關する名什妙編を假名交り文に書き直したるものなり諸名家の作を蒐集したるものなれば其文章の趣味も一々異りて流麗なるあり勁拔なるあり雄大なるあり清楚なるあり初めは假名交り文に直したるものなれば名玉に瑕付くるの恐れなきやを疑ひしも讀むに難澁なき丈け却て德川と覺えたり

朝日評　拙堂、一齋、鶴梁、艮齋の紀行文八十三篇を輯めて一冊となす忽ちにして高山大澤忽ちにして長林曠野或は花の爛熳たるあり或は月の清朗たるあり讀來て卷の終るを覺えず

塚越芳太郎著

熊澤蕃山

印刷中

發行所　東京市京橋區日吉町　民友社

家庭雜誌

定價表
九月改正

	(前金)	(市外郵稅共)
一冊……	拾錢	十一錢五厘
六冊……	五拾七錢	六拾六錢
十二冊……	壹圓八錢	壹圓廿六錢

十二冊以上一冊九錢の割市外は別に要郵稅

廣告料　一行（五號活字廿四字詰）一行八錢

家庭雜誌　九月以後每月一回十五日發兌

本社電話番號木局七十番

發行兼印刷人　吉崎國吉
編輯人　金子佐平
發行所　東京市京橋區日吉町四番地　家庭雜誌社

明治三十年十一月十五日發行

家庭雜誌第百拾號

目錄



小川一真製

西洋新聞賣

家庭雜誌第百十號

(明治三十年十一月十五日發兌)

社說

小兒の英雄崇拜心

人として幾分か英雄崇拜の心なきはなし、特に年少の日に在りては其情の最も盛なるものあると世の常也。」此の心は助長して以て人物を養成するに最も大なる便宜を得るものなれば、家庭教育は勿論、學校教育に於ても、將た社會教育に於ても、決して忽かせにすることとなく、其機會を失はずに之を善用することを怠るべらからざる也。

單に乾燥なる理論を以て道德仁義の守るべき所以、人倫の重ずべき所以を說き示すとも、幼弱なるものゝ如きは、之を領會するとするも甚だ困難也、況や其實行をや。寧ろ前人の曾て一たび實行したるものゝ事迹を擧げ、其實行したる狀況を示すことの、最も人に親切なるに如かざるべし。所謂人を以て鏡となすとは是也。

古來幾多の賢母が其子女の人物を作り上げたるものを觀るに、多くは其英雄崇拜心を利用して、知らず識らずの間に子女立志の基を定めたるにあらざるはあらず。彼女等が多く慣用したるものは、其稚き子女が胸に倚り膝に抱かれて餘念なく母の昔し語りを傾聽し、眼を張り眉を昂げて前人の偉行を景慕しつゝも、徐ろに小さき心臟に高き動悸を鼓する時を利用し、或は秋の夜長の寢物語に、趣味ある歷史の一節を語り、或は圖畫彫像に對して古英雄の高名手柄を話說し、小さき彼等をして己れ自ら古英雄たり前偉人たらんとするの熱愛を發せしむることを怠らず。遂に三つ兒の魂百までの諺にもれず、此の小さき腦中に一點看破した

る初一念は、次第〱に膨大して、志を立て行を勵み、後には身自ら古英雄前偉人に耻ぢざるの人物たるに至らしめしもの、比々然るにあらずや。

家庭教育に於て、兒童の英雄崇拜心を巧に利用して、能く人をして志を立るに至らしめたるの例し少なからざるのみならず、學校教育に於ても倫理道德の教訓特に立志立身の教養は、主として兒童の英雄崇拜心に訴ふるにあらざるものは稀也。社會教育に於ても亦然らざるを得ず。

國民に英雄崇拜心の多きは、其國民の猶少壯國民なる徵し也。新興の國家、有爲の國民は、傳奇小說的國民ならざるべからず。傳奇小說的國民は英雄崇拜の國民ならざるべからず。唯英雄崇拜國民なる也、故に傳奇小說的國民なる也。從て有爲冒險にして大膽に、而も鬱勃たる活氣あり。以て新興國民たるべき也。

古英雄の事蹟を慕ひ、前偉人の肖像を仰ぎ、獨り前偉人古英雄のみならず、現に生存しつゝ、大人傑士の英風を欣慕するが如き、少壯國民の好んで爲す所にして、實に其前途に賴母しきものあるを見ずんばあらず。

古來英傑の士にして英傑を景慕したるもの少なからざる也。其景慕したる所は其成功したる所に少なからざる關係あるを見るべく、又其景慕する所によりて其人となりを察すべきものも一二にして止らず。例之ば橘本左內の岳武穆を慕ふて自ら景岳と號したる如き、橫井平四郎の楠正行を慕ふて自ら小楠と號したる如き、自ら其志操品性の如何を見るべきにあらずや。

之を要するに所謂英雄崇拜心なるものは、巧に之を利用すれば其効果決して小少なるものにあらざる也。特に小兒の英雄崇拜心に至て、父母教師たるもの最も巧に之を善導し、以て教育上に大なる成果を見るを怠るべからざるもの也。

隠し隔はない

甲「僕は家内にだけは隠し隔はない、何でも話して聞かせるのさ
乙「其事はずつと以前から知つてる
甲「どうして知てる
乙「ナニ君の令閨は僕の妻に何でも御話しになるし、愚妻は亦僕に何事でも打ちあげるのだもの

論説

婦女の道

野口勝一閲
金成磐峯稿

(上)

編を別ちて三とす一を女子の道一を妻となりし時の心得一を母となりし時の心得となす

女子の道

凡そ人は其年齢に依て、境遇を新たにし、境遇を新たにするに依て、又その稱ひを異にするものにして、先つ男子ならは、息子、夫、父と申し、女子ならば、息女、妻、母と申すか如くにして、之を人の三大時期とも申すへきか、

人は誰しも、皆同しく、人たるの道をふみ行ひて、世の人より名誉と、尊敬とを得んことを希ふものならめ、さらば女子にして其一生涯の中、境遇の異なるに従ひて、如何なる稱ひを得んことを、希ひ候か、息女の時に、淑女と愛せられ、妻たる時に貞妻と慕はれ、母たる時に賢母と申されんことを、希望するならめ、然り而して、女子の勤めを全ふしその道を充分に盡せしものと申すべく候、

然らは如何にして、此名を得申すへきや、先つ女は、女らしきにあり、何をか女らしきと申すへきや、行ひ正しく、心素直に和らき、情け深く、高尚にして、毫も卑しく猥らなる心之なく、言葉遣ひ起ち居とも、靜かに優しきをよしとす、言葉多く行ひ、輕がるしく躁

がしかるは誠に耻かしきことならずや、

子を育てゝ、親の恩を知れど、親は如何に子を愛し育てしものなるか、暑き日、寒き夜も、厭はすして、子の爲には、千々に思ひを煩はせしならん、左れは平生父母に事へて、優しく能く其命に從ひて、專ら兩親の心を慰さめ、申すへし、假令ひ我に理ありしとて、物言ひ返し、或は父母の誡しめを受け口惜しとて、物事をあらあらしく取扱ひ、父母の叱りを、承けつらしとて恨み、返すもの抔あれど、是れ我儘の甚たしきものにして、大なる心得違ひ、誠に悪しきことに候、父母若し病氣なんどに罹り、心を傷むることあらば、別して、柔かに勞はり慰さめ申すと肝要に候、

次に兄弟姉妹は、同じ血肉を分けし、枝葉なれば、常に睦ましく親しみ、兄、姉その他、目上の人をば、敬まひ、弟妹その他、總て目したの者をば、能くいたはり愛し申すべし、兄弟はど行末頼母しく、樂しきものはあらじ、然るに世には兄弟の間柄悪しくして、兩親の心を痛めしむるものあり、子として、辱べき事にあらずや、

又友達には情けふかく、何事にも親切に正直に、信ありて我兄弟の如くに親しみて、決して疎畧に爲すべからじ、若し友達にて不幸の事に遇はゝ、よく勞はり慰さめ、申すべし、然るに女心の淺猿しさ、些細の事より、其友の善しあし抔を語りて、遂に不和となり、人の笑ひを受くるものあり、戒しむべき事に候、苟にも人の事を、兎や角と語りて、吾れ人より勝り顔し、或は人をそしり、人を羨やみ事を僞り、申すは萬々あしき事に候、惣して女子の病ひとして、最も嫌ふべきは、和らき順はざると、人を譏り、人を笑ひ、物を妬むと、思慮分別の淺きと、妄りに怒り、妄りに恨むとにあれば、能く愼み改むる、こそ肝要なれ、

女子は縫ひ、裁ち、織物は申すまでもなく、一ト通り

は讀みかき、算術、衛生、經濟等の道をも、學び覺り、申すべし、世にはこれ等の事、悉く打すてゝ、音樂、活花、點茶、などに、身を入るゝものあり、此等は末のことに候、若し之を習ふの暇あらば、衛生のことに、心を入れ、看病の道を覺り、身躰をも健かに爲すべし、わが身の弱きは、其子こそ孫にまでも及ぶべし、愼しむべきことに候、

身の裝ひは、最も質素にして、淸きを旨とし、決して身分外の飾りを爲すべからじ、餘り人目に立つは悪しゝ、人は身裝よりは心を第一とす、女子とても容貌身裝よりは、心の勝れるを最も貴としとす、今の女子は身に一の藝能なくも、一の貯へなくも、甚だしきは父母兄弟をも省みず、妄りに身分外の飾りを爲すものあり、こは心あるものゝ眼より見るときは、誠に可笑しきことに覺へ候、身に應じて用ゆるこそ賞すべきことなれ、今の世は上流の人ほど、儉素の身裝を爲し、中等以下の者こそ、却て仇に身飾りを爲すぞ可笑けれ、

女子は心狹く、思慮分別の淺きものなれば、少し年長けるとその朋輩の中にて、若し人の妻とも爲りしものなどあれば、其身の上を甚く羨らやみ、或は人の新らしきものなど、着けしを見ては、我も彼を買はん、此を求めんと、千々に思を焦がし、人の物云ひ笑ふ聲も、我を嘲けり笑ふならんと、邪推をめぐらし、些細の事にも、種々なる忘想を惹き起し、遂に寒しき恐ろしき、淺猿しき、果ては墓なき事なとして、あたら愛しき花を無情の風雨に散らすもの往々見受候、之れわが身一生の過まりのみならず、父母兄弟の名を汚し、父母兄弟の心を煩はす、此上もなき大不孝ものに候、緣は天にあり、決して急ぐべからじ、必らず待つとあるを覺り、心を金石の如くにして、能く女子の道を守るこそ肝要に候、

女子は別して男女の別を正しくして、假にも言葉輕が

るしく、狃れ戯むれて、人目に立ち、人に後ろ指さゝれて、我名を汚すのみならず、父母兄弟の恥辱となるか如きことあるは、誠に戒しむべきことに候、世には痴情に迷ひ、父母の命をも聞き入れず、人目を忍び、駈落ち抔するものあり、又甚たしきは、思ふが儘にならぬとて、貴とき命を捨るもあり、共に情死なんとするものもあり、これ誠に笑ふべくも、亦憐むべきことに候、

夫婦は人の始め、國家の大本なれば、最も心して血統も撰ぶべし、その夫たるべき人の生れ行ひをも探ぐり、念に念を入れ、鄭重の上にも、鄭重を加へ、相談すべき人には相談し、許しを得へき人には許しを承け、申すべし、女子の智慧淺き、唯ゝ戀し慕はしとて、一時の逸やり氣に狂ひ出し、一時の痴情に絆されて、假令ひ契りを結びしとて、斯るものは一生人に笑はれ、卑下さるゝのみならず、不幸の中に終るべし、總て男狂ひする女子、外つ國人に操を曲るが如き女子抔は、その身に如何ほどの藝能あるとも、その心最も陋しきものなれ、

女子は、何の用もなきに、親兄弟に告はりなくして、妄りに家を出るは實に惡しき事に候、家を出るにも、歸りしときにも、必らず禮言ふべきは、申すまでもなく、夜行するときには、燭し火を持ち、用もなきに夜行するは、誠に誡しむべきことに候、

女子は、すべて家の内を治むるものなれば、常に心遣ひして、如何なる些細の事たりとも、爲すべき事は決して忌み嫌ふべからじ、殊に調理の法、衣類のつくろひ、せんたく抔には、格別心を用ひ申すべし、又朝は早く起きて、坐敷の掃除、食事の仕度等、まめまめしく、夜は日につきて、事を爲し、誰れよりも遲くいねて、專ら家の内の事に心を用ひて、怠たるべからし、仕事なくして、徒らに夜を更すは、特に惡し、女子の年わかくして、茶など飲み、大飲して笑ひ語り戯むる

ぞ、見苦るしけれ、且つ芝居其他、物見なんどにのみ、無益に時を費やして、何事をも手にとり着かざるものあり、是は浮氣女と申して、後日人の妻となり、夫婦の道を守り、夫妻のたのしみを保つこと得まじく候、

黒鷄の怜悧

「何故黑色の牝鷄は白色のより怜悧だと申しませう
「其故は何でもありません、黑鷄は白い卵を產み得ましても白鷄は黑い卵を產み得ぬではありませんか

史談

トルストイ家の家庭敎育(上)

蘆花生

宋人の詩に、一樹高花明遠村、と云ふ句がありますが、偉人の國に於けるも殆ど斯様なもので、千萬人中一人の秀れた人物があれば、遠ひ國の端までも「あゝ、彼處に彼様な人が居る」と、其人ばかりか其居所までも直ぐ眼をつけるのです。畢竟喬木は村の目標、偉人は國の目標、トルストイ翁の如きは即ち露西亞の目標でありませう。

トルストイと云へば歐洲屈指の大小說家、イヤ夫れよりも十九世紀末の今日に珍らしい賢哲、伯爵貴族の身分を棄て世間一切の虛榮を棄てゝ、己を潔ふし人を濟ひ、兵隊と軍艦と速射砲と爆裂彈の世界に、萬人平等愛と平和と潔白を以て生活する無形の大帝國を打建てやうと七十の老人日々心を碎き身を勞して居る慈眼愛腸の翁であることは、恐らく知らぬ者はありますまい。記者は別にトルストイ翁の文學上の著作や宗敎上の議論を紹介するではなく、唯トルストイ家の家庭敎育の一班を述べて、家庭の問題に心がけて居らるゝ諸君の御參考に供したいと思ふのです。

トルストイ翁が一風人に逢つたとも多い中で、露國貴

族社會の人達と正反對の嗜好を有ッて居るのは、翁が交際社會を嫌つて家庭を愛し、都會を忌むで田舍を好むの一事でせう。で、翁の宿願は健全な家庭を築きたいと云ふので、從つて其家庭を田舍に築きたいと云ふにあるのです。露西亞の上等社會は、夏は田舍の所有地に避暑して、其餘は都會に生活するの風ですが、トルストイ翁は結婚後二十年近くと云ふものは、不斷田舍のヤスナヤポリヤカナに住むで、今でも冬丈莫斯科に行くのも不本意ながら行くのです。此ヤスナヤポリカナと云ふのは、百四十町歩もある先祖傳來の地面で、麥畑もあれば樺の木の林もあり、芻草を作る野もあれば鴨狩する小川もあり、家は古い家で、周圍には菩提樹の並木道もあれば河鹿の鳴く池も二つ三つあり、秋の頃は蕈採りに行く森もあり、夏の頃は屋敷一ぱい草の間に白百合が馨ッて、貴族樣の屋敷ではあるが、至て自然なほんに田舍らしゐ所でありまず。翁は此處に今から三十五年前に花嫁を連れて來たのです。九人の子供の育つたのも大抵は此處なので。

三十五年前のソフィア、アンドリーヴナ孃今のトルストイ伯爵夫人は、有名な莫斯科の醫者の女で、嫁に來た時は十八歳でした。花婿は三十四歳、伯爵家の末男で、早く孤兒になつて、叔母に育てられ、大學を中途で退ひて、軍人になつて、クリミヤ戰爭に出て、其れから文學者になつて、一寸外國に行つて歸つた所で、二三著作はありましたが、まだ大家の列には入つて居なかつたのです。花嫁の家とは年來の熟懇でした。此花嫁の父親と云ふ人が、女を女學校に出すのを好まないで、家で教育をして、それから大學で試驗を受けて、教師の免狀まで取らしたのです。伯爵夫人は子供の時からチャンと日記をつけて、時々は小說や物語も書ひたことがあつたのですが、得意は書でした。中々氣象の勝つた人で、容姿も立派な淑女です。性質は良人と

同様、眞摯直率、虚飾とか僞とか云ふ事を蟲よりも嫌ひます。家政を管理して、それから九人の子供が何れも十歳になるまで自身で育てゝ敎へて着物までも拵へて、其隙々にはトルストイ翁の爲めに著作の材料を整理したり、翁の原稿を淨寫したり、翁か共產勞働主義を唱へ出して後は、一切頁人に代つて財產の管理書籍出版の事まで獨りで切つて廻はして居る位ですから、並々の婦人でないことはよく分かりませう。夫人が内助は、家政の上小供の上ばかりでなく、翁が文學上の著作も、其補助を待つことが少なからぬので。翁の傑作小説「戰爭と平和」なぞは、著作に八年もかゝつて、原本で七百頁の本か四冊もあるが、夫人は徹頭徹尾七回淨寫しました、翁の著作は出版したのもしないのも唯一枚として伯爵夫人の淨寫を經ないものはない。翁が興に任して紙ぎれに例の悪筆でもつて書き流した處は、字字を爲さず句句をなさずで、速記者の覺へ書きも啻ならぬものですから、百人が百人迄決して通じない、それを夫人は字を足し句を完ふしてチャント整理して行きます。マコーレー卿の妹トレヴェリアン夫人は卿が死去の前匆卒に書き遺した符號同様の原稿からして華やかに英國史の第三卷を出版したと云ひますが、トルストイ伯爵夫人が即ち其通りで、翁も此事に就ては常に驚嘆して居るのです。誰しも親の身になれば吾女の事には兎角不滿を言ひたかるが人情ですか、伯爵夫人の兩親は不斷そう言つて居ました「彼女ばかりは思ひかけない仕合せ者であつた」。翁か家庭の幸福は此で知られます。翁は實に夫人を尊敬して、何事も一應夫人に打合はせなければ行はないのです。一寸散策に出かけるにも「待て〳〵、家の總理大臣に一とつ相談して見なくちやならん」。

併し子供の敎育の仕方に到ては、翁が方針を立てゝ、夫人も之に隨つて行るのです。翁の子供は都合十三人

で、今生きて居るのが九人ですが、皆な伯爵夫人自ら哺乳して育てたので、決して乳母を雇ひませんでした。尤も二番目の女が生れた時は、夫人が大病になつて、乳母を雇つたのですが、吾子が他人の乳を吸つて居るのを見ると、病氣の夫人はら〳〵と怒りの涙を流して、直ぐ其場で乳母を解雇して仕舞つたのです。で、前に云つた通り、九人の子供は九人ながら、十歳になるまでは、夫人自から哺乳もすれば敎もするし着物までも作つてやつたのであります。

子供の家庭敎育に就ては、翁も餘程考へたので、根本の主義はルッサウの「アミール」に基いて、併し時處位の必要で大分斟酌を加へました。畢竟成る丈人爲の制限を省ひて子供を自由に自然に發達さするは、翁の家庭敎育の第一義です。玩具の類は一切子供部屋に入れません。嫡子の生れた時は、保姆も一切雇はないで遣つて見たのですが、如何にも身分から云つても境遇から云つても保姆や私宅敎師を雇はないで居られないものですから、詮方なく雇ひは雇つたのですが、併し子供も子供の御附の者も皆主人と主婦で直接に監督して、子供は成る可く出來る丈自由にして、如何な事があつても嚴刻な處置や刑罰はさせません。此事については、英國程よく屆いた處はないので、トルストイ家では倫敦から年若な女傅を雇入れました。

トルストイ翁が先づ第一の務として保姆や師傅に言ひ含めて置ひたのは、成る可く子供を自然に近づかせると云ふ事で、即ち人と自然の關係を敎へるので、凡そ自然界の物は如何樣な物でもよく子供に見知らせ、色々の動物蟲類に到るまでよく見知る樣に愛する樣に恐がらない樣に癖をつけさしました。一方には自然の大きな事、自然の前では子供は若弱ものである事、長者に頼らなくてはならぬことを知らすると共に、自然を愛して恐れない樣にせしむる目的なのです。天眞爛

慢に眞正に敬虔に而して卑屈でない人物を養ふ極意は此にあります。従來我邦の家庭教育には如何にも此點か缺乏して居たやうに思はれるです。動物にしても、親や保姆がよく子供に敎へて馴らす所か却つて「ワン〳〵か來た」の「毛蟲か出る」のと脅嚇して、子供の忌憚心恐怖心を挑撥する弊かありますか、此は餘程戒む可き所で、畢竟人間は自然界に孤立する者でなく、自然は人間の敵でなく、人間は割合に弱い者の併し恐る可き所はない者であることを子供に知らするは、尤も大切な事でありませう。自然に對する鎖國主義は、甚だ惡い、――何の鎖國主義も宜くないですが。

夫れからトルストイ翁は、人と人との關係を敎へました。人間は平等なもの同情と愛は大切な人間の道であることをよく〳〵子供に呑み込ます爲めに、數多い僕婢に何か用事は吩咐けするも、決して横柄にしてはならぬ、斯々の事をせいではなく云々の事を仕て下さいと頼まなくてはならぬと云ふ事を、呉々も子供に吹き込むだのです。百言一例に若かずで、翁は家内の大人一同斯の通りでなくては、子供に摸範を示すことが出來ぬと云つて、全家内斯の通りにさしました。人を愛するは無論の事、動物に對しても同情を有つ様に、よく子供に敎へました。

トルストイ翁か第一の禁物は虚言で、子供でも虚言は決して容赦しません。併しトルストイ家の罰は、少し風變りの罰なので、躰罰は無論決して用ゐず、子供を部屋に閉ぢ籠めるとか椅子に立たせるとか云ふこともせず、唯子供に惡い事があつて是非共罰の必要な時は、兩親共一切其子供には頓着しないで、子供が何と言つても何を仕ても注意もしなければ構ひもせずに放擲して置くのです。子供が心から後悔の風が見はれると、其罰も中止します。併し唯一と通り御免と云つたり復致しませぬと云つた位では、決して許さないのです。

罰は必ず兩親丈で、外の人には行らせません。翁も子供の教育には餘程心を用ゐて居ます。子供と云ふものは、大人の爲る所言ふ事は眞似る者だによつて、上は主人主婦から下召使の末々に到るまで、始終其心得で居なくてはならぬと、翁はよく言ひ含めました。で、トルストイ家では、子供は始終家内の大人と一處に居る樣にしてあつて、子供ばかり放棄つて置かず、また滅多に餘所へ遣ることもありません。午後八時が子供一同の就寢刻限としてあるので、八時が鳴つて子供が徃つてしまふと、翁はほつと息つひて「さあ、やうく樂になつた」と笑ふこともあります。天眞爛熳たる翁も、子供の爲めには此位心を用ゐて居ました。

詩人ゲーテの母（其五）

稻澤英子

十四、シタイン夫人と其子

ゲーテとシタイン夫人との關係の如何なりしやに就ては、玆に云ふ限りにあらねど、其の伊太利旅行より歸る迄の間に成りし著述中の高尚なる婦人は、多少シタイン夫人を摸せしものなるは、既に普く人に知られぬ、此の頃シタイン夫人は、稍母夫人の位置を代理せる有樣にてゲーテの喜怒哀樂を語るも此の友、其企圖を談するも此の友なりき、ゲーテの言に「我母と汝とを持つ間は我に何の不足なし」とあるは、實に其眞情を露はせるものにて彼は母夫人より書信を得る毎に、之をシタイン夫人に送りて讀ましめ、以て同情同感の生活を送らむことを願へり。然れば、又シタイン夫人は、ゲーテの求めにより、書翰を認めて、母夫人に送りしともありしが、其後夫人の子フリッツが、母夫人の許に滯在せしことありしより以來、一時兩夫人は互に書を通じて音信せしこともありき。母夫人がシタイン夫人に寄せたる書に甚だ興味あり且つ夫人の人を知るに

足るべき者あり曰く、
「如何なる位階又は年齢の人にせよ、又其人は男なるにせよ、女なるにせよ、誰も不快の心を抱きて我許を去りし者は無之候、とは私が神よりうけたる恩恵と存じ候、又私は人を愛し、此の事は老いたるも、若きも之を感じ申候又私は世を渡るに一向に外飾を重むぜず、ありのまゝなる爲め、却つて子女等の悦ぶ處と相成申候、又常に善き風習を尊み、悪しきものは人間を造りし御方に一任致し置き申候、此の御方は鋭き角を取り去ることを最もよく知り玉ふにより、此の方法によりて私は誰人に對しても常に安寧、幸福に、又愉快なるとを得候」と、
千七百八十九年となりける時、シタイン夫人は自ら母夫人を訪ひ、互に手を握りて相語ひしが、我が子の敬愛せる友、愛せるフリッツの母たる人の訪問なれば、母夫人の喜も亦一層なりき。然れどもゲーテと夫人の間、漸く交情の破れむとする傾向ありしは、兩夫人の交情を害せざるにはあらざりき。
之に反して、母夫人とシタイン夫人の末子フリッツとの交際は、甚た厚く、夫人の爲めにも亦有益の事なりき、而して其交情の基礎たり原因たる者は、是れ又ゲーテとフリッツの極めて厚き交情より生ぜし者と知るべし。ゲーテが始めてワイアルに至りし時に、フリッツは漸く二歳の乳兒なりしが、其天資人に秀でしを以て成長と共にゲーテの愛も増したり、是れシタイン夫人の最愛の末子なりしとも大に其原因となりたるならん、兎に角にゲーテは、彼を我が家に置き愛育することはなりぬ、かくして此のフリッツが十一歳となれる時、不途母夫人と音信を通ずると始めしが、母夫人は此の少年と文通せば我が愛子の毎日の起居を知るの便あるを大に悦びぬ、元より此の時、母夫人はフリッツが未だ幼くして長き書面を認むるに堪へざるを想ひや

り、例を示して敎へぬ、曰く「昨日は演劇見物、夜は誰氏の許に行く、今日は來客あり等にて足れり。」と母夫人の希望せし如く、フリッツは日記を作りて之を送りしかば、夫人は大に喜びフリッツを稱して我が子と呼ぶに至りぬ、唯々是れのみならず、千七百八十五年の九月には、フリッツはフランクフルドに行きて暫時母夫人の許に滯留せり、是れ實にゲーテの望みし所にして、母夫人の快活なる感化をうけて、十月三日といふに復たワイマルに歸り來れりしが、此の時ゲーテがシタイン夫人に贈れる書中に「フリッツは甚だ善良、怜悧なり旅行は云ふべからざる利益を彼に與へたり、彼は以前よりも快活となれり、實に彼はフランクフルトに於て初めて自由を學び、我が母は彼に敎ふるに快活てふ生活の哲學を以てしたり」と。

然るにシタイン夫人とゲーテの交情も後には終に破壞するに至り、特に千七百九十一年にはフリッツもワイマルを去りしかば書信の往復も茲に絶ゆるに至りぬ。」

此の時代に於ても、亦母夫人が生活、思考、感情の中心點となりし者は、固より子ゲーテにして屢々フランクフルトに來訪せむとを、求めたれどもゲーテは來らざりき。又其の衞生上の事にも、常に深く注意する所ありて、當時ゲーテはワイマル公園地内に家を所持し住すれども、地濕りて健康を害せんことを恐れ、屢々市中に轉ずるの得策なるをいひやりき、然れど閑靜、幽邃にして大木は鬱蒼し、自ら天然の粹を集めたる此の園内より、動かんとの氣色容易に見えざりければ、母夫人は暗に之を憂ひ、密かに老公爵夫人に其保護の程を乞ふに至りぬ、是に於てゲーテも其懇情の至れるに感じ、遂に居を市内に移すに至れり、アマリア（老公爵夫人）は此の旨を母夫人に通ぜんとて、「我は彼に勝てり、又彼は柔順に移轉したれば、賞美として若干の家具を贈るの約を為せり」といひやり玉ひぬ。然れ

ども母夫人は久しく此の愛息を見る能はざるを遺憾とせざるの日とてはなかりしも、自らワイマルに到らむことは深く拒みて容れず、唯々僅かにゲーテが新作の詩文の出づるや、先づ第一に母夫人の許に送呈しければ其到着を待ち繰返して之を玩讀し歡び慰め居たりき、ゲーテも亦母夫人に見えんことを切望せざるにはあらねども、滿朝の重任を負へる身とて、思の程を達する暇なかりしなり、又老公爵夫人は切に母夫人にワイマルに移住する樣いひ送らせ玉ひたれども、頑として來らざりき。そは母夫人は習慣風土の異りたる地に往くを好まず、又フランクフルトには動すべからざる財産を有したりしによれり。

十五、ゲーテの伊太利旅行

美術の叢淵なると、自然の風景との故を以て、普く世に謠はれたる伊太利の地を踏まんとは、ゲーテが宿志なりけれども、未だ之を果さで過ぎしが彼は千七百八十六年、飄然として征途に上ぼりぬ、唯々其執事のみに云ひ置きて、情交膠の如くなりしシタイン夫人にすらも、何地に行きしやを知らさゞりき。彼は始めてロームより其慈母の許に書を寄せしかども、其の滯在地を誰にも告げざらんことを態々書き加へたり。

其後ワイマルの親友、特にシタイン夫人は、彼が伊太利に遁れ行きしを知りて、大に之を怒りしが、此の時にも亦慈母の心は能く其の子の心中を察し得て、之れがために辨解して曰く「われは彼が今受くる快樂と、幸福とを殘りなく盡さんことを望む、實に彼は此の好運を以て再び伊太利を見る能はざるべし」と而して彼が受けたる批難に答へて曰く「久しく斷食したる者、美味佳肴を得ば其の饑餓の止む迄は、父母、朋友、或は愛人のことを思ふの暇もなかるべし、又譬へ思はざるも誰か彼をとがめむや」と。

子も亦能く其心事を解する者は、其慈母なるを知りぬ、

故に彼は後日、シタイン夫人に寄せる見聞錄よふのものは更に母上に送らんことをいひやりき、又彼は、翌春には歸國せんとの豫定なりしも遂に休暇の日のべを乞ひぬ、此の時にも母夫人は待ちに待ちたる愛子の歸途フランクフルドに立ち寄らんとの約束ありしにも關はらず、滯在の日の長くなりしをいと悦びぬ、遂に八十八年の春歸國の途に上り途中母夫人の許を訪はんとの決心なりしかども、時情に障げられて志を果さず空しくワイマルに行きけれども、母夫人は女々しく之を恨まず其のフリッツに送れる書中に、「わが子がワイマルに安着せりとの報知を得て、大に安堵したり、神よ、願はくは彼をして益々健康ならしめ給へ、他は自ら成るの時あらん」と。

其の後ゲーテは普軍と合して佛國と戰へるカル、アウグスト大公爵の命に從ひ陣に趣きし時、途中母夫人をフランクフルトに訪ひ、八日間滯在して積年の情を語るを得たり、是れ千七百九十二年八月のことなりき。

當時ワイマルの大臣、及び大詩人たる彼は、如何にフランクフルトの市民の驚嘆、賞美する所となりしやは、同九月に市長が沒せしとき、市民擧りて彼の後任たらんことを求めしによりても知るを得べし、此時彼は大公爵家に對する義務と、報恩の感情は此の推撰を拒絶せざるを得ずと答へしかども亦市民を德としたりき。陣中に在る數月、彼は風腥く屍疊をなす戰爭を厭ひ十二月には再びワイマルに歸りしが歸途母夫人を訪はんとするの約束は實行するを得ざりき。

十六、戰爭中の狀態

太陽の西の海に入らんとして輝ける光明を放つに等しかる十八世紀末葉の[illegible]は、彼の佛國革命の亂にぞある。此の兵亂は唯に佛國にのみと〻まらで、其の根本となりし自由思想と共に、全歐洲に延蔓して、何時止むとも見へず、人心恟々として民は一日も安き思

ひぞなかりける。

消煙漠々、彈丸雨飛の歐洲となりし此の時代に當りて、母夫人の住居せるフランクフルトも、亦其非運を免れず(千七百九十二年)普墺連合して佛の王室を助け革命黨を斥けんとして軍を起し、佛國に迫りしより以來、干戈の斷へ間なく或は普、或は墺、或は佛軍の陣する所となり、然らざるも軍隊、捕虜の往來斷へず市民は一夜の安眠をも得ざる程なりき。

ゲーテ家は宏大美麗なるを以て軍隊のフランクフルトに在る時には必ず徵せられて宿泊所とせられ、三五の兵士を見ざる時なかりき、然れども、母夫人の剛毅沈重なる少しの恐怖する所もなかりき。

此の頃も書を裁してゲーテに起居を報じ、時情を通信することを惰らざりしを以て、吾人はよく當時の境遇と心中を知るを得るなり。

千七百九十二年佛國アイレッツを攻擊し、フランクフルトには普國軍滯在せしにより、市民の恐懼は一方ならず遁げ仕度をなす者あり、或は旣に遁げ去りし者もありて紛亂を極めし時にも母夫人は悠々として敢て擾かず曰く「我は彼の怯懦なる人々の皆去らんことを願ふ然らば彼等は怯懦心を他に傳染せざるべし」と、此の時ゲーテ家には普軍の大尉なる人と四人の從者と宿泊せしが母夫人は彼等のことを語りて曰く「彼等は此の家にあるは樂園にあるの思をなせり、然れども彼等の大食は驚くべし、げに餓死に瀕せる者の狀にして昨日豚の燒肉を馳走せしに其喜び云はん方なかりき」と。

斯く兵亂の渦中にあるフランクフルトなるを以てゲーテは母の事を憂ひ老公爵夫人に助力を請ひ屢々母夫人をワイマルに招きしも夫人は之を肯むぜず、聖書を繙きて之を讀み、望を神に措きて其の決して見捨て玉はざるを信じ、又其の家を大切に保護するを意として招きを謝し、困難に遇ふては「より惡くならざりしを

悦ぶ」と云ひ或は「吾人は事の行く儘に任じて煩悶せず出來得る丈け愉快に日を送らん蓋し我等は天命の輪の廻轉を止むる能はざるなり」と稱して自ら跳舞してけり。

千七百九十五年の春に至り一時平和條約成りしも翌年六月には既に再び兵動くに至りぬ、母夫人は其八月住居を移したりしが、新居よりは常に軍隊の運動を眼下に見るを得たり、やがて、其秋となりければフランクフルトの近傍に於て遠からず兩軍の衝突あるは明白のととなりぬ、然れども此の時も亦母夫人の綽々たる能く平生の快活に反かず曰く「我は愉快にして樂む、…戰爭の爲め毫も憂ふる所なし、……我が窓より墺國兵が病兵を運搬するの樣を望見す、……紛亂の狀態を傍觀す、……正午全家の窓を開きて食事す、……我は此の小さき家の家政を處理して餘力なし、……晩に至れば、演劇を見物す」云々と。

千七百九十六年七月佛軍來りてフランクフルトを砲擊し、民家の兵燹にかゝる者百五十餘なりしかば、剛膽なる夫人も遂に遁れ去るの決心をなして、オッフェレバッハに行き知己の許に身を寄せ甚だ優遇を受けたりしも亦我家を想ふて堪ふる能はず、僅か三日の後には復た其住居に歸りぬ、此の時のとなりき、母夫人の生家ラッキストル家兵火に罹りて、燒失したりければ市民は大に之を惜しみぬ。

フランクフルトが佛軍の占領する所となりてより稅を市民に課する甚だ莫大なりしがため市民の膏血は絞ぼられ、黃金の缺乏甚だしく母夫人も亦是れがために經濟上の困難を來したり、然れども能く費を節して其度毎に之を納め、其上親戚某氏の爲めにも若干の金を補助して、後日に至るも敢て其返却を促さゞりしとぞ、同九十七年カンポーフォルミオ平和條約なりて後佛軍更らに巨萬の金を徵收せし時母夫人のクリスチヤナー

（ゲーテの夫人）に贈れる書に曰く「課税を納むるが爲めに大に困却せしとき恰もよし御身よりの音信を得て悦び申候、而して自ら思ふに金來り金出づるもワイマルに在る愛する人々にして健全、且つ愉快に消光せる報をきかば我は安らかにねむりに付くを得候」と當時ライン川の左岸は獨逸領たるべきか佛國領たるべきかの問題起りて人心穩かならざる折なりしが、母夫人は云へり、ワイマルに在る愛する人々安全ならんには敢て右岸左岸の誰に屬するやを問ふの要なし」と是れ一見極めて愛國心に缺乏せる感なきにあらずと雖も、然も母夫人の堅く獨逸主義を採りて動かざる精神の勃々たるものありしことは下の事によりて知らべし、フランツ帝帝位を下り給ふに際し語を極めて之を痛嘆し、或は其書翰には「汝の親愛なる獨逸の母」と記名するが如き或は獨逸語と獨逸文學とを最も愛するによりても其の實意の存する所を知るを得べきなり。（未完）

文藝

十五夜物語

橋亭主人

夕日も西の山に舂き晩鳥も塒に歸る、田男も鋤を擔ひ家を指して行き歸牛も嬉し相な鳴聲を揚げて森の蔭に隱れる、今は澄み渡つた大空に暮雲の悠々たると青莚を敷いた樣な廣い畠に涼風粟の葉に戰ぐを見る許で、暮色は其中に蒼然として近づいて來る樣だ。

此る處に唯だ一人りの老爺が何處より來るともなく畦路を辿り〱に來て、そして寂しい、誰れも居ない畑中に立つて青々としたる景色を眺める、其顏色の如何にも憂き思ひあるものゝ如く、七旬を超へたる瞼の中に暗涙を堰く力もないのか時々大空を仰ぎ、大地に俯して啜り泣きをする樣に見へる。

彼れが此處に來て此くする事は今夕許りでない、毎夕畠人の居なくなると共に其影は見へるのである、實に彼れの畑中に突立つて啜り泣きをする時は、丁度數多の畠歸りの連中が己が家に歸へつて、脚の泥を洗ひつゝも豐年滿作の聲を揚げて老父や妻に喜びを傳へる時であるのに、不思議にも此老爺は愴然として畑の景色に涙を落すとは誠に如何なる悲しい事があるのか。

實を言へば悲しむのも眞に無理もない話、此老爺は嘗て昔し此村屈指の豪農で今より二十年前其家に妖兆な事があつて、其後といふものは家運段々に衰運に向ひ、夕暮の凮たつ毎に西に傾き、年毎に一町二町と他人の手に渡り、果ては二十幾町といふ田地田畑は十年の間に烟の如く失せて、儼かめしき門構も田畑と共に何時しか消へて了つたのである、然かのみならず、資産が減ると共に病人が出來て年に二回の野邊送りをした年もある、其れに引續き息子も嫁も年を追ふて冷い墓となり、結局生き殘つたものは自分と孫なる銀槌であつた。

財産は無くなつても杖とも柱とも頼む家取り夫婦が生きて居れば世の中は左程苦にもならねど、重ね〴〵の悲運には、最早神にも佛にも棄てられた心地、働いて生命の代をと思へど七十といふ此年、如何して鋤鍬を執つて日傭人足が出來やう、僅かに情けある人の袖に隠れて浮世を忍び、今年六歳になる銀槌を天地の力と頼みて今日まで露命を續けて來たのである。

されど生命は續くが、幾くら思ひ止まろうと思つても止められぬは過去、二十町餘の榮華の昔、棟の高い大門のあつた全盛の家、築山に代々忠義をした臥龍の松と雲を凌ぐ樣な樅の木、其れも何も皆な他人の物になつて、今は自分の身さへ置所なく人の涙を生命の露に僅かに日を送るとは、何たる有爲轉變の世の中ぞやと、今と昔を較べての悲嘆、思へば夢の樣でまた現の樣だ、

あの處に牛が鳴いて田を鋤く、あの處に主従打揃ふて笑ひ乍ら耕す、又た此處には稲の實が頭を伏せて見渡す限り黃色だ、あの大根畠、この粟畑、見れば見る程何處も夕景色は良いが、自分の物とては一つもない、されど此一面の土も草もたつた此間までは皆んな自分の物であつたのに、今は夕烟り許り。

斯様な過去の妄念が見る毎に、思ふ毎に募つて來て、恰も妄念の幽靈の様に、己が榮華の昔の影を見舞に來るのである、如何に老爺の身になれば此限りなき田畑が惜しからうか、毎夕彷徨ふて啜り泣きをするのも決して、決して無理でない。

されど人情にも限りある事、始めの二年や三年は右からも左からも、いろ〳〵親切にいたわつて呉れたものもあつたが、六年七年と過ぎる內には情けの度も薄らぐか又た慈悲深い舊との老人連も段々に亡くなつて行く、今は思ふ様に生命の杖が得られなくなつた。

萬行寺といふ寺の隱居が之を見兼ねて、私しの庭や墓の掃除を時々して呉るればよいから、此間まで物置にしてあつた四疊敷へ來なさい、出來る丈け氣を附けて上げよう程にと、いふ語を助け舟のやうに思ふて本堂の後の、其の四疊敷といふ暗い處へ孫と共には入つたのは去年の暮で、時は師走の事とて夕枯れの枝には暮れの烏が聲長く啼く、破れた窓の穴からは物悽い墓場の寒い風が吹き込んで半夜の夢も凍る次第だ、それでも、御隱居様のお情けといふ一念が阿彌陀よりも有り難く、二人りのものは其日〳〵の雨露を凌いで、毎朝毎晩の掃除は欠かさない様に勉める。

然るに悲しい事には今歲の七月、丁度盆前となつて御隱居は春からの風邪がつのり、とう〳〵亡くなつて了つたのだ、親族は勿論の事、村中の者ども〻善い人が亡くなつたとて皆な淚を流して悔みに來る、寺では葬式係が忙しく立ち回る、門內は蓮や大根を煮る竈の烟

りが盛んに揚がつて、なか〳〵の入込みである、なかには此時を付け込んでいろ〳〵の料理に腹鼓を打ち、摘み喰いに恐悦して蔭の方で笑聲を揚げるものがあるのに、老爺等二人りは一向に見えない、お貞といふ氣短か婆が襷をかけながら、「此の大事な日に二人りは何處へ行つて居るか恩のある御隠居様の御葬式にお椀一つも洗はないとはひどいじやないか」と、嘯やきながら本堂の裏の戸を明くれば、老爺は銀槌を抱いて頻りに泣いて居るのだ。

老爺の泣くのは他人の悲しみとは事が違う、固より哀別離苦の涙もあるなれど、先づ第一に其身に迫るものは明日からの世渡りの舟、是れまでは隠居あればこそ、「隠居様が亡くなれば私しら二人の生命も死んだと同様」とお貞婆に答へて、其まゝ俯首いて泣く、銀槌も亦泣く。

＊　＊　＊　＊　＊

今宵は八月の十五日、銀盤の様な明月が豊稔の田の上に浮いて出て、そして、處隈なく其光を分ける、大字小字は各々寄合をして酒樽を敲く、若い者どもは畔道畦路を傳ふて微醉機嫌に何んとか節を大聲に歌ふて隣村の戀を尋ねる、早く言へば一村は鼓腹撃壌大平の民が月宮に包まれて歡樂を盡くす様に見へるのだ、然るに、萬行寺の本堂の裏には月影はあるが、而かも其月影は、饑へたる二個の骨の上を照して居るのだ。

昨日は二食で今日はまだ一食、夜になつても食べるものがない、銀槌は頑是ない小供ゆへ食べたい〳〵といふて泣く、「祖父さん、お腹がすいた早く食べさして」と悲しさうに聲を曳く、其れも力がないので、泣き寢入り見たやうに消へて了う、また暫くすると同じ事を繰り回へして「まだか〳〵」と祖父の手に取り付く、餘り責めらるゝので老爺も「今ま貰らつて來るからな、最少しお待ち」と、當てもない返事をして慰める、銀槌

も之を聞て默まる、老爺は如何して可愛い孫の食い物を得やうかと頻りに考へ込む、其内に銀槌は疲れて眠つて了う、窓の外には月夜烏がかあ〳〵啼いて夜に迷ふ聲が聞へる、それも杳かになつて了ふた後は老爺も亦た眠つて了つた。

夜半の山風が薮を誘つて過ぎる其音で、不圖目が醒めた老爺は、銀槌の心細き寢呼吸を聞いて涙を拭ふ、其心は、自分は如何でも宜いが、此兒に如何して食べさそうかといふ問題、身を切る樣に響く。

今、老爺は何を思ひ付いたか、頻りに銀槌を喚び起し「飯を貰ひに行くから起きよ〳〵」と、兩手にて抱き上ぐれば、銀槌は目をこすりながら祖父の後に隨ひて庭に出た。

二人の影は夜半の地に落ちて渡場のある方に行く、人家のあるのは此方角ではないのに、何時も貰いに行く家は此方ではないのに、おきよ姉さんの家は此方でないのに、祖父さんは何ぜ此方へ來るのだらうと、稚な心に疑ひつゝ「祖父さん何處まで行けばお飯が貰へるの」と問ふ。

老爺は俄かに其口を塞いで「大きな聲をすな、今ま貰らつてやるからな」と周章てゝ止める。

暫く經つて二人は或る薯畠の傍に來た、二人は立ち停まつた、老爺は四邊を見回わしていふには「銀坊や、お前は暫く此處に立つて人が來るか來ないかを見ておいで、人が來たら直ぐに走つて來て知らすのだよ」と十分言ひ含めて、這ふ樣にして畠のまん中に行つた。

老爺は有心、薯を掘りながらも何か咎めるやうで落付かない、頻りに四方を見回はしてはこそ〳〵と掘る、銀槌は無心の童兒、祖父さんは何をするのであらうかと、心に思ひながら畠の邊りの路に突立つて、老爺の言ふた通り人が來るか來ないかを見て居る、暫く經つ

と老爺は兩の袂に一抔包み込んで呼吸喘々に此方に來て、「銀坊や、能く番をした、是れを」と薯一つを袖で拭いてやれば、今朝より饑へかつへたる銀槌は砂の附いて居るのも關はず直に噬み付く。

老爺は三日分も有うかと思はるゝ薯を風呂敷に包み代へ肩に掛けてもと來し路へと歸る、銀槌は甘まそうに件の薯をゴリ〳〵と噬んで嬉しそうに後に附て行く、今は老爺も堪まらず同じく食ひ乍ら歩るく、而かも若しや誰れかに逢うと大變だといふ疑惧心は其の中にある。

老爺は後を向いて問ふた「銀坊や、先き誰れか見ては居なかつたか」と。

銀槌は問はれて暫く考ふる躰だつたが、忽ち大空を仰いで「アヽ、誰れも見人はなかつたが、あのお月樣ばかりだつたよ」と明皓々と輝く天上の月を指して答へた。

天神地祇！此一言、寸鐵の閃光愕然其胸に突き込んで、總身は電氣に打たれた樣だ。

老爺が此時の正躰は月を見詰めて居る木像の樣に、殆んど五分の間といふものは寸分も動かぬ、忽ち、涙急き込んで「銀や、銀坊や、其の薯を捨てゝ了まへ、すてゝしまへ」と叫び乍ら、自分も噬みかけたる片れを打ちすてゝ、其背かなる風呂敷包みを投げ出した。

銀槌は其の樣子を怪しんだ、そして問ふた「祖父さん何ぜ棄てゝ了うの？」

「棄てよ〳〵、毒がは入つて居るから早くすてよ」と老爺は答へた。

老爺は銀槌を抱いて涙を飲みつゝいふ「あゝ能く言ふた〳〵、お月樣が見て居つたとはよく言ふた、賢てい兒だ利巧だ」と、其を横抱きに抱いて月下に暫時蹲踞つた。

銀槌が言ふた彼の寸鐵の一言は、素より無心にして言

ふたので、唯だ眼界に映ずる彼の光つた圓るいものより外に、何物も見出さなかつたので、先刻見張り番の時も、唯だ仰のいてお月様は幾歳と問ひながら眺めたので有う、つまり言へば天月の如き銀槌には月が見て居らうが頓着なけれども、罪を作りつゝある老爺には、一言忽ち寸鐵だ。

夜もます〳〵更け渡れば月色いよ〳〵明かなれど、雨人の影は彌益して黒くなる、とぼ〳〵と歸る道すがら、老爺はお月様に向つて、幾たび熱涙を注いで御詫びをしたか知れない。

暗い本堂の裏に歸へつて銀槌を寢かした、食物を得ん爲めに出て行つたれど棄てゝ戻つて來た、矢張りもと〳〵だ、明日は食物とて何もない、況して其先きをやだ、餓死は眼前に見へて居る、而れども老爺は決心した、「もう〳〵死んでも盜んだものは食はぬ」。

其夜老爺はつく〳〵と己が身の過ぎ來し方を想ひ、今の身の上を思ひ、今夜の仕義を思ひ、其心の無下にも卑しふなりしを悲しんだ、榮へし其昔は人を惠み、人をいたわり、毎朝毎夕神社佛閣に詣でゝ手洗ひ口嗽いた事もある、心得違いの者が貧ゆへに盜みする事あれば自分は說き諭して改心させた事もある、然るに自分は何時の間にやら此樣な淺間敷い心となつて、人の畑のものを盜みするとは、嗚呼誠に我れながら知らなかつた」と夜を徹して後悔の涙堰きあへず。

明朝、薯畑の持主の家に行つて、前夜の不始末を陳べ、逐一の次第を主人の耳に入れて、何分の處置を請ふた。

此事が忽ち一村の評判となつた、すると、是れまで此老爺に向つて多くの同情なかりしものも、又たいろいろ恩義があるのを忘れて居つた族も、恰も喚び醒まされた樣に、不便だといふ觀念を起して、薯畑の主人が發起となり應分の喜捨を募つて、老爺救濟の回狀を

回はした。

此回狀が各有志家の間を回ぐりつゝある間又は其の前後、二十年前の榮華時代は古老の口々より話された、即ち村の古い歷史から引出されたる字の名や山の名、皆んな其家と關係を持つて居るので、年若い近代の村人は始めて彼の老爺の由來を知つた位だ。

＊　＊　＊　＊　＊

喜捨は相當に集り、二人の生命は此處に救はれた、老爺は其後二年間生き存らへて、遂に草葉の蔭の身となつたが、銀椎は或る寺に貰らわれて當時は其寺の住僧に坐つて居て、毎年十五夜の月には讀經の聲半夜を徹するとの事、余が數年前に聞き傳へたるは此十五夜物語。

白菊

桐酒舍女史

小男鹿の鳴音はきかぬ、都に住みても物憂かりける、此頃の友とし馴れしは筆なるにいかゞしけん、あやに重うなれる心地すれば、今はと文机押やりて暫時外の面を、眺むれば常に見もなれぬ、綾錦の薄衣かつぎたる姬、只一人り物思はしげに門邊に立たまへり、あないぶかしと思ふほどに妾は、ほのかなる聲もらして、此妾は春園よりまゐれる者なるが、此家に菊の少將のおはしまさは、露はかりの逢瀨ゆるしたまへとなり、わなみは、驚きてそは、門やたかへ給へるならむ、かゝるいぶせき宿にいか傳、さる貴人のおはさむや、とこたへしにさなつゝみたまひそ、御薰りにもしるきものをとて、つといり給ひぬ、姬は戀にやくるひ給ふと、ひたとあきれてと見れは、いつのまかおはしけむ、白き御そきたまひたる若き男君、わなみがかたへに居たまへり、是そ菊の少將ならん、姬はひゝとすかりつゝ、身をふるはしてうちなけき、實にたのみなきは、浮世のならひと兼ても聞て、侍りしか妾はいかなるすくせ

にや、樂しかりつる春園に遊ぶと見しも、夢の間にて
梅に櫻に見捨られ、睦みし友も大方は夏野の、露と消
えぬるを、妾はからくも存生て、ふた丶ひ匂ふ秋園の、
君に千歳を契りしより、うきを忘れしひまもなく、ま
たも强面く振捨てかくろひ、たまふは怨し丶迚もかく
ても、なか丶らぬ妾か命よし御心に、秋風立ともゑは
しのゑにしと、忍ひ給はヾいつの世にか、君か情をわ
するべき、わかれまつりしかなしさに彼方此方と、さ
まよひてやう／＼めぐり逢ひぬるを、あはれとおぼし
たまはすやと、ゑむしたまへは、菊の少將あまた丶ひ
さたんしつ丶、さなのたまひぞ胡蝶姬、我とてわくと
いふにあらねど、思はぬ人に引わけられ、此處なる刀
自か伽する事と、なりはて丶今日まで憂を忍びつるも、
思ひ定めし事あればさばかり、めヽしくかこつべき、
菊は千とせとた丶へらるれど、かしらに霜をいたヾけ
ば、またヽくひまに枯ふして、あはれと見なむ人もあ
らし、さはいへ我も唐土にては、五柳先生に、愛はや
され、また皇國にては、楠氏の籏印となりて、湊川に
香んばしき名を流し丶かば、身は秋毎に枯る丶とも名
は萬世もかをるへし、また其方も春園の胡蝶とて、實
にうるはしき姿をば文に歌にた丶へらる丶は世々に變
らぬ樂みならん只いたつらに夢の間の樂しみをなねき
たまひぞ、こは我等がうへのみにもあらし、萬の物の
司てふ、人も敎にたかひなば、世に埋れ木となりぬへ
し、かひなき草はかなき虫も、心は高く持つへけれど、
信實こもれる事の葉に、姬もさこそとさとりけめ、こ
丶ろよけなる顏色して、綾の袂をひるがへし、立よと
見ればひら／＼と、中空たかく舞ひ登るをと丶めまほ
しと、身を起せばこは怠りの夢にして夕日に匂ふ、白
菊に秋の胡蝶のたはむる丶もをかし

露ばかり世の塵すゑぬ白菊の
たかきかをりを心ともかな

年少詩人と編輯員

年少詩人「昨日差上げて置いた拙作は如何でした、
編輯員は詩人の耳に口を寄せて
編輯員「生憎隣室に貴女達が來て居るので私はわざと貴作へ對する
　　意見は差し控ねます

小説

一夜の客　(上)

松ケ枝女史譯

一歳秋の夜、爐邊を圍んで打ち集ふ家族があつた、爐には山間の清流から拾ひ上げた漂流木、絶壁から壓し落された大木の裂けたもの、さては又乾いた松の實など堆く燃やされて炎々たる焔は部屋までを輝かして居る、主人主婦の容貌は嬉しそうでも眞面目な處があり子供等は聲高に笑つて居り想領の娘は鬼も十七八の眞盛り、若い「幸福」の模型と申さうか、爐の最も暖かい處に坐を占めて靜かに編物して居る祖母さんは年波重ねた「幸福」の模造かあゝ誠に和樂の風が充ち〳〵て見える、實に彼等はニューイングランド州中寒氣の最も烈しい場所に春の如く暖かき家庭を樂んで居るのです、彼等が家の建つてありましたのはホワイトヘルスのノッチュといふ處で年中風の鋭い殊にも冬は情けない寒氣で――北山下しろの寒風がサコの谷へ下りる前にその新手を悉くこの一戸の小屋に當てゆくのです。」彼等の住所は斯くまで寒い計りでなく、危險な場所ですなぜなれば山が直ぐ頭上に峻はしくそびへて往々石を轉ばしますので眞夜中に驚かされた事も度々でした。

丁度今娘が何か仇氣ない滑稽を云ふたので家内中が笑ふて居りますと、例のノッチュの嵐が吹き來つて小屋の前に一寸休むやうで――谷に下りて行く前に悲みと

歎きの音をもて戸を叩きつゝ――調子に何の異變もないのですが暫しは何となく一同の心が悲くなりました、然し風が過ぎ行きました時今まで風の爲めに聞えなかつた足音がして戸の鐶が外づさるゝ音がしたので、一家は又忽ち陽氣に歸りました。

彼等は飽くまで寂漠の地に住んで居りましても猶日毎世間と交通が出來ました、抑も此のノッチユの關と申のは一方にはメイン州、他方にはグレンマオンテンス幷にセントローレンスの海岸とを結ぶ內地通商の生血が不絶流るべき樞要の通路で定期發着の乘合馬車がいつも小屋の戸の前に寄せられ、又己が杖の外何等の同伴もない旅人などは山のがけを通り拔いて谷の最初の家が見えるやうになるまでに餘りの寂寥に沮喪せぬ爲めとて、必ずこの小屋に立ち寄つて一言二言交はして行くが常でした、又ポルトランドの市場に向ふ茶商などは一夜をこゝに明かす事も珍らしからず、折ふし獨身の男などは通例の時刻より少し遲くまで起きて、別るゝ時密と山家育ちの乙女に接吻を望む心を持つものもありました。

旅人が只だほんに食飮代と宿賃とのみ拂ふて猶價以外に積もられぬ親切を受けたのは實に是等昔の客舍でした夫故當夜も外の戸と內の板戸との間に足音が聞えますと直樣丁度誰ぞ自分等に屬して居る而かも同運命の下に繋がれてある人かなぞを迎ふるやうに祖母さんも子供も一家中が立ち上りました、戸は開かれて入り來つたは一人の青年でした。

人影もない極寒の境を夜中唯だ一人旅をする者には、無理もない丁度失心したやうな憂愁の顏を帶びて入つて來たが懇に温かい歡迎の樣子を見まして忽ち晴々と樂しそうになつた。

自分の前垂で椅子を拭ひ居た祖母さんから小さな腕を擴げて寄つて來た子供に至るまで、一同に向つて彼の

心が湧き出るやうな感動が致しました、又娘の一瞥一笑は忽ち旅人を無邪氣に而も懇な境に導いた、旅人は口を開いて

「あゝ火といふものは實によいものです、殊にこんな樂しい家族に圍まれては猶の事、あゝノッチユは丁度大きな風筒のやうですパルレットから此方續けざまに顔に吹きつゞけられたので、全然痲痺れたやうです。

「それぢやウォルモントの方にお出になるのですか」

と青年の肩から輕い行嚢を外づすのを手傳へながら家の主人が問ふた。

「えゝ、ブルングトンまでゞすが前途がまだ中々です、今夜クローフォルドまで行く筈でしたが、こんな路を歩いては思ふやうにはかどりません、然しなあに構はない此のよい火とあなた方の愉快なお顔と見ましたら何だかあなた方が態々自分の爲めに火を燃やして自分の到着のを待ち受けて下さつたやうな氣がします、まあ今夜はお仲間入をして自分の家にある積りになりましやうな」

氣輕な旅客が丁度自分の腰掛を爐の側近く引き寄せますと何やら表の方で重い足音のやうな響が大股の早足で山の嶮はしい側から馳せ來て急いで小屋の前を通つて向ひの崖に行つたやうに聞えました。

一同暫ばし呼吸を止めましたその音の何物たるを知り居りましたので、漸く自分に歸つた家主は申しました

「此の山は折々私共に石を投げてよこします、私共が忘れぬ爲めに、或時は實に頭を垂れて今にも落ち來ると云ふ風で嚇かす事も度々ですが何、私等はもう此處には古い住民で萬事呑み込んで居てさ、それにもし天窓の上に落ちかゝつて來ても近くに大丈夫な避場がありますから……」

旅客は此爐邊で熊の肉で夕飯を畢へ而して性來の快活な樣子で、丁度自分も山育ちの仲間であるかのやうに

隔てなく一家族の中に自分を据えた。

彼は品位の至て高いが猶飽くまで優しい性情を有つて居る、金豪や權門の前には膝を屈する事はないが賤の伏屋の戸の前ならばいつも喜んで頭を下げ貧しき人の爐の側ならば樂しんで兄弟なり息子なりのやうに致します、今やノッチユの家庭に宿つてニューイングランド獨特の温かき單純な感情とノッチユを圍む山の小徑や、峯や、谷、さては又一家の住ふ其地位の危險な處などより自然と作らるゝ天然の詩に痛く打れました。」

彼れは單身遠く旅して居りました、彼の全生涯は實に寂漠な路でした何故と申に彼の氣高き性情はそうでなかつたなら彼の友となつたかも知れぬ幾多の人から遠ざかつて居るのです、家族の方でも亦假令至て親切で至つて丁寧ではあつても猶一重、他人の踏み込み能はぬ奥殿が家族の中に冥々裡に存在して居るやうに思ふて居りましたが、當夜計りは豫言的の同情が思はず知らず青年の心を驅つて自分は高等なる教育を受け、優美なる風采ある身なれども、單調なる山賤の前に自分の心を注ぎ出し、彼等をも同じ信任を以て我に答ふるやうに致さしめました、嗚呼眞に同一の運命の下に繫がるゝ者は血を分けた關係にも増して親密なるは多く例のある事は、此青年の性情の秘訣は高い見えざる大望でした。

彼は目ざましからぬ生涯を送ることは忍ぶことが出來ましたが墓に至て忘れられざることを願つた、熱心なる願望――永く養はれたる願望が終に實際のやうになつて今は人に知られず居るとても、榮光が彼の前途を輝らすやうに思はれるよし縱令彼等が自ら其路を踏み居る内でなくとも――然し幾年の後彼の子孫が今は現在なる冥朦の裡を覗き返す時に彼の足跡の輝きしを尋ねて非凡の天才が人に知られず搖籃から墳墓に過ぎ去つたと追惜することがあるだろふと思望いたしまし

た。
兩の頰には紅潮を漲ぎらし兩の眼は熱心の爲めに輝きつ青年は言つた「あゝまた私はまだ、何事をも致しません、若し明日此の世を去るのであつたなら何人もあなた方程私を知つて下さつた者はありますい無名の一青年がサコの谷から、晩景に登り來てその夜此處であなたに心を明けて曉方ノッチユを過ぎ去つてその後は二度と見えないと噂をされましやう、「彼は何人であつたか」とか「旅人は何處に行つたか」とも尋ぬる人はありますまいが、私は私の運命を果さぬ内は死なれません、その後ならえゝ、「死」は來ても喜びます、碑石が建てられますから。
無形の想像から湧き出た一種自然の感情が絶えず流れるので假令自分等には全く新らしい感情であつても猶一家族をして彼の青年の感想を會得せしめ得ました。」
青年は自分の熱望が知らぬ間に自分を深入りせしめたのに氣付いて赤面して「貴下は笑つてますね、」と娘の手を取つて自分も笑ひながら言つた「貴下は私の大望が何か馬鹿らしいことのやうに思つて居ませう只だ近所の群衆が見物に來て欲しい爲め計りでワシントン山の頂上に凍え死にでもするだらうと思て居ましやう、然かしあの山なら人の型像の臺石としては立派なものです。」
娘は顏を赤らめながら答えた「私は人から何と思はれないでも好いから此の火の側にかうやつて靜に坐つて、樂しく滿足で居る方が餘程ようございます。

丁寧な言葉

姉「靜におしよ、次の間にお客さんが見えてだよ
弟「姉さん、お前どうして知つてるんだい、行つて見たのかい
姉「なにさうではないが阿母さんのお話か阿父さんに急に丁寧になつたもの

談叢

世界古代の航海談—其起原

蘭溪生

航海の術は、何れの時代に始まりしか、何れの國を以て發頭となすか、將た何人を以て之れが嚆矢となすかは、古來諸說紛々として、或は支那人なりと云ひ、或は歐羅巴人なりと云ひ、未だ其の眞僞を確むべき定論あるなし。

然れども吾人の祖先が、木片又は木葉の水面に浮べるを見て、之れより推考して、最初に大木の切片を利用して水を渡るの方便に供し、次に之を編んで筏を造り、更らに大樹を凹鑿して獨木舟を造るに至りしは、蓋し疑ふべからざるが如し。

埃及及フイニシヤ

歐羅巴各國が、初めて冒險事業を海上に試みたりしは、地中海にてありき、地中海は南、埃及を控へ、北は希臘及び其殖民地に接し、東は西利亞及びパレスチンに連る、歷史の開卷第一に於て、吾人は先づ此地中海の沿岸に於ける三海國民あるを發見せん、然れども此中の二ヶ國が博せし、海事上の光榮は、他の第三國の興起せしが爲めに漸々消滅せり、第一は即ち埃及にして、吾人は其海事的行動に就ては之れを知る甚だ罕れなり、第二はフイニシヤ國にして埃及に對する海事上の好敵手なりしも、正史の之れを記するもの甚だ少なし、而して此兩國競爭の間に於て、嶄然頭角を露はせしは希臘にして、兩國が與へたる海事的思想は、彼れ着々之を實行して遂に全局の功名を收むるに至れり、埃及及フイニシヤ兩國の航海者は、其性格に於て全く相異なれり、前者は怯懦にして勇往果敢の行動を爲す

能はず、其航する所は僅かにナイル河上を往復するに止まり、海上に突進するが如きとは極めて稀れに、只た眼前利潤の見込あるが爲めに、辛ふじて自家の怯懦を制して小亞細亞の海岸を徘徊せしに過ぎず、之れに反して後者即ちフィニシャ人――渺邈にして憶想し難き古代の國民――は、埃及人よりも一層大膽勇邁にして、常に外海に乘り出すを好めり、有名なるソロモン王が、フィニシャ王ヒラムの援助によりて航海せし當時の有樣は、明かに舊約聖書に記載せらるゝ所なり、」

元來フィニシャ人は、商業的國民なりしが故に、地中海上の貿易權は、一に彼等の掌握する所となりしが如し、少なくとも彼等は古代に於ける最も大膽なる、最も經驗ある、而かも最も偉大なる航海發見者たりしなり、

彼等は斯の如くにして、數世紀の間天下に敵を見ずして、自在に海上を橫行し、到る處彼等の殖民地を開拓せり、カルセーチの如きは其中の偉大なるものにして、後遂に地中海の覇權を握り、併せて世界の大帝國たらんと欲して、雄風四隣を壓せし當時の羅馬帝國と相爭ふの已む可からざるに至れり、以上はフィニシャ國が、海上に於て成せし事業の大畧なり、吾人は玆に一轉して、希臘國古代の航海に關する、美はしき古傳の梗概を叙せんとす、

希臘――其古代の地理的思想

希臘最古の地理書の說く所に依れば、地球は平かに且つ堅固なる陸土の結合せるものにして、ヘラス（即ち希臘）は多少其中心に近き所に位し、地中海其沿岸を圍めり、人若し此中心を離れて遠きに行くときは、地理は漸くに不明となり、遂に荒漠の原野に彷徨して再び還るを得ず、其原野の北の果てには、「ハイパボーリアン」と稱する怪異なる人種の捿息するあり、東北の端には「サイシア」人種あり、其極南炎熱燒くが如きの

下には、「エティヲピヤ」人種の居住するあり、而して此等遠隔せる土地の外界は、一帶の大洋流ありて之を環れりとなせり、

其宗教的思想

彼等又信ずらく、宇宙は三神祇の支配する所にして、其中ジユース(一名ジユピター)神は天地を主宰し、ヘーディース(一名プルートー)神は黄泉を司どり、ポシードン(一名ネプチユーン)神は海洋を支配し玉へり、此三神は何れもクロノス(即ち『時』)神の子孫兄弟にして、其下には各々幾多男女の神祇ありて之れに隷屬し、以て山川林野を支配し玉へるなりと、

吾人が今玆に語らんとする所のものは、半は荒唐無稽の仙談に屬し、半は稍や事實を髣髴し得る所ありて、一概に排斥すべからざるのみならず、多少眞理の基礎を有するを以て、此等說話の、古來希臘の優美なる詩歌によりて、吾人に傳へられたる所を叙して、以て讀者を煩はさんとす、

イヲルコス王イーソン――ペリアス

古昔セツサリー州のイヲルコスにイーソンと云へる一人の王ありけり、王の異腹の兄弟にペリアスなる者ありて、王國に反逆を企て終にイーソンを放逐せり、抑此ペリアスの素生は、頗る曖昧にして、或は曰く彼は或る女神の子にして、其生るゝや直ちに山中に捨てられたり、其時何處より來りけん一匹の荒き牝馬あり、散々に彼れを蹴り何處ともなく走り去れり、適々牧者羊を曳て此處を過ぎしに、叢中に一人の赤兒ありて、其顏は太く傷つき、剩さへ馬の蹄の痕の青々しく殘れるを見て、最と哀れを催ふし、携へ歸りて彼を養育し、名をペリアスと呼べり、長するに及びて其性至つて暴々しく、日々無賴の牧者盜賊と交遊し、終に其援助に藉りて、彼れの異腹の兄弟なるイヲルコス王イーソンを國外に放逐し、自ら代りて之れを支配するに至れ

り、

ペリチン山――カイロン及びゼーソン

イーソンは彼れの獨子を伴ひ、悄々として國を出て、獨り自ら曰く、我子は王國の世子なれば、宜しく之れを山中人の知らざる所に隱匿して大切に保育せざるべからず、ペリアス若し之れを知らば、我子は必ず彼れの毒刄に觸れんと、斯くて彼れは住み慣れし濱邊を後に見て、奧深き山中に分け入り、アノーロスの急流を渉りてペリチン山に攀ぢ登れり、山は嶄乎たる峻嶺にして、麓より山腹に至るまでは、鬱蒼たる一帶の深林に蔽はれ、其絶頂は四時雪を絶たず、歩一歩路漸く險はしく、足漸く疲れ、兒は終に父に從ふて歩む能はざるに至れり、父は已むなく兒を携へて攀ぢ登れり、忽ち見る千仭の峭壁眼前に聳ゆるを、仰げば白雪皚々として其頂を埋め、俯せば芳草萋々として、脚下一面の斜波を爲し、處々に奇花ありて異薫を放てり、而して此峭壁の下に一大洞穴あり、洞口に一老翁を見る、毛皮の褥に坐して暖を取るが如き容子なり、近づきて之れを視れば人にあらずして、カイロンとて半人半馬の怪物なり、然れども此怪物は、地上に於ける飛禽走獸中の最賢者にして、又最も親切なるものなりき、カイロン二人の來るを見るや、洞を出で丶之を迎へ、問ふて曰く、子はイーヂラスの後裔イーソンに非らずや、何が故に此に來りしやと、イーソン備さに來意を語り、且つ托するに彼の愛兒を教養して、天晴の勇者となし、以て父の仇を報ずるに至らしめんとを以てす、カイロン之を諾し、轉じて兒に向ひ、問ふて曰く、兒よ汝は我を畏る丶か、但しは我と共に此洞に住むを厭はざるか、晩に及べば、汝の好き伴侶は皆歸り來るべければ、彼等と共に帝王たるの遊戯を爲さば、亦樂しからずやと、兒は此言を聽き、寧ろ洞穴の不思議なると、且つは友達と遊び戯る丶の愉快を豫想し、欣然としてカイロ

ンに行けり、カイロン即ちイーソンに云つて曰く、乞ふ心を勞する勿れ、兒は君の家國を興復するに非らずんば、再びアノーロスの流を渉らざるべしと、

イーソン流石に離別を悲しみ、辭するに臨んで愛兒を抱きて泣けり、兒も亦泣て止まざりしかば、カイロンは直ちに床上の琴を把り來りて之を彈し、以て僅かに兒を慰めたり、既にして夕陽山背に沒し、暮禽塒に急ぐの頃、洞外俄に喧騷の聲の聞こゆると共に、幾多の健兒は打揃ふて歸り來れり、此等の健兒は、强者のヘラクルス、智者のアスクレピアス、ペリウス、イーニアスなど呼べる輩にして、後皆希臘の英雄となりしものなり、

斯くてイーソンの兒は、此等の健兒と共に、日々カイロンの薫陶を受けつゝ、十年の星霜を此山中に過ごし、走ると、泳くと、拳鬪、相撲、弓術、乘馬等を初めとし、或は彈琴、詩歌、製藥、醫療の術に至るまで、悉く學び得たり、殊に彼は藥草を用ひて、傷を癒すに巧みなりしを以て、カイロンは、彼れをゼーソン(ゼーソンとは醫者の義)と名けたり、彼れは今や身長偉大なる天晴の勇者となれり、誠に居は氣を移し、境遇は人を化するとかや、彼れは幼少より斯く長く山中に人となりし事とて、殆んど彼の父及び其家國を忘却するに至れり、

ペリアス及び神託

却説イヲルコス王國の簒奪者ペリアスは、威權赫々として全國を統轄し、民の膏血を絞つて富巨萬を疊ね、身は金殿玉樓の内に在りて、百事意の如くに暮し居れども、只だ一事の日夜彼れを苦むるものありき、加之イーヲラス家の一子は、片足草鞋を穿ち片足は跣の儘にて彼れの國に入り込み、彼れを王位より放逐すべしとの神託は、彼の心を警戒せし上に、復た睡臥中右と仝樣の事實を夢みたるを以て、日夜戰々兢々として痛く畏れ居たり。

ゼーソン山を下る――アノロースの急流

ゼーソンはペリチン山中に於て倔强なる勇者となりしと共に、彼れの朋輩も漸次に離散して、ヘラクルスはシーブスに行き、アスクレピアスはペロポニースに去り、ペリウスは海中の或る女神と婚し、イーニアスはトロイに赴けり、ゼーソン一日山上に立ち、渺茫たるセッサリーの平野を望見して、彼れの舊友を想起し、彼等の跡を追ふて世界に出でんことを欲し、感慨禁ずる能はず、偶々人あり、彼に告げて曰く、視よ眼下一帶の美はしき平野及び海に適なる都市は、正さに之れ子の權內に屬するものに非らずやと、ゼーソン歸りて之をカイロンに問ふ、カイロン心に思へらく、時機至矣と、即ち問ふて曰く、ペリアスは恐るべき勁敵なり、汝彼れと戰ふに充分の勇あるか、曰く我れ必ず能く彼と戰ふを得ん、又問ふて曰く、汝イチルコスに至りて之れを治むるの前に、人の未だ曾て至らざる野蠻の地を通過して、幾多の艱難危險に逢着せざるべからず如何、曰く人の未だ至らざる所を行く、之れ我の幸とする所なり、乞ふ藉つて行かんと、カイロン其終に屈すべからざるを見、彼れに許すに山を下ることを以てす、ゼーソン雀躍して別をカイロンに告げ、匆々山を下り、時には峻阪を奔り、時には荊棘を排し、漸くにして葡萄樹、橄欖樹の繁茂せる山の中腹に出でたり、脚下は即ちアノーロスの急流にして、雨後積水暴溢し、奔湍怒號せり、

ゼーソンは此峻流を物ともせず、渦まく波中に跳り入り、豫て學びたる水練の術を以て、見事に彼岸に泳ぎ着けり、暫らく呼吸を繼がん爲めに草の上に平臥し、やがて結束してイチルコスに向ふて出發せり、偶々彼れの穿ちし草鞋の片足を水中に脫遺せしを發見せしも、最早詮なきことなれば、其儘に進み行けり、而して彼れの仇なるペリアスを日夜苦めつゝある神託の如何

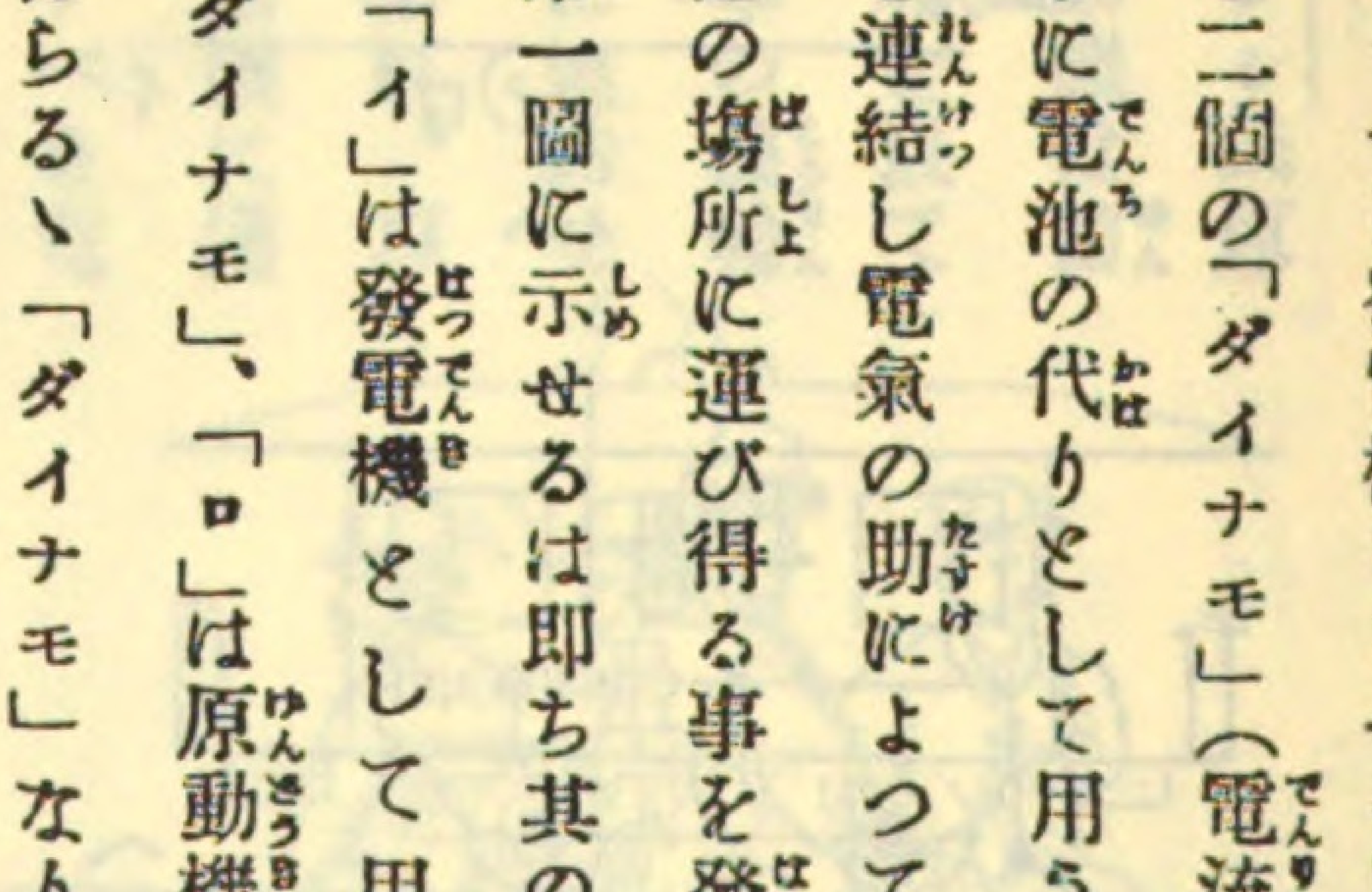
に就ては、彼れは少しも知る所あらざりき、（つゞく）

科學

電氣の力

D. Y. 生

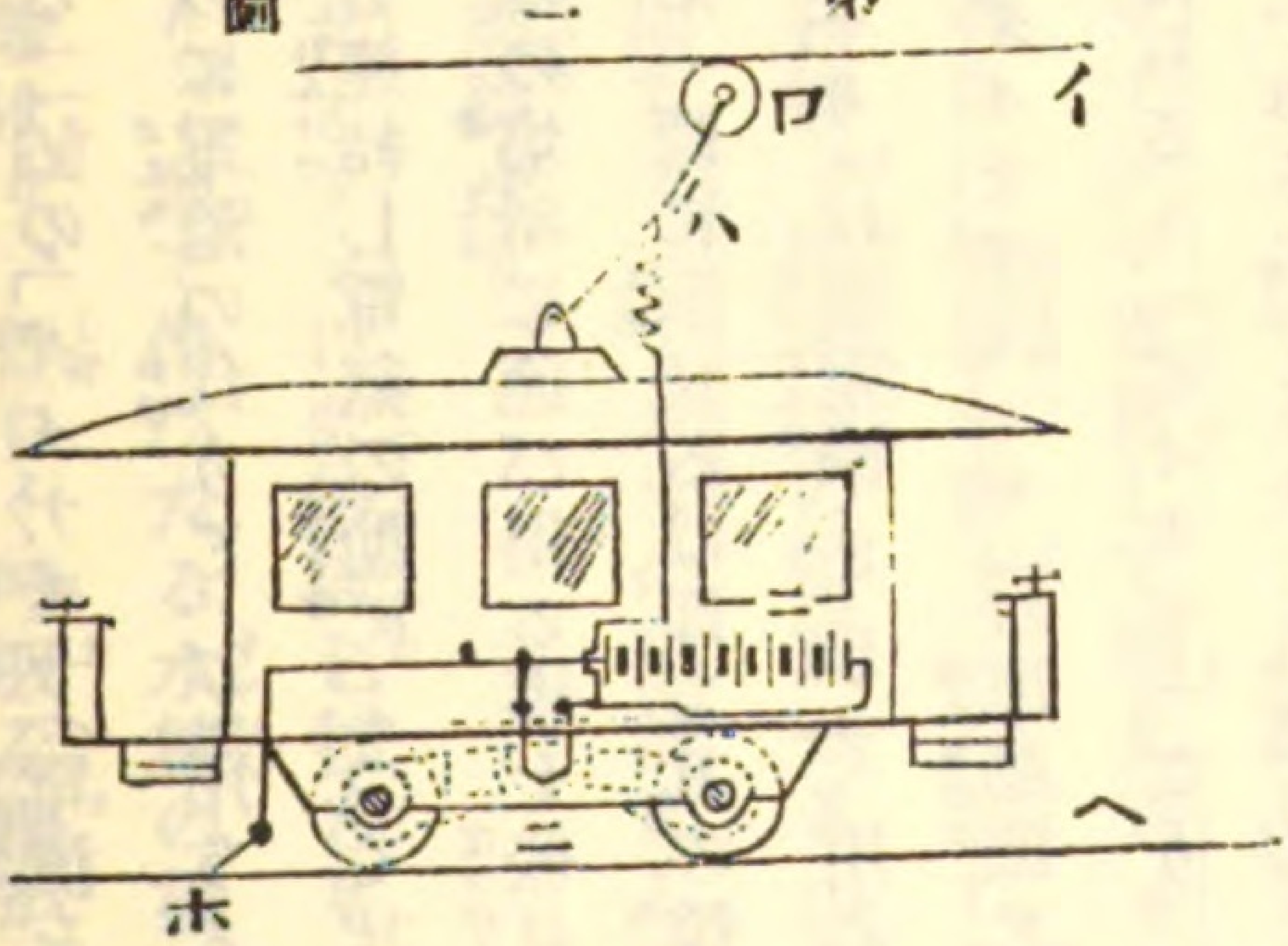
一度電氣磁石力の發見せられてより、ファラデー、パアロー等の學者は電流より物の運動力を得んがために諸種の器械を案出し、千八百三十一年に至りてはジヨセフ、ヘンリーと云へる亞米利加人、遂に磁電原動機（電流によりて生ずる磁石力を運動の原力として使用せるもの）なるものを發明したり。然れど此等の諸器械は皆「ウオルタ」式電地（伊太利の物理學者ウオルター氏の發明せるものにて間斷なき流動電氣の流通を起さしめたる最始の裝置なり）よりして其の電流を生ぜしめしものなりしかば、未だ完きものとは稱し難かりし後ち廿年程經てジヤコビイと云へる人「ダイナモ」發電機（電池を用ゐずして强力の磁石極に螺線を廻環せしめて電流を起すもの）も亦原動機として用ゐらるべく一を發電機とし一を原動機とせる二個の「ダイナモ」（電流を起すために電池の代りとして用うるもの）を連結し電氣の助によつて其の力を他の場所に運び得る事を發見せり。第一圖に示せるは即ち其の摸形にして「イ」は發電機として用ゐらるゝ「ダイナモ」、「ロ」は原動機として用ゐらるゝ「ダイナモ」なり。而して「ハ」なる線によりて互に結び付けらる。此の外他の任意の器械力を要し之によりし「イ」の「ダイナモ」に電氣力を生ぜしめ「ハ」を通じて「ロ」の原動機に及ばしむるなり、而して此處に其の電氣力は又



第一圖

器械力と變じ強盛なる働をなすに至るなり。然れど其の電氣力が「ハ」を通じて「ロ」に達する間に飛消せらるもの少なからず、今迄の實驗によれば百馬力の中十乃至廿五馬力は用ゐられずして失はるゝなり。されば千八百七十年にグラム氏「ダイナモ」を改良して圈輪感應機（電流の交換流通を斥け同一方向を取れる電流のみを得るもの）を造り出すまでは十分に其の力を用うる事能はざりし。グラム氏が此の發明は實に電氣社會に一大勢力を與へ、爾來三十年驚く可き進歩は其の間に見らるゝに至りぬ。

電氣鐵道のはじめて造り出されしは千八百七十九年にして、シーメンス氏はじめて之をベルリンに試みたり。而して其の時の設計に依れば電流は或る發電所より軌道を通じて各車輛の原動機に送られ、其の原動機の働く事によりて車輛は回轉せらるゝなり。然れど軌道に通ずる電流をして地中に散逸する事なからしむるは頗る困難なる事にして其のため此の設計は全く其の効を奏する事能はざりき。玆に於てシーメンス氏は尚一層の工夫を凝らして千八百八十一年に電氣博覽會の巴里に開かれし時は更に新なる設計を以て更に完全なる電氣鐵道を造り出したり。



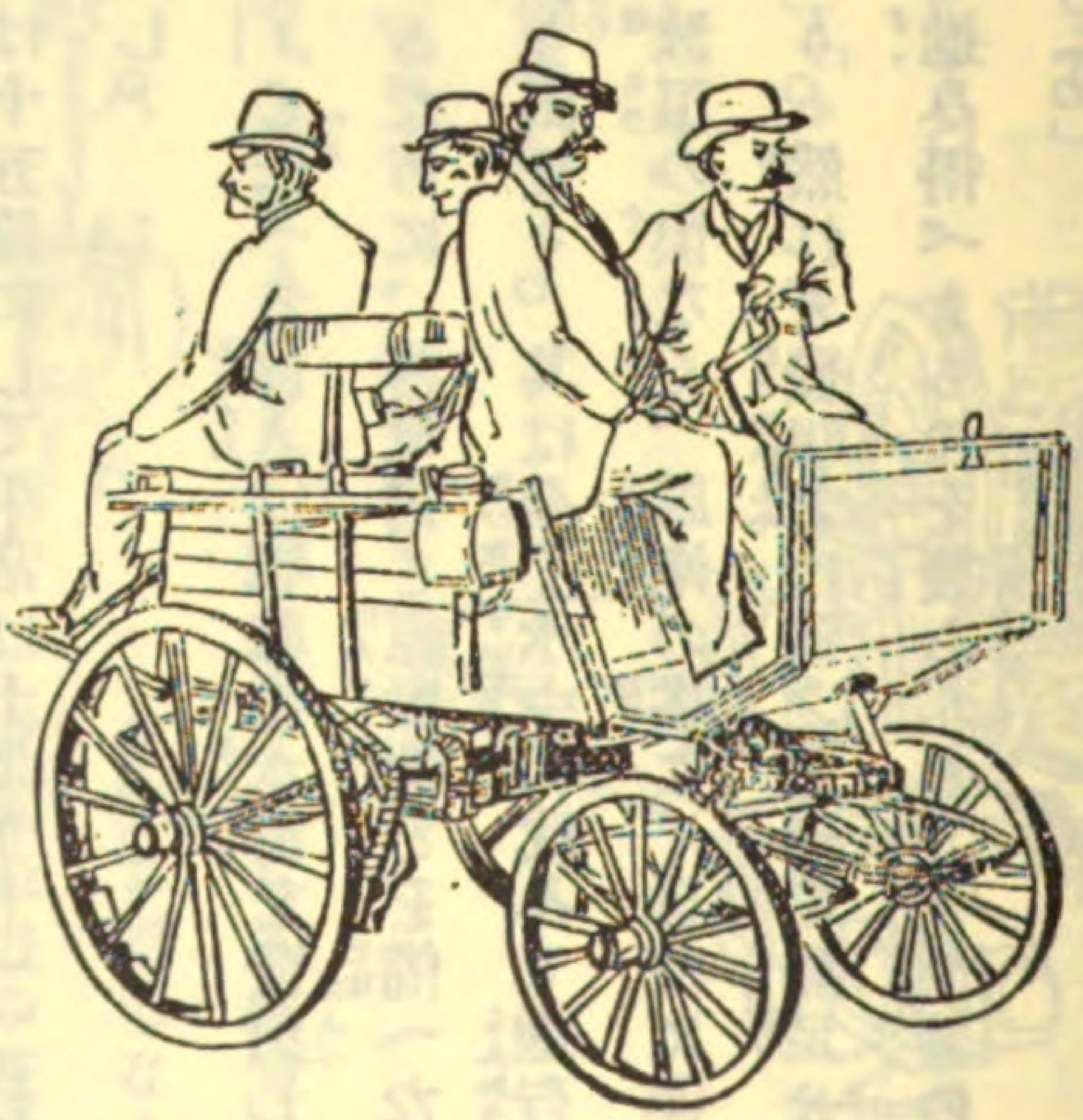
第二圖

此の方法に依る時は電流は前の如く軌道を通じて送られずして、別に電信線の如き高く空中に銅線を引き、之れより車中の原動機に通ぜらるゝなり。第二圖に於て「イ」は空中に懸れる導線にして其の一端は發電機の積極に結び付けられ、「ロ」は車と共に回轉する小滑車にして「ハ」なる線によつて「ニ」なる原動機に連續し而して叉歯輪によりて車軸に連結せ

るものなり。車の一轉するごとに電流は「ホ」の小線を通じて軌道「ヘ」に至り又發電機の消極に歸るなり。而して又車輛が導線「イ」より離れし時のために「ト」なる蓄電槽は備へ付けられ、導線との連絡絶たるゝも尙暫らくは其の運轉を持續するを得、現今廣く世上に行はるゝ電氣鐵道は概ね此の式なり。此の理により單に蓄電槽のみによつて車輛を運轉せんとの計畫は、其の後屢試みられたれども經費の點に於て又電氣を籠め更ふる點に於て未だ十分なる成績を見ず。

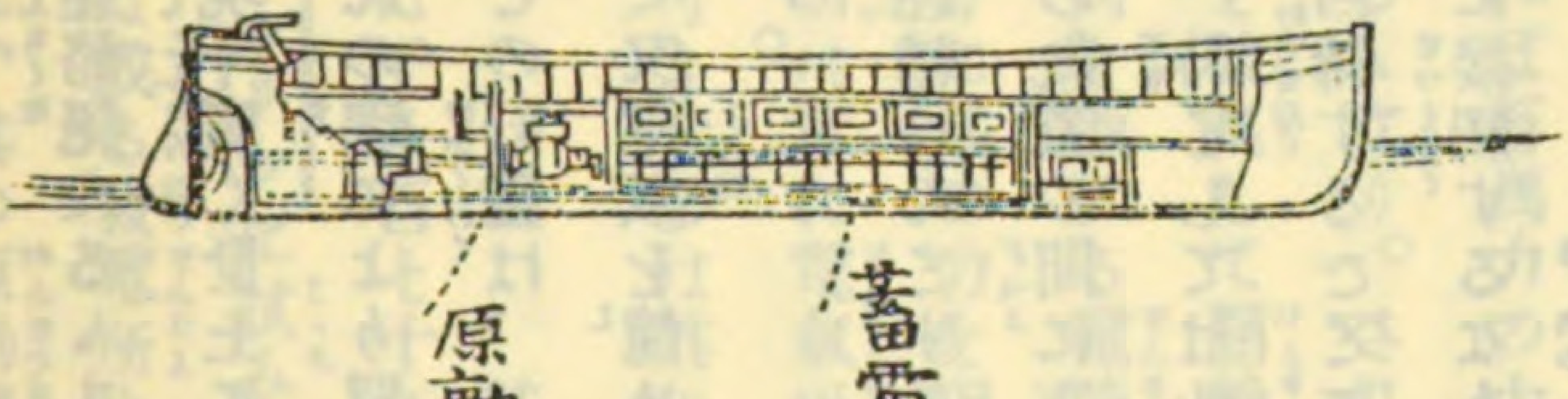
今の蒸氣鐵道の如く多くの車輛を運轉せんとする場合に於ては、前記の導線「イ」は二條の軌道の間に布かれて嚴重に大地と絶緣せらるゝなり。時としては此の導線は全く地中に埋められ、車輛の回轉するごとに、螺線によりて原動機の小線は時々之に接觸するなり。而して二者其の何れにもせよ、外側の二條の軌道は常に消極導線たるなり。

通常の道路に於ける電氣車は、千八百八十九年にボルク氏によりて始めて製作せられたり、第三圖に示せるものは氏が土耳其帝のために造りしものにして、一馬力のイミッシ氏原動機は齒輪を以て車の後輪に連結せられ、原動機に通ずべき電流は車の中部に備へられたる三十の蓄電槽より起さるゝものにして、一時間凡そ十哩の速力を有すと云ふ。車掌は前部に存する木梃を以て方向を定め、又轉轍器によつて其の速力を加減す。



第三圖

千八百三十九年の頃、ジャコビイ氏はグローヴ電池より生ずる一馬力の電氣磁石力を借りて、子バ河上に一の小さき電氣艇を浮べ、千八百八十二年には四十五の蓄電槽によりて得られし三馬力の原動機を備へたる一小艇、人を乘せてテームス河に浮びたり。而して音なく煙なく輕快に馳走し得る此の小艇は直ちに多くの人々の嗜好に投じて、今は至る所に之を見るに至り、兩岸適宜の所には器械を備へて其の蓄電槽に電氣を籠むるの用に供す。



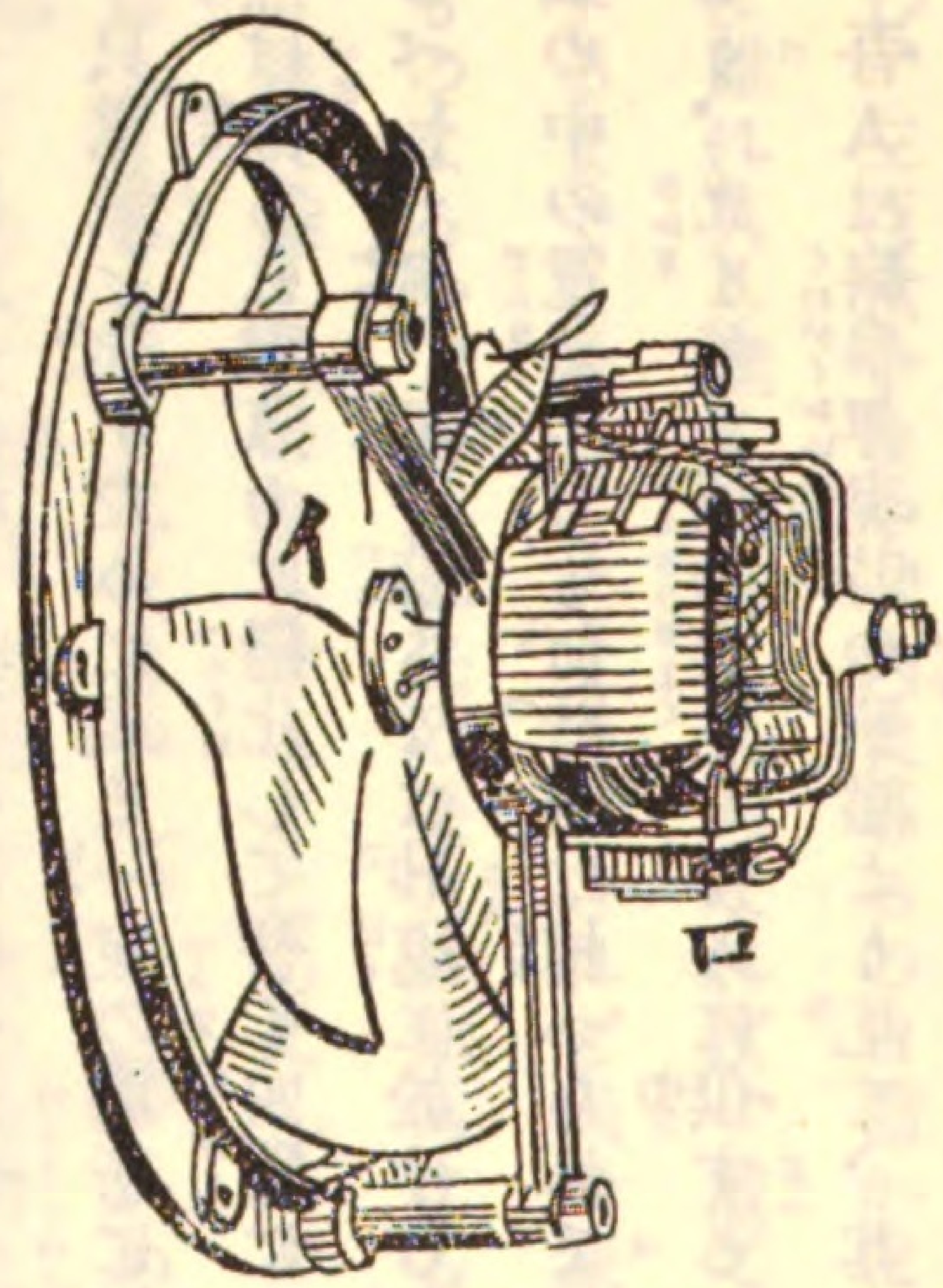
第四圖

第四圖は「イーピーエス」會社の「レデークウバア」と云へる電氣船にして、後部に備へられたる原動機は中央甲板の下なる蓄電槽に連なり、而して直ちに暗車の軸に結び付けらる。楫は通常のものにして速度は轉轍器によりて増減せらるゝなり、船房は長さ七呎にして電氣燈を以て照らされ、非常鈴も探海燈も悉く電氣の作用によりて任意に用ゐられ得べく、全速力は十五節にして平常は十より十二を以て進行し得べし。

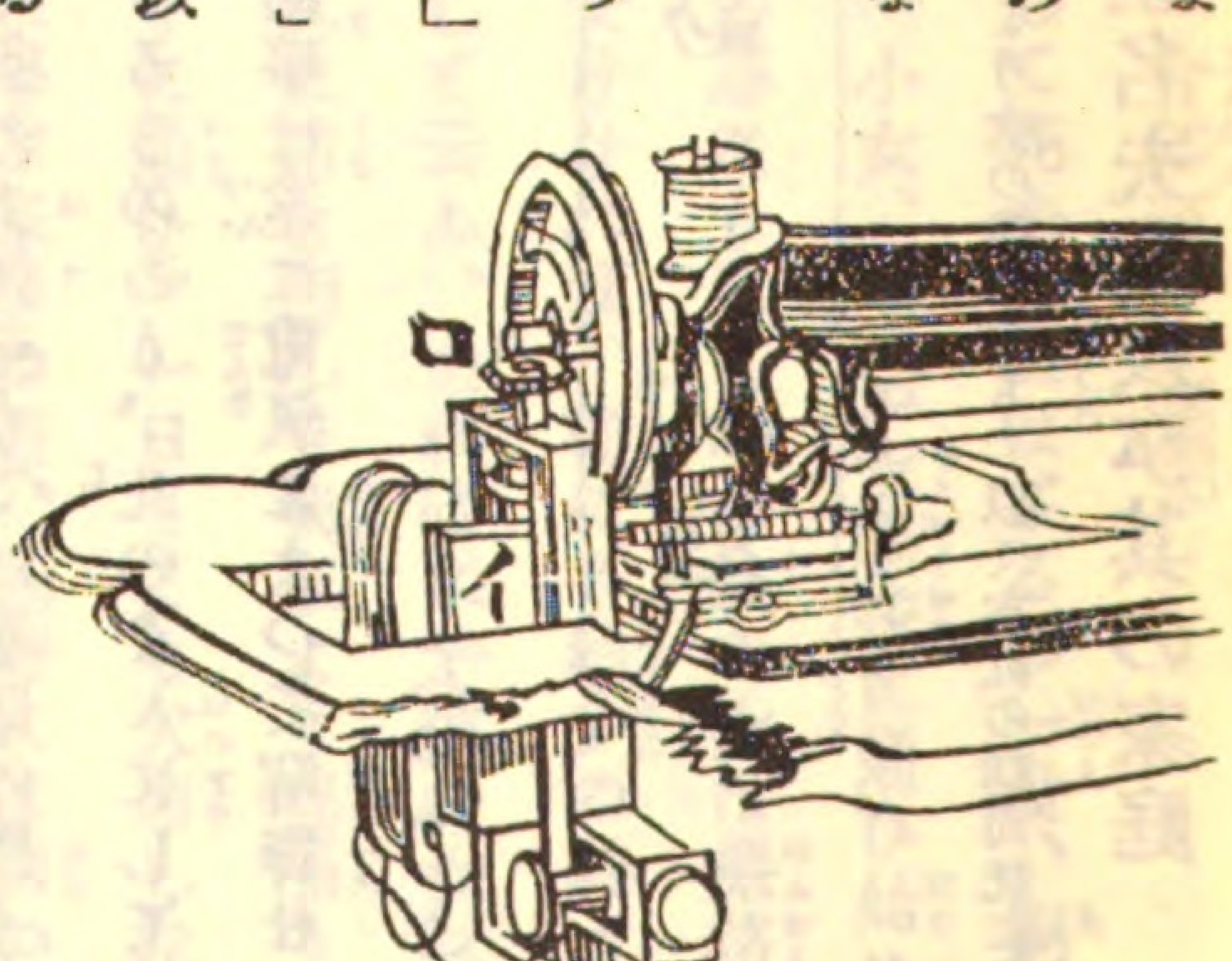
近頃ゴウベーと云へる佛人は戰時に水雷を發射し又海中を探索するために、蓄電槽と原動機とを備へたる海底電船を製り出せり。其は全く水中に沈みて進行するものにして波浪の懼なく、風潮の虞なく自在に運動し得るものなり。然れども發明者は尙之を以て滿足せず、人を乘せて進み得べきものを製らんとて今や其の研究中なりと云ふ。

エヂソン氏水雷の推進器も亦電氣原動機によるものにして、氏は其の電氣は導線を以て本艦又は砲臺より之を送り、海水は消極導線の任務をなすなり。

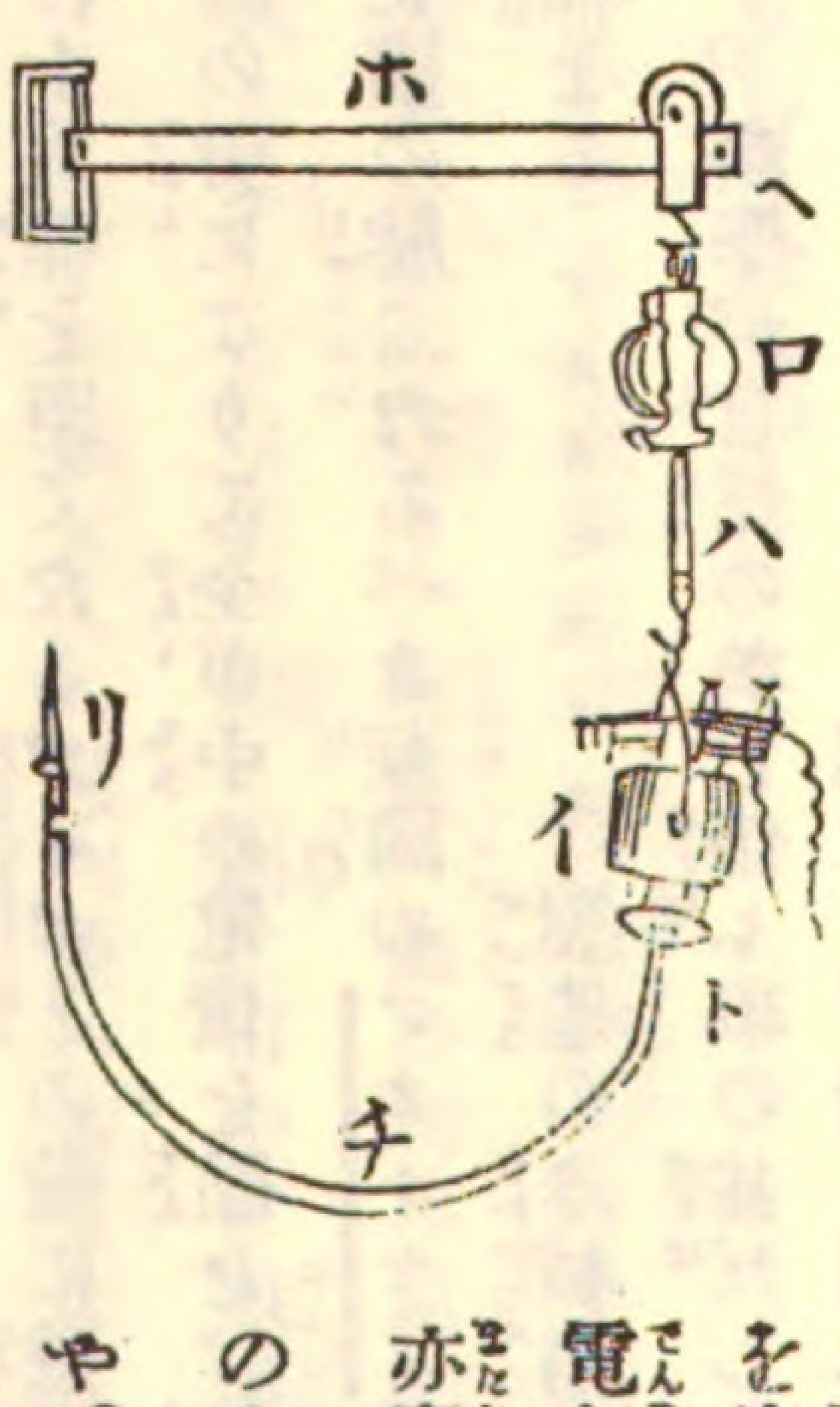
来るべき廿世紀は當に電氣の世界なるべし、今に於てすら既に各種の機械の大部分は之によりて運轉され、日用百家の器具よりして各人娯樂の玩具に至るまで之が力を借りつゝあるなり。第五圖は即ち其の一種たる電氣扇にして、「イ」は螺施状に曲れる扇、「ロ」は之を動かすべき電氣原動機なり。而して夏日炎暑の堪えがたきに當りて、一器を室内に備へ置かんか、不斷の冷風は勞せずして得らる可けん。第六圖も同じく電氣の力を借りたる裁縫器械なり、「イ」なる原動機は「ロ」なる軸と齒輪に相接し、手を下す事なくして自在に其の欲する處のものを縫ひ得るなり、第七圖は錐の一種にして「イ」なる原動機は「ロ」「ハ」の滑車によつて支柱「ニ」「ホ」「ヘ」に連接し、「ト」「チ」なる小條を以つて末端「リ」なる錐を働かしめ、毫も人力を用うる事なくして任意に穴を穿ち得るなり、電氣の力の及ぶ所亦實に驚く可きものの有るにあらずや。斯くの如く電氣は



第五圖



第六圖



第七圖

既に各種の器具に應用せられ、電話、電信、電燈等は今は普通に見らるべきに至りぬ。只經費の點に於て重量なる器械を運轉せしむるに尚不可なる所あれば、未だ各種の器械悉く之を備ふるに至らず、蒸氣機關の需要尚減ぜざれど早晩必らず其の地位を讓るの日あるべく、石炭は一々搭載せられて必要の個所に運搬するの煩を省き、只電氣を起すために或る一定の場所に燃され、其の熱は直ちに電氣力に變化して普く四隣に頒たるゝに至るべし。風、浪、瀧さては砂漠に於ける太陽の熱、大氣の中の電氣の力も何時かは捕へられて吾人のものとなり、光と熱と運動力とを吾人に供するに至るべき乎、吾人は科學界現時の狀態より見て、其の必らず之れあるべきを信ず。千八百九十一年、メーンのフランクフオルトに電氣博覽會の開かれし時百十七哩を距てたるチツカアの瀧は直ちに其發電所となりて、細き一條の線によりて此處に發生せられたる電氣は全博覽會の凡ての器械を動かしたりき。ローマの都は今は十六哩を距てたるティボリの瀧に發電所を設けて、其の力になりて全市中の電燈を點じ、風光明媚、永へに國の勝景たるべき蘇國のフオーヤー瀧も今は不風流極まる「アルミニユーム」製造の器械場と化し去らんとす。科學が自然の美を傷ふ事の甚だしきは東西共に慨嘆する所なれども、實際の利益は隻手の能く沮むべきにあらず。殊に電氣の力に至りては專門の學士さへも尚驚かざるを得ざるものあり、此のまゝにして進み行きなば、世界の萬事は遂に電氣によつて解釋せらるに至らん乎。

(つゞく)

訪問

小南女史より次の投書來る、以て本社の訪問記に代ゆ

前田正名夫人及び其の家庭

小南女史

夫は外にありて國事に奔走し、妻は内にありて家を治むとは、げに前田夫婦のことぞかし、正名君が二十年來實業振興の爲め、五六拾萬圓以上の地所を賣つて、東奔西走し、三百六十日中、内にあるの日僅かに五六十日なるは誰れ人も能く知るところなれば、敢て妾の禿筆を勞するまでもなきことなり、されど氏の家庭が如何なるものなるや、將た亦氏の夫人が如何なる人物なるやは、未だ能く人の知らざるところにして、又人の聞かまほしく思ふところなるべし、妾聊か縁故により、親しく夫人に接し、又親しく其の和樂光明なる家庭を見るの機を得ぬれば、此に讀者に紹介することゝはなしぬ。

夫人名は市子と云ふ、明治の人傑故大久保甲東の姪石原某の二女なり、薩摩に生れ、長ずるに及んで東京なる某女學校に學び、十九才の春今の良人正名君に嫁し、一女四男を擧ぐ、今年三十七歲。

春風吹き來らずして花未だ綻ばざるの一枝、婀娜娟妍天眞爛熳たるの一小女、市子が女學校に通ひ始めしは、齡僅かに十四歲の春なりしとか、彼の女は嚴格なる母に家庭の教育を受けければ、苟にも幼少の時より粗忽の擧動あらざりしと云ふ、去ればにや彼の女は纖弱なる身ながらも、夙に霜を蹈んで我家より程隔りたる某女學校に朝な／＼に通ひ、一日とても缺席したることなく、剰へ夜毎に學ぶ家事の道、或時には窃かに涙を袖に宿したらんも、一言とて母の命に背きしことなかりしと云ふ。

今を去る十數年の昔櫻田門外の其れならで、紀尾井阪なる其の邊り、突然一挺の馬車血に塗れぬ、噂取り取り口より口に、瞬く間に市中に喧傳せられぬ、是れなん市子の伯父大久保利通の暗殺せられたる馬車なりき。

平時に淋漓たる鮮血を目撃するは男子と雖も忍ばざるところ、况して柔和温順なる女子に於てをや、倘ほ况んや己のが母を生みし祖父母の遺せし血を見るに於てをや、此の非命の死を遂げし伯父の訃音を聞きたる市子、如何に胸を轟ろかせしよ、思ひ遣るだに憐なり、妾當時の樣を聞けり、水清く樹木茂れる廣ろやかなる學びの園に餘念なかりし市子、一飛脚に伴はれて伯父の家に行きしが、悲歎遣る瀬なく目縁も脹れんばかりに袂を濕らし、暫らくして襟を正ふし血に染りたる死躰に向ひ、

「野に於て死するは男子の本領とは、兼ねて妾か父より聞きつるところなるが、さても伯父君にはそれと等しき死を遂げ玉ひしか、國の爲めなら是非もなし、妾婦女の身とは云へ、伯父君の遺志を繼き皇國の爲め盡し奉らん

と、言ひ終つて涙胸を塞ぎ、暫時が間首を伏し嗚咽せしとなん。

嗚呼可憐の一小女、彼れは此時より國家てふ觀念を痛く心中に刻みぬ。

＊　＊　＊　＊　＊

歳月流るゝが如く、一年經ち二年經ち、何時しか二九の花盛りとはなりぬ、彼の女は幾度となく縁談を受けぬ、或るは巨萬の富家より、或は高位の家より、されど彼の女の理想は遥かに高尚なりき、巨萬の黄金、高貴の人爵、彼の女の眼中には塵芥の如くに見做されき。

果然彼の女は殆んど當時浮浪の身たりし前田正名氏に嫁しぬ。

晨に花、夕に月、婚禮は人生の一大快時なれども婚禮即下より新郎新婦は殆んど薪炭の苦を嘗めき、良人の今日ある夫人の功多しとすべきもの少々たらず。

長女某子は、數年前此世を逝りぬ、薔薇の色をなせる

頰に朝な夕な接吻せし兩親の心、如何ばかり痛ましかりしよ、時も時、良人は地方遊說中の留守なりしとか。

聞く、嘗て前田氏某女學校の卒業式に招かれ、演壇に上ぼり將さに本論に移らんとする際、潸然淚に咽びて遂に言ふ能はざりけるが、後より其の由を聞けば、列せる女生を見て死りし我が子の忍ばれしためなりしと左もありぬべし。

爲子孫不買美田、家財殆んど蕩きて生活至て質朴なりと雖も、和氣靄然たる一家團欒の樂に至ては、王公貴人も及ばざるものあり、而かも其の家庭敎育の如きは秩序整然、妾の稀れに見るところなり、四男あり、年未だ幼少なりと雖ども能く國に對するの義務を覺り能く、人に對するの禮節を知る、家庭の敎育完からずして豈に斯くの如くなるを得べけんや。

彼等は小學校に讀書算術を學び、家に英語漢學を學ぶ、學術修業に一定の時間あり、遊戲運動に一定の時間あり、精神的敎育に一定の時間あり、夜毎に聞くは聖賢君子英雄豪傑の傳記なり。

氷雪肉を裂くも嘗て車より通學せしとなく、北風膚を刺すも嘗て足袋を穿ちしことなく、短褐薄衣嘗て絹布を纏ひしことなし、若し夫れ父母の命に能く遵ひ、長者を尊敬する如きに至ては、妾の贅言を俟たざるところ、賢母にあらずして豈に這般の敎育を施すを得べけんや。

夫れ家庭の敎育は人物を造るの根源たりと雖も、世人多くは此に意を用ゐず、動もすれば子の意の儘に放任し、暖衣飽食、行くに車を以てし、或は從僕を伴はしめ、纏ふに絹布を以てす、是に於てか、放逸遊惰となる其甚しきものに至つては家を亂すものあり、華族の子多くは愚鈍なるは要するに家庭敎育の宜しきを得ざるなるに由る也。

日記帳

新に世帶を持つた夫、妻が奇麗のみで至つて不規則なを厭ひ或夜美麗に仕立てた日記帳を購ひ來り二十「ポンド」の金を添へて「どうぞ、日記をつけるやうにしておくれ、此面には渡した金額、こちらの面には其費途をつけなさい、そして二週間毎に金をお前に渡す約束にしやう」と言付け一週間後どうだと問ふたに妻は泰然日記帳を出した、見ると、一方には「二十「ポンド」アルギー（夫の名）から受取」と記して他の一方には單に「全額費消」と書いてあつた

家政

眞に母　黄花女史

いふ事きかぬ我儘つ子と如何に我子を叱り罵るも、こは強ち子供の罪にはあらで、却て其種子を育てし父母別して母親の不行屆をこそあらはすなれ。

余が知己の家に少なからぬ子供あり。嘗て喧嘩惡口泣聲をきゝし事なく、皆快活に仲睦ましく、六つの女兒も三つの弟の帶を結び、八つの弟は十歳の姉の草履をそろへ、三歳の兒も自ら稱して十郎兄さんが／＼と呼ぶ。されば遊ぶにも人手をとらず、大人の摸型のごと、小さくも一個人たる自覺でもありさうに、頑是なき顏に活々たる靈のあふれて見ゆ。當時此家の二女は某女學校に寄宿す。姉は十四妹は九歳、校長の話に「彼等は誠に手が入らぬ」と。さもありなん。彼等は皆嬰兒より否胎兒より我儘のあしきを敎へられ、正義に從順に、自らできうる限りは自らなすといふ自活の習慣をつけ、友愛の眞情を養はれて、虚飾の心いさゝかもなく、賢くてしかもませたる生意氣のところなき撫子の花の如し。よき果實いかで朽木に結ばん。彼母ありてこそ此子あるなれ。

彼等の母夫人といふは子供に心を用ゆべき要所を知れり。たとひ他日多少の不都合あるも根本の種子を育つ

る子供の爲めには、決して油斷せず怠らず便利のためにまぐる事なく、眞の愛を以て必ず自ら手を下し、曲りし芽は奇麗にきり去り、少しも姑息に流るゝ事なし。

或日余は母夫人のいたくつかれたるにつとめて快活にふるまへるを發見しぬ。其故をたづぬれば、母夫人「子をもてば不斷のことですよ、昨日十郎が、夕食が少なかつたものですから、十二時すぎ目覺め腹中がすいたつて菓子くれの、湯がのみたいだのいつてとふとふ今朝までねないのですよ。お婆あさんが可想愛に何かやれとおいひでしたけど、定りを一度やぶればもうとりなをしができません。およどりしてお氣の毒とは思ひましたれど、あかるくなつたらやるといひきかしすかしますと「ランプつければあかるくなるわ、ねエお母つさん」といつてなか／＼ひもじい樣子、それにこんか可愛いゝ事をいひますから、もうほんとにやりたくなりますよ。併しこゝぞとやつとおさへていろいろ昔語にまぎらし、今朝戶の隙がしらむをまちつけて、直ぐ起きて湯とビスケットをやりましたが、今大喜びで遊んで居ますよ。きつと其せいで私の色がわろいのでしようとさら／＼と答へられぬ。

かくの如く子供の躾のためには身を犧牲として倦むことなく、しかも此時母夫人は姙身中なりしにかゝはらず母親の義務を盡すかく迄に至るは勇士が身の重傷を忘れて戰場に進むにもなか／＼劣るまじ。

さればお母さんといふ觀念の子供の心中に如何ばかり重き？三歲の兒をして「お父さん！なぜお父さんはお母さんにお母つさんといはないの！」と父も已れと同じく母より生れしものと思ひ遂に父を責むるに至りし一語にても明かなり。かく種子の育ち初めなば躾も心のまゝ我儘つ子と叱らんと欲するも能はざる可し。

快活

同

日あたりよき草木はのび〳〵し、日陰の草木は凋むやうに、肝腎の一家の主婦が始終鬱々と顰めてのみあらば、良人は家庭の外に日光をもとめ、子供は寫眞の如く母の顔色擧動に感染し、何時となく家の内はしめりがちとなり、怨怒哀などさま〳〵のよからぬ空氣さへかもし來りて陰に陰にと退くことと主婦の不快は不快を生み、折角めざす新芽も遂にのびる時なきに至る可し。

世の中は日向も陰もある如く、人間誰しもたのしき事のみにはあらで多少の不快心配はあるものなり。只其不快を取ると去るとのちがひあるのみにて、賢き主婦は不快の事をうち消し〳〵快活をしたひゆき、日陰の草木も少しづゝ〳〵日あたりよき方にと導きて、遂に凋まんとする新芽も見事に花咲かし、家庭を無二の樂園とはなすなり。

話のくさ〴〵

同

燒傷

追々寒さにむかふ事とて火、湯の取扱もしげく、隨てやけどなどは誠にありがちの事なるが、こゝに簡便なる即治法あり。其一二をあげんに、今若し右のひとさし指を熱湯あるは火にて燒傷したりとすれば左の掌に鹽一ト握りを取り此中に右の燒傷の指をつきこみ確とにぎりしめ、凡そ十分間もたてば鹽次第にあたゝまり燒傷はげしく痛むを覺ゆ。かくて數分經ぬ間に全く痛みうせて痕なきに至るべし。痛みうするまでは其まゝに動かさゞるをよしとす。此外にがり鐵汁（おはぐろ）も妙藥なり。又極こてがるきはかなづちの如き冷えたる鐵の面にをしあつるも可なり。重傷はオリーブ

等をひき綿につゝみて繃帯し靜かにたもてばよろしきも醫者の手にかゝる方安心なる可し。

石油

油煙にランプのほやのくすぶり、臭ひの室内にみちたるなどは餘り快よきものにあらず。此はてがるき豫防にて止むるを得るものにて、最初ランプの心を酢にひたしよくかわかして後用ゆるときは、よく此煩を除くべし。

因に記す瓦斯燈電氣燈は子供の勉强には眼に害ありといふ。

耳内のいたみ

四季折々のうつりぎはなどに、耳内のはげしくいたみて氣分までもそこなひ誠に手のつけやうもなき事あり。尤もオリーブ油を耳内に注げば治まれども、素人の手にて流動物を耳内に入るゝなどは極々危險なれば、先づ大丈夫な方法即ちカラシ三分一溫飩粉三分の二の割合に混じ水にてねり紙にのべて耳の上を掩ひはるべし。皮赤くなる頃は癒えて取り去るに至るべし。又一法は手拭を熱湯にひたしアフヨウチンキ（藥店にあり）をつけて耳を掩ひあたゝむるときは速かに痛を去るべし。

毛氈

毛氈を奇麗に保たんには、不斷お茶のいれかすを根よく日に乾かして貯え置き、これを毛氈の面にふりまきて徐々に擦るにあり、見まかふ程になるべし。

小兒衛生一般

黑田生

藥劑を用ふるは兵を用ふるが如しとは古き諺なり、兵器を猥りに動かすときは人を殺すの害あり、又人を殺すの害ある代りに惡を懲すの德あり、藥劑も亦然り猥りに用ゆるときは大害を醸すものなり、之に注意せず

して持藥など丶云ひて毎日藥を用ゆるものありとき、こは非常なる害あるものにして大人はともあれ、小兒に猥りに藥を與ふるときは故意に身躰の發育を妨げ羸弱のものとなし、天禀の健全を破る、世の母たるものは持藥なぞと藥を與ふるは必ず禁ぜられたし、まづ藥は非常なる毒物と云ふ思想を抱きをるべし、病魔に攻められくるしむときは止むことを得ず用ゐて病毒を殺害するもの也服藥すればとて經驗のなき庸醫の診察を乞ふは危險なり、記者がこの暑中休暇に相州地方を漫遊するある村に記者の親戚あり、こゝに一泊したりその時村長來り、談赤痢のことにわたり、それより土地にある醫者のことに及べり村長の談に、この村に居る醫者は脉を見、又は藥を與ふるは凡て患者の命これ從ふとなり、如此醫者は世に全くあるか否かは知らざれど、治療の術を知るも患者の機嫌をとる目的か又は病の因て來るところを知らざるにあるか、何れにしても生命を托するには危險千萬なり、乳兒の如き未だ言語をなす能はざるものには、尤も注意して醫を撰びて診を乞ふべし、古き諺に病傷は猶ほ療すべし藥傷は最も醫し難しと、この語を能く記憶して一朝病魔に侵さるゝ時は醫を撰び診を乞ふを忘るゝ勿れ、又病に臥すも服藥せず神佛にたのみ祈禱の御鬮の符章のと狼狽し或は巫覡の言に任せ方角の吉凶にて醫者をたのみ術の巧拙は更に頓着せざるものあり又最も愚人の習慣として猥りに醫を代ゆることあり人々により與ふる藥一致せず爲めに治療法亂雜して遂に病者を挽回すること能はざるに至る。

是等の心配をなすより寧ろ病氣に罹らぬ樣になせばよし、之れには飲食を節制し起居常を守り過勞を來たさず養生せば可なり、これからは日に寒氣になるが世の母たるものは小兒の衣服につきあまり暖をとりすごさざる樣になせこれにつき前號に簡單に說きしが人には

慣れると云ふことあり、寒氣に向ふ時に襟巻をなすとその冬は到底すて難し、衣服も亦然り故に古人の説に飽食暖衣は身をやぶるの基と言へり山野に住む鳥獸を以てせんか冬になりて別に被物はなし併し死せずこれ習慣性なり

◎小兒の營養

小兒もし風邪の氣味にて熱性ありと認むる時は母たるものは攝生法を注意ありたし、攝生法とて猥りに營養品を與ふるはよろしからす一寸考へるも熱の時は營養品を與ふるはよろしと思ふならんが、之が爲め小兒は甚しく苦悶することあり、唯乳汁を與ふれば足れりとし熱長くつゞくときは十分營養する爲めに强壯劑を與ふるものなれどこれは醫者に診斷を乞ふべし、

初生兒に最も營養品として適當なるは母乳なれど、もし母の乳房にして或は分泌せざるか或は乳房を害することあるの腎臓病若くは貧血症等を病むときは乳母若くは家畜の乳汁にあらざるべからず、併し乳母をして小兒を營養するは多くの危險あるを以て苟も母たるものは自己の身躰を健全に保ち自己の乳汁を以て飼養するを義務となすことこそ望ましけれ

乳汁の量と性質は營養物の含窒素量に關係する鮮きを以て習慣の食物をとればかなり併し惡しく香氣ある例へば「ウド」類葱等は多量にとるべからず、成べくは全く用ゐざるを望む、葡萄酒は適當せり、併し「アルコール」分多きものはよろしからず

授乳するに必要なる要件は温浴し身躰を清潔になし空氣の流通のよき處に適當の運動をなすこと、第二乳は猥りに與ふるなく整然と時間を定めて與へよ、何となれば乳は號泣を沈める爲めに與ふるものにあらざればなり第三乳母は決して兒を懐になし褥に就くべからず新聞紙上に屢〻目擊するとなるが小兒の突然死去するは多くは窒息より起るなり。

生後第七ヶ月を經過せば一日に一回位に抑制すべし、少しく鹽類を加へたる肉養汁を雞卵半箇次に一箇に和し與へ、先づ齒牙發生し始むる頃には穀粉を水及び乳汁と共に給してよし、二枚の齒牙發生したるときに授乳は絶つべし牛乳を與ふるものあれど危險なるなり、何となれば病牛の乳のあるなればなり、併しこの危險も煮沸すればやゝ免かるゝを以て牛乳は必ず煮沸することは忘るゝ勿れ、大人に於ても亦然り

◎遺尿

遺尿は男子の方女子より頗る多し、多くは十二歳まで時としては三十歳位のものにして、猶遺尿するものあり、この原因は腦の尋常ならざるによるか、睡眠酣なるときでも尿が膀胱内に充滿すれば、尿の通常刺激にて醒むるものなり、小乳は未だ腦の發達不充分なる爲めこれを感ずるほど鋭敏ならず、故に夜尿す、遺尿を攝生的治療なすには小見をして就眠時前數時間液躰を飮むを禁じ、背臥せしめず必ず側位をとり、横に臥せしむべし、裳を腹部にまき冷へざる樣になせ、その裳には紐をつけその紐を脊柱の上にて結びをけ、さすればねがへりをうち背臥するときは結節の爲めにいたみを感じ眼がさむべし

遺尿するとて苛責するは策の得たるものにあらず、「フオーゲル」氏は一小兒につき甚しき罰を加へたり、小兒はをそれ己れの陰物を小紐にて結束し翌朝に至るに甚しくはれて終に病となりしと云ふ

◎すりむき

小兒は皮膚非常に軟きものなる故に皮膚と皮膚とふれてすりむくことあり、最も臀部液窩及び頸部に見る小兒健全にして肥滿なるものは自然すりむくも羸弱なるものは襁褓のぬれたるものがふれて生ず故に襁褓は濕わざる樣に注意せよこのすりむきの豫防として皮膚のふれる處には石松子の末をふりまくべしこは乾燥せし

むる目的なり、その他日々適當なる温湯に入らしむるを可とす

◎疥癬

疥癬は皮膚内に生ずるものなり、一家に一人の患者あれば一家盡く傳染す記者十二三歳の頃玉川在の漢學の塾にありし、この塾は研究室と教室とは棟を異にす一日ある生徒疥癬にかゝりしを以て隔てゝ研究室に一人居らしめしに翌日三人の患者を生じ數日にして生徒一人もこれが患者とならざるものなきに至りたり、これを見るも初發のものは注意して治療すべし併しその治療とて小兒と大人とは自ら差あり、小兒は皮膚薄きを以て刺戟を加ふるを節せざるべからず、最も適當なる療法は「ペーリウバルサム」十五グラムを用ふ或ひは「アルコール」十分を加へて後に用ふるも可なり、日暮に之を塗擦して翌朝芥子浴に入り充分に塗擦すれば、疥癬蟲を全く撲滅せしむるを得べし、患者の衣服は充分洗滌すべし成べくは煮沸して洗へよ、然らざれば硫黄にて蒸せば猶よし

◎凍傷

母の懐にあるものにては四肢凍傷なぞはまづなきものなれど歩行し得るに至るときはこの疾病にかゝることあり、雪を掬み戰爭をなしその興に乘じ凍傷となることは往々見るところなり、然る場合には凍傷となりし局部例へば足ならば足を充分雪を以てこするべし、決して直ちに暖むることをなす勿れ、若時すぎて皮膚甚乾く時は「ヨヂウムチンキ」をぬるべし又は脂肪と火酒の同量をぬるべし

◎小兒の看護

通常の小兒に於て第一歳の終に大窓門（窓門とは頭蓋の中央の孔にして頭蓋骨が相密接するに境界する所に孔隙を殘し皮膜を以て被はるゝ處を云ふ、大窓門とは小兒の頭の中央にブク〲する處ありこれを云ふ）は

重き佝僂病に罹るときは三四年も開きてゐるなり、頭を枕にたへずこする時は後頭部を禿になす注意ありたし

鳩胸又龜胸の佝僂病あり、これは小兒の臥寢法、負背法、抱法の不正より起るものなり、又學童となりて此病になるものなり、これは机によりかゝるよりなるなり、故に讀書其他稽古をなすときは椅子によりかゝるとも机によりかゝらざる樣にすべし

特に女兒は脊柱骨彎曲を起し易し、故に時々裸體になして脊椎の狀躰を檢しもし少しなりともまがりし樣なれば醫士に診斷を乞ふべし

小兒の口中は必ず清淨になせ、乳齒と雖も成齒の如く注意せざれば後年に危害を生ずるなり、齒は人の知る如く消食機關の第一位を占め、且つ容貌に關係あり故に常に注意して熱物或は冷物を喰はず殊に硬きものをかみくだかざる樣になせ、小兒は鼻にて呼吸することを慣らすときは口中自ら清かにして肺に入る空氣も亦鼻中にて塵埃をとればなり、小兒は磨齒粉を使用すべからず、大人とても猥りに粗製のものを用ゆる時は、齒の表皮なる琺瑯質を磨銷し實質をあらはし炎を起すことあり、又焮衝を起し或は齒齦變色して暗紫色となるなり、粗惡の磨紛を用ゐるよりも寧ろ清水をやわらかき齒刷にそゝぎて齒牙を洗滌するにしかず

婦女子の齒は男子の齒より弱しその原因は種々あらんが、まづ妊娠すれば酸味を好むこの酸味は齒に大禁物なり、その禁物を好むによる、又胎兒に齒牙の組織を形成する石灰質を與へざるべからず、故に石灰分を多く食ふは必要なり、又或博士の說によれば子宮の病患が齒牙より來りしと說かれたり又懷妊中に齒痛を覺ゆることあり、その痛は子宮の新に作用をなして漸々に神經を刺衝するより起るものにして齲齒より來るにあらず、されば齲齒の治療をなすも益なし、益なきのみ

ならず非常に害あり、婦女子は比較的男子より齒を健全に保つことを務むべし

小兒の步行を始むるに注意を要す、身躰の發育は頭部より下肢に及ぼすものなれば頭部は非常に發達するも下肢未だ發育せざるものなり、故に世の母たるものは早く步行せしめんとて無理にたゝしむるものあり、これ人情なれど發育の不充分なるために不具となすことあり、故によく注意してありたし

小兒の脉搏及び男女に於ける脉數の大躰を知るも亦婦女に必要ならんか十二歲までは漸次脉搏を減すと雖ども、婚嫁期には一身に變化を起し增加し又この期を過ぐれば再び減少す六十歲以上に至れば更に增加す、胎兒は一分時間に百以上の脉數あり婚嫁期八十內外三十歲頃は七十內外なり

婦女子は男子の脉搏の數より多し

漸く寒冷の氣候となる從て身躰の新陳代謝を盛ならしむ、ある生理學者の說に寒冷なる大氣は溫暖なる大氣より新陳代謝を盛になすと、果して然り寒氣になる時は食慾は日にすゝみ消化を完全ならしめ精神活潑となし皮膚より排泄せる水分の量は減して尿量の增加を見る

冬期は大氣冷却するを以て吾人の躰溫を奪ふ、この結果は寒冒となる、甚しきは四肢の關節弛緩す、これを「インフルエンザア」と云ふ、寒氣猛烈なるときは血液の循環を不順になして腦髓又は肺臟又は心臟等に集り頭痛を覺るに至る故に冬期は皮膚の薄きもの即ち小兒は新築の塗屋におくことを禁ず凡て乾燥せる大氣の室に遊ばしめよ

一室に閉籠りて久しく居るべからず、大氣中十分の一以上の炭酸瓦斯を含むは健康に適せず故に數多の人の充滿する室內に決して久しく居るべからず何故に炭酸增加するかと云ふに日常用ゆる點火料又は人々の呼吸

作用より起るなり冬期は室をしめこむこと多し、故にこの注意に及ぶ人の知る「カルカッタ」の暗洞とはその昔ベンガーレン」の大將某が「カルカッタ」に於て十五「メーテル」立方の土坑中に英國人百四十六人を捕縛せしことあり然るに十時間の後に至り唯僅かに二十三人のみ生存し他の百二十三人は盡く窒息して死せり、終これ全く炭酸瓦斯增加して呼吸作用を營む能はず、終に死したるなり世の上流社界は知らず下等社界に至るも小兒を伴ひ劇場等に至るものあり禁ずべき事なり

◎飲食

卵を食すれば胃中にて消化するを實驗するに胃液をとり出し、之に卵を入れ躰温位の温度になせば卵は消化するを見る、何故かと云ふに胃液の成分を見るに「ペプシン」及び遊離の鹽酸其他鹽類ありて別に「ペプシン」と鹽酸とを混し躰温位の温を與へ之れに卵を入れしに消化せり、之れ人工的なり何れにしても卵の消化するを知る又一般に蛋白質の胃の内に入れば之を消化する爲め鹽酸を作る之を作るには血液の中にある食鹽にある、食鹽は鹽類を出して躰内の水素と化合し鹽酸を作りその殘りし「ナドリウム」は血液の成分に過剰のものたるを以て排泄す、然るに消化作用やめば過剰の鹽素を再び血液に戻す、故に血液にて食鹽を造る爲めには食鹽をとらざるべからず都合よきことには吾人の食物としてとる料理の爲に多く食鹽をとる或は吾人のとる食物の内には恒に必要なる量より多量の食鹽を含む故に特更に食鹽をとるを要せず、普通にては一日に十「グラム」より四十「グラム」の食鹽をとるものなり吾人の食物に必要なるものは蛋白質、炭化水素類脂肪なり、人間は食なくしては生活する能はず併し三十日間絶食するも死せず米國にては四十日間の實驗ありしとかや、蛇の如きは彼岸より彼岸まで食をとらずして生活すと併しこれは脂肪脾臓又は骨の如き生命に左程

關係せざるものを食となすならんと云ふ、これ等は例外として食物は必要なるものなれば唯一言すべし
肉食は消化し易し、併し蔬菜を加ふれば一層消化力をます肉は血液となる多くして糞尿となる少量なり蔬菜は凡て消化よく養分を含む特に人參芋等の如きはよし
五穀は躰中にて脂肪を生じ血液を補ふと雖も赤血球に化する分少く、糞尿に化するもの多し、故に單に五穀をとるものは脂肪多くして肥滿するもの多し
菓子は胃腸の面を損するものなり、何となれば菓子は多く穀類と砂糖にして製したるものなれば、糖質は血液中にありて消化力を有せざるものなり特に小兒には病源となる故節制ありたし深窓に長し絹布を着す小兒は常に上等の甘味甚しきものをとり下流に長するものは身に木綿の麁服をつけ甘味少なき菓子を食ふものと大人になりその强弱如何を見ば容易に了解すべし

茶は「タンニー」と云ふものありて、收斂强壯になる効なきにしもあらざれども最過ぐるときは消化機を傷ふ、故に注意して用ゆべし、小兒にはなるべく禁じたきものなり
酒は適度なれば興奮劑として必要なる塲合もあれど酒客は消化機を傷ひ身躰衰ふるは言ふまでもなし又肥滿するものあれどこは脂肪肥滿とて筋肉肥滿即ち壯健になりたるにあらず、大酒家の子孫多く病患を遺傳すと歐洲にては發狂の子孫を出す何れにしても酒は飮むべからず小兒には無論飮酒は嚴禁すべし喫烟も禁すべし

◎食量と健康

健躰の食量は躰質も食品滋養も新陳代謝に關係す故に一定の規律を設くる難しと雖も兵士の食量を以て推すに

	一等	二等	三等
蛋白質	一五〇、〇	五二、〇	一八、〇

脂肪	五五、〇	三二、〇	一五、〇
含水炭素	五二二、〇	一七九、〇	一二七、〇

歐洲人と我國人とは風土習慣を異にし躰重の如きも大に差あり即ち我國人は平均五十五六「キログラム」なれど歐洲人は六七十「キログラム」なり今參考の爲め左に記す

	蛋白質	脂肪	含水炭素
帝國大學寄宿舍	五三五、〇	一九、〇	四四〇、〇
高等師範學校	一一四、八	三一、四	六三四、九九
陸軍士官學校	八三、〇	一三、七	六二二、四四
陸軍共食米飯三食	八三、八	一四、八	五三三、七
海軍兵食	一四五、四	五三、五	五五二、七四
鍛冶橋監獄	五六、七	七、六	四四六、八
日本人標準食	一〇〇、〇	二〇、〇	四八〇、〇

父母の誡

(經驗ある老父母が家事に馴れざるものへ敎訓)

一赤兒は密にして重氣なる衣類にて包む勿れ、衣服は成るべく輕くして氣孔多きものを撰むべし。

一小兒の顏をば被物を以て蔽ふべからず、殊に汚穢染みたるものをかぶするやうの事あるべかず。

一手足は折目ある布片、又は襞あるものにて小兒の皮膚を摩擦すべからず。

一小兒は餘り長く眞直に立たしむべからず。

一小兒の躰は常に清潔にするため浴湯せしむべし、眼瞼は清水にて拭きやるべし。

一小兒が泣き叫びたりとて掌打を乳母に許すべからず。

一小兒睡眠中急劇に呼び起すこと勿れ。

一自然に歩行が出來るまでは歩行を無理に敎ゆる勿れ、身躰の發育上大害ありと知るべし。

一過度に熱く又は冷なる牛乳を與ふる勿れ、健康の時の人体の温度位が、牛乳には最もよき温度なり。

一小兒には決して留針、縫針、剃刀、鋏、鑿、小刀、鐵砲、熱湯を盛りし器、其他危險なる器具を弄しむべからず。

一齒の出ぬ前に齒を要する固形物を與ふべからず。

一急に母の乳を離れしむべからず、生後六個月乃至九個月を經過せば漸次乳離をなさしむべし。

一養育室にては濕れたる傘又は衣類を乾かし、又は洗濯などを爲すべからず。

一養育室には不必要なる家具のみならず、塵汚を止むべきものは一切入れ置くべからず。

一小兒を養育する間は父母も自づから勞苦、驚愕、憤勵の狀を示すべからず、又父母自身健康なれば兒も自然に健康なるべし、睡眠の滿足、新鮮の空氣、運動は第一の健康策なり。

一哺乳する時は母たるものは、茶及珈琲は不可なり、椰子實は可なり、又藥用として醫者の許可なき限は、麥酒、葡萄酒等用ゆべからず、

一消毒藥は何時にても使用し得るやうに準備し置くべし。

一小兒には規則的に飲食せしむることを怠るべからず。

一牛乳瓶には餘滴を剩すべからず、剩さば必らず捨つべし。

一食事せしめし後、直ちに小兒の身体を動搖せしむるやうの事あるべからず。

一小兒には烈風に當てしむべからず。

一母又は乳母と小兒の寢床は別々にし、小兒には單獨のものをしつらへ置くべし。

一日沒後小兒を外へ出すは宜しからず、又は寒冷及霧の日等も大氣に觸れしめざるべし。

一赤兒に朝の微温湯浴を怠る勿れ。

一小兒の生齒期は頭部を温暖にするは宜しからず、されば煖き帽子などかぶせざるを可とす。

一夜間睡眠に就かしむる時は、必らず晝間の衣服を脱ぎ去らしめ寐衣と着かへさすべし。

一惡しき天氣の日は小兒に首と腕とを露はすを許すべからず。

一小兒の眼に太陽の直射する場所を避くべし、蠟燭又は燈光をして面部に直射することも避くべし。

一小兒は瓦斯熱の盛なる室に入らしむべからず。

一過度に火の熾なる室内に眠らしむべからず、過度の温室は睡眠に妨わりと知るべし。

一小兒服は寛にし、嚴しく締めつくるやうのことあるべからず。

一小兒にはフランネルの布片にて皮膚を摩擦することを怠るべからず。

一惡しき機嫌の時に小兒を寢床に送るべからず。

一號泣の都度に物を與ふること勿れ。

一殘物の食事をなさしむべからず。

一火を熟視せしむべからず。

一扉を開閉する毎に流通し來る空氣には、小兒を觸れしむべからず、而して小兒の寒慄を起さしむべからず。

一輕瀉病の際には温湯に浴せしめて差支なし。

一生長しつゝある小兒の脚踝を嚴しく緊壓すべからず。

一安休なきか或は激發したる時には、鎭痛劑を用ゆべからず。

一五才以前には木馬に跨るを禁ずべし。

一乳齒の生する時は萬事小兒の身に最も注意を要す、而して此時期は食物の咀嚼と消化に勢力あるものなりと知るべし。

一齒が生せし以後は無論斷然哺乳を廢すべし。

一日々小兒の身躰に石鹼を使用する勿れ、何となれば皮膚の發暢に有益なる油氣を奪ひ去るの患あり。

一醫者の命令にあらざればゴム劑を服用せしむべからず。

一無用なる長服を着けしめて小兒の運動を妨ぐべからず、それよりも遊戯室を多く與へ、手足の運動を自由にすべし。

一小兒には人工的の食物は不可なり、母の乳こそ最上の食物なれ。（つゞく）

庭　園

庭園のつくり方につき松平樂翁の述べられたるも面白ければ左に錄す。

庭つくりして、世わたる者のするは、いといたういやしく、松などもさま〳〵に枝撓め、常磐木を丸く、かず塚おほく立てたるが、さては七五三の膳部の上を見るさまして、興なし、庭はたゞ、地勢といふものあり、海近きところは、たとひ海など見ゆるにあらねども、木立といひ、吹く風までも、海のおもむきはあるなり、そを深山のさまつきに、つくらんとしては、自らのけしきにさかふ、石にも海と山とのたがひあり、狹き庭ならば、ともあれ、廣くばその地勢を考へて、作るべし、水など流るゝならば、山河のやうにし、瀧落しなどつくらば、手ごろの石はわけもなく、たゞ高く投げあげて、落るときの自らなる姿に任すべし、大きなる石は、源のかたに向ふべく、小さき石は流の末に向ふべし、もと生ひ立ちし木は、南の方にしるしつけて、庭へ移すにも、南の方をたがへざれば、自らおのが姿を失はざるなり、透垣なども事そげて造りたるは、をかし、庭の門などは、明戶、編戶、織戶などさま〳〵あるべし、庭に欄檻つけたるは、かの國ばかりとも見えず、豪

の竹などのやうに、臺つくりて、名所の木草、植えたるもをかし、庭へ植えてをかしきは、梅、櫻、松は更なり、松は、小松もよし、五葉もよし、橘、楓、銀杏、柳、萩、荻、薄、葛、蔦などもよし、ぎよ柳、芭蕉などは、石もつぎ〴〵し、竹は、いとよし、河竹、呉竹もをかし、秋草はみだれあひて、朝貌も、そのひま〳〵に、咲きしぼめぞをかしき、草の中に、さゆり、撫子などめづらし、露も雨も、草むらほどをかしきものはなし、葎、蓬も所によりてこそ、をかしからめ、廣き庭はところ〴〵に、心かはるやうにこそあるべけれ、菊も、竹などそへて造りしよりは、亂れたるぞよき、ひさしの下には、文車、一二軸ありたし。

結婚の約束

女「そうなつたらお前さんはいつも私を可愛がつてくれませうれえ
男「さうさも〳〵熱心に
女「そんな事言つても直ぐに飽きが來るかも知れはしないわ
男「決して
女「それから金錢も貯めておくれでせうれえ
男「一ぺニーも殘さす
女「そしてお前さんは私に荒々しく當るやうな事もありますまいれ
男「決して
女「それから惡い癖は皆な止めて頂戴よ
男「何でも
女「それからお前さんは貴母さんと一所に居ますか
男「さうだ
女「貴父さんとは
男「矢張さうだ
女「お前さんは貴母さんの言ふ通りするのでせうれ
男「さうだ
女「貴父さんの仰しやるやうにも
男「さうだ
女「それでは私の言ふ事は
男「勿論
女「申分はないけれど……餘りお前さんが誰にでも優し過ぎるから
　私は嫁に行つても困つちまふわ

和洋禮式

日本禮式（婦人の態度）

人の前を通過の禮（座敷杯にて人の前を通過する禮）

此禮式にも三様の區別あり、即ち一は貴人の前を通る塲合、一は同等の人の前を通る塲合、一は自分より地位低き人の前を通る塲合とす。



位地低き人が貴人の前を通る塲合には、其貴人の前より稍手前にて静に止り膝を疊へつけ、兩手をつきて頭を下ぐべし、但し座るに及ばず、兩足は爪立ちて宜しく、頭も疊へすりつくるに及ばず、直ぐに立ち上るといふ態度を取るべし、一禮了らば直ちに立ちて進行すべし。

同等の人の前を通るには、其前にて静に進行を止め、膝と足との措置は貴人の塲合と同くすれども、手は指先のみへつき、頭は貴人へ對する塲合よりも稍輕く下げ一禮了らば、直ちに立ちて進





むべし。

貴人が下位の人の前を通る場合には、同じく其前にて進行を止め、少しく頭を胴と共に垂るゝにつれ兩手の眞直に股の上に垂れありしを是亦少しく下げて立ちたるまゝ一禮し過ぎ行きて可なり。

物して人の前を通る時には、物靜なるを要するは言ふまでもなき事ながら、足の踏み出し方にもよく〳〵注意し必らず座しある人と反對の足を先にすべし、たとへば座し居る人が左にあらば右の足を踏み出すべし、進行は無論直立にして、禮を施す際にも、座人の方へ向き直るに及ばず只目遣ひのみにてよしと知るべし。

西洋禮式（男子の態度）

握手と紹介

前號には握手の禮式を述べたるが、尚記すべき事あり、手は婦人より差し出すを待ちて男手は握手すべきが、右の手に餘程の故障なき限りは左の手にて握手すべからず、扨握手の方は靜に相手方の手を取り、穩に握りて又穩に之を放つべし、強く握りしめ或は長く握りて卒然之を放ち或は烈しく振動し或は指先のみを握るやうの事あるべからず、蓋し握手なるものは人情の自然に出づるものにして、我親愛するものに遇ふ時或は久しく遇はざりし友人に再會せしなどの場合には、西洋の禮式に係はらず、自然に手を握り合ふに至るものなり、されば其赤心と懇情とにより我知らず情の赴く處、強く握りしむるか或は長く握ることもあるべけれど、成るべく粗暴に流れざるやうにすべし。

紹介の禮式を記せば、地位の低き人を最初に名を呼びて地位の善き人に紹介すべし、玆に地位の低きといふは一方より年少者或は社會上に位地少きもの或は一方より賤しき人をいふ、同格の朋友を紹介する場合には、比較的に新しき朋友の名より先に呼びて他の朋友に紹

介するを要す。
男子と婦人とを紹介するには、必らず男子を婦人に紹介すべし、決して婦人を男子に紹介すべからず、たとへばスミスといと男子をジョヂスといふ孃に紹介する塲合には、「私の朋友のスミス君を御紹介申します、ジョヂスさん」といふべし、婦人と婦人とを紹介する塲合には、男子と男子同樣、地位の低きものを高き方へ紹介すべし。

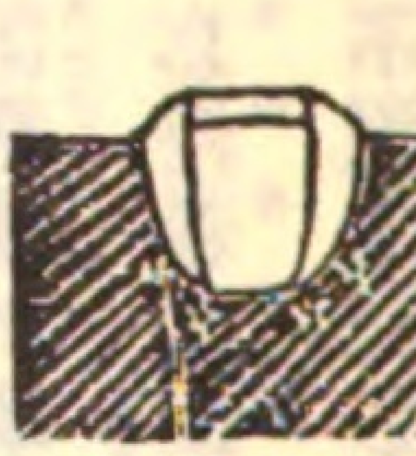
社交一斑

流行の栞

流行子

吾妻コートの襟

目下專ら吾妻コートの流行時節にして其流行の案内は前號に記載したるが、其仕立上胸開の工合を記すべし。
近來吾妻コートの胸明を廣くし其明け工合に樣々の工夫を用ゆるものあれど餘り胸明の廣ろきは卑しく見えてよからず、先づ第一等人氣の多きは被布襟なり、こは花柳社會にも貴女社會にも一樣に行はる。


被布襟


へちま襟

之に次ぎて行はるゝものはへちま襟なり、こは此風を好める向に人氣あり、其他男子の外套の襟の如く巾廣にし胸の中央に寶石入の飾ボタンなつけるなど見受くれど、こは一種の社會のすることなり。
吾妻コートの丈は長襦袢同樣の長さに仕立つるが故に十分衣服の裾を隱す、下より衣服の見えぬ風なり。

水晶の裝飾玉

可愛らしき十四五才までの少女が帶の邊に飾る事追々目につけるが、こは水晶玉を白銀の彫刻物にて抱かせなか〳〵可愛らしきものなり松田白牡丹本舖の發賣に係る代價壹圓内外なりといふ。

雜錄

西洋新聞賣（口繪の畫解）

西洋殊に北亞米利加合衆國の少年少女は其國民の氣象

を享け自立獨立の精神を以て未だ十歳内外より一身の生活を經營するもの多し、夫の電氣王エヂソン氏の如きも其少年時代は新聞賣を以て成功の緒となしたりしなり、圖はニューヨルク市夕刊新聞の新聞荷馬車が公園に着きたる否や、少年少女の新聞賣八方より群り集り、我先に受け取りて賣り歩かんと相爭へる光景なり

時報一束

◎佛敎婦人敎會發會式　去月十七日京都知恩院集會堂に於て發會式を行へり會するもの數百名少女の唱歌を以て式を初め次に運海僧正は導師として佛前の法要を營み集會者に對し十念を授け了て山階宮伏見文秀女王兩殿下より賜ひし祝歌を朗讀せり其祝歌は大勳位晃親王「をみならがかざしの花もひとゝきは法のをしへに身をさとらなむ」伏見文秀女王「みほとけのをしへの法の花の香はいく千代經ともかはらざりけり」佛敎婦人敎會長誓圓尼公「御佛のをしへまもりてをみならが身をも家をもともにをさめよ」◎武德祭　京都平安宮に於て行ふ同祭典は去月廿五日午前七時より神殿の裝飾を爲し祭典式終りて後演武塲内の假武德殿に於て演武會の開會式を擧げ第一に會長開會の辭を述べ次に總裁彰仁親王殿下令旨を御朗讀在らせられ次に會長の答詞、事務委員長の會計及事務報告ありて式を畢り豫定の演武を開始せり◎幼稚園保育規則　文部省に於ては幼稚園保育規則なるものを制定せんとて目下參事官の手に於て取調中なるが本月中旬頃には取調濟の豫定なるを以て其成案は先づ高等敎育會議に諮問し議定の上は直に發布せらるべしと云ふ今其理由を聞くに目下全國に幼稚園と認定すべきもの二百有餘の多數に達したるも從來各幼稚園とも保育規定なるものなく甚だ不規律にして中には滿六才以下の兒童に敎育習字等敎授するものあり兒童の發育上少からさる大障害を與ふ

るに依り今回保育規則なのものを制定し修身には行儀作法手工には麥藁細工等のものを教授するものにて兒童的保育に關し詳細規定したるものなりと云ふ◎武田信玄の兜と軍扇　甲府の或寺院に保存の由傳ふるものは眞正のものにあらず內藤家（舊日向延岡藩主）に持傳ふるものこそ眞物なれとの說あり其の說によれば內藤家の二代目忠興の內室は武田勝賴の女にして勝賴の亡ぶる時其寶物は多く內藤家の手に入りて其由緒書は最も正しきものなり即ち其兜には七十二個の星ありて其星は何れも皆燦々たる金無垢なり又軍扇は最も堅固る造り方にて柄の長さ三尺に餘り且つ其柄の中には鎗の身を仕込みあり川中島の戰ひに信玄は軍扇にて謙信の大刀を受け留めたりとの事は今尙ほ人口に膾炙すれども此軍扇には刀痕なく古來云ひ傳ふる物語りと符合せざる處あれども其符合せざる所こそ却て眞正の物たるを證するに足るなりと◎西行法師出生地　宮崎縣東臼杵郡北川村大字川內名村字猪の市と稱する處にして系脉連綿として今尙子孫繁昌せりと果して眞乎◎廣島女學校と附屬幼稚園　廣島市上流川町廣島女學校附屬幼稚園は本年十月より外人の手を藉らず其經濟を日本人に於て維持することとなり廣島女學校は追て女子師範科を置かん計畫にて是も遠からず獨立すと◎紀州密柑　紀州産泉州産共開花の頃非常の豐作の兆なりしも暴風雨の爲め花を多く散らし爲めに相場は約二割高なり

◎軍艦扶桑の遭難　常備艦隊の扶桑は客月二十八日松島、嚴島、鎭遠、須磨、和泉の五艦と共に吳軍港を發し伊豫灘に向ひ同國喜多郡長濱に投錨するに當り如何なる機みにや既に投錨したる松島の船首衝角に扶桑の舷側を突當てたり此時烈しき震動と共に扶桑の舷側は忽ち破れて潮水浸入する有樣なれば據所なく故らに自ら同地の淺瀨に乘上げて沈沒を免かれぬ玆に於て松島以下の諸艦は悉く全力を灑いで救護したれば扶桑の搭載

物は悉く取御し艦員一同無事上陸したり◎富士艦の着港　去三十一日軍艦富士の横須賀軍港に入るや横須賀町民の總代百餘名は當日午前十一時頃より三艘の大傳馬に分乘し小蒸氣をして是れを曳かしめ富士艦歡迎の大旗を立て同艦の周圍を三巡し萬歳を三呼し同郡長、警察署長を始め乘立ちたる町民の總代は乘艦して三浦艦長の無事を祝し酒樽赤飯、餅菓子などを船員一同に送りて歡迎の意を表したりと又た同波止場に於ては終日煙火を打揚げ近在の老若男女見物の爲め雲集し街中の混雜言はん方なかりしと云ふ◎日蓮上人の巨像　目下東京美術學校に於て製造中なる日蓮上人の銅像は未曾有の巨像にして右は元寇紀念の爲め筑前博多公園に建立するものなるが今度新籾菜は淺草公園內の日本館に於て本月三日より開場する日蓮上人實傳活人形中に右の像を摸造し基礎より凡そ五丈程の巨像を加へて縱覽せしめたり◎梅田雲濱建碑　三日若狹國小濱にて落成式祭典を行へり◎出獄人保護院　長野縣松本の人石川、降旗の兩氏は宇田松本監獄署長と謀り二年前より出獄人保護院設立の計畫を爲し居りし知事の交迭ありし爲め延引し來りしが此程權藤知事の贊助を得去十日發起人會を開くに運びたりと◎ビスマークの腦髓　人類學者アモン氏は近時ビスマーク公の頭腦の重量を計かり大凡千八百九十七グラムあるべしとの見込を付けしが之れ實に未曾有の重さにてクイーヴイエーの腦は千八百三十グラム、バイロンの腦は千八百〇七グラム、カントの腦は千六百五十グラム、シルレルの腦は千五百八十グラムにて歐洲學者の腦髓の平均重量は千三百八十グラムあるのみなりと「紐育サン」に見ゆ◎水澤の天文臺　抑地球廻轉の地軸が一定せざるとは從來星學上緯度の觀測によりて明かなることにして星學觀測の精微を來すに隨伴し其變遷の有樣を知悉する益〻精細を加ふるに至れり從來多くの學者が世界の所々に在りて

研究したるの結果緯度の變位は經度と關係し地球の廻轉軸は兩極平均位置の周圍數百尺以内に於て一種の曲線を描きつゝあるものなり故に其地位を詳にせんと欲せば經度を異にし且同緯度の點に於て同じ恒星の觀測により緯度の變遷を研究する必要あり是れ萬國協同其研究に從事するの已むを得ざるなり萬國測地會に於ては特に緯度變位研究の必要を認め列國の協贊を經て同緯度の地位にありて經度を異にし北半球に於て可成平等に配布したる四點の觀測所を設け其一は我邦に於てし歐洲にては伊太利に一點西半球に於ては米國に二點を置くの豫定にして其地位を撰定するに當り天候の觀測に宜しくして地震少く或は其他局處變動を來すべき障礙少き箇所に天文臺を設置するの準備なり我邦の水澤は伊太利サルヂニヤ島カプリヤ市と三十九度八分に近き緯度に位し天候地震等に至ては同緯度の地方に於て最も都合好きを以て獨國ポツダム測地會中央局に於ては畧ぼ水澤に内決し本邦測地會委員に照會して其緯度の畧測幷に天候地震の摸樣を觀測せられんとを乞ひたるより右の照會に接し測地會委員田中舘博士木村學士は水澤に出張し緯度を測定し天文臺設立地も畧一定したれば中央局に其委細を報告し列國委員の協贊を經て愈々觀測に從事するは後三年を出でざるべし◎

豐公一門の墳墓 豐國會にては先頃より豐太閤一門の墳墓を取調中なりしが既に調査濟みと爲り其所在の明かに爲りたるは左の如しと云ふ一太閤夫人湖月尼 高臺寺一淀君 大阪北野大融寺にあり明治十年鴫野より移す一棄君 洛北妙心寺に在り一秀賴公 洛北等持院に在り一秀次 初め嵯峨に在り後洛東岡崎町善正寺に改葬す一に首塚は三條大橋西瑞泉寺なりとも云ふ一秀吉公妹(三好武藏守一路の妻) 善正寺に在り一壽芳院(秀吉公妾)、松の丸(京極高次妹) 新京極誓願寺に在り一漏世院(秀賴公長男)、國松丸 (徳川氏の　に捕

へられて殺さる）誓願寺に在り一秀吉公妹南明院（家康公夫人）東福寺南明院に在り一天瑞寺殿（秀吉公母）紫野大徳寺内天瑞院に在り一大光院（秀長）大徳寺中大光院に在り一秀俊（秀長の子）同上一瑞雲院（秀吉公の養子）下京堀川松原下る本國寺中瑞雲院に在り一致祥院（秀次の室）岡崎町善正寺に在り一妙泉（秀次庶子）同上一瑞光院（秀次の弟）同上◎**金谷塾主の死去**　前號に紹介したる麹町飯田町金谷塾主金谷錠子は去四日病痾の爲め溘然死去されたり惜哉◎**大日本婦人義勇會**　劍客柳生家九世の孫にして一部の社會に名を知られたる大坂の出身女醫松本愛子の發起に係り此會の眼目の主義は日本婦人の尙武的氣象及愛國的精神とを養成し、一方には婦人の躰格を健全にするにありといふ、其事業の要目を擧ぐれば一婦女子に適切なる躰育を敎授し以て躰格の完全を期すべき事一外傷患者の急救所を設立し赤十字事業の補助をなす事一妊婦及び産蓐中婦女子の心得を敎授する事一外傷より誘引する諸種の關節病の躰診なす事一大和軍人苦樂部を全國各地に設立し武人の利便に供し併て恤兵事業を助すべき事一本會の事業を一般に廣めんか爲め定期の婦女雜誌を發行すべき事評議員は板垣伯爵夫人、星夫人、鳥海女校主鳥海香子、交野子爵夫人、中江篤介夫人、野中至夫人、山田泰造夫人等にして會費、毎月十錢なりといふ◎**畫伯石井鼎湖逝く**　本姓は鈴木名は重賢嘉永元年神田佐久間町に生る少より實父我古翁に學び十二歲六代乾山三浦乾也翁に養はれ後石井氏を繼ぐ明治三年大藏省の吏となり偶々政府銀行紙幣の製造を海外に注文するに及び氏之れが下圖を畫く後紙幣寮に轉任し石版術を洋人ホラルに受け着色合刷を研究成就す蓋し本邦に於て石版合刷の整具せるを見るは實に氏を以て始めとなす二十一年龍池會（今の日本美術協會）創立以來會員となり又審査員の列に加はる其他

明治美術會、日本繪畫協會、文墨協會等に入會して盡瘁する所多し其書法は我古翁に則り北南合法なれども諸派の衆妙を兼採し長短取捨誠意斯道に從事せしが二十七年思ふ所ありて閑退し遂に去る二日病で歿す深川因連寺の先塋に葬る◎日本弘道會婦人部常集會　去七日午後一時半華族會館に開き北澤正誠氏南洋諸島の實況を演說せしよし

學校生徒の耳目

不健康なる兒童に對して若し其負擔に堪へぬ敎育を施さば是れが爲め疾病を誘起すると云ふ事は瞭然たるとにして又疾病の爲め學業を中道にして廢棄するとあり或は又後日社會に出て、各自業務に從事せんとするも身躰虛弱なる爲め十分の働を爲すと能はず究極折角受けたる所の敎育をして殆んど無効に歸せしめむとす

耳と目は外界にある事物を吾人腦中に受容する最大緊要なる關門にして若し此關門の狹隘ならんには吾人が受容する外界の智識は例へば德利に漏斗なくしてドツト水を注き込む時外に溢流するが如く爲めに腦中に塡充する能はず故に此の關門狹隘なる兒童は學問の入込むを不便にして普通の者より多く精神を勞し且つ其結果たる同量の敎育を受けし者に比せば悉皆腦中に容らず一部分は腦外に溢出し或は腦中に入り來るも刻苦の結果なれば骨が折れし丈け其効績少なし故に耳目の缺點あるは兒童を敎育する上に於て不都合不便なるのみならず延いて他の疾病を惹起する原因となる恐あるものなれば世の敎育に從事するものは此耳目の缺點の如何なる邊迄も影響するものなるかを注意せざるべからず

耳の聞へざる耳の不自由なる者も多くは咽喉病が原にして特に兒童の耳病は多く最初咽喉病より來るものに

して耳病として發するものにあらず且つ咽喉の悪いといふことは精神に至大なる影響を與ふるものにて幼時活潑なる兒童も此等の疾病の爲め不活潑となり常に不平を懷いて世を終るに至ることあり社會に於て何の役に立たぬ人間が出來る其の原は豈圖らんこの耳目の缺點ならんとは

●耳　聽官の缺點は醫學上重聽と稱し所謂聾者なれども全くの聾者にあらず普通耳の病は突然起るものにあらずして緩徐に起るものなれば家庭にても亦入學する學校にても氣付くことなし今外國に於て耳病の生徒を調査せし結果に依れば華盛頓（米國）にては五百七十名の內其十三、〇〇「パーセント」巴里（佛國）にては百人に付廿二人乃至廿五人グラスゴー（英國）にては六百名の內其二七、〇〇「パーセント」（以下略す）は重聽なりと又日本に於て和辻醫學士が明治廿六年島根縣松江にて五歲より廿二歲迄の千五百九十名の生徒を調査せしに聽器の疾病あるもの三百四十八名にて全數に對し、二一、九〇「パーセント」に相當し其內單純中耳炎四七、〇〇「パーセント」耵聹堆積三三、〇〇「パーセント」化膿性中耳炎一七、八〇「パーセント」なり

家庭の不注意にて耳垢の掃除を爲さず不潔になし置きし爲め重聽になることあり此等瑣些たる格別病氣と名付くべき程のものならざるも最大緊要の關門を狹隘にするものあるを思はゞ大に注意せざるべからざるなり又耳の遠くなるは鼓膜室の病にて中耳と稱する部分の病多し鼓膜の局部は咽喉に連絡せるを以て咽喉の悪いといふことを知りつゝも耳の悪いといふことを知らざることあり又薄弱なる小兒の屢〻感冒に罹りて是れより鼻咽喉邊に加答兒を引起し遂に其病をして耳に波及せしむることあり又或は耳垢を取る時若しくは戲に豆粒を入れて之を取出さんとする際誤つて鼓膜を破り爲めに中耳の衝突して內なる膿の流出を來すことあり之れ耳垂なるも

のゝ中最も恐るべき疾病なり

校舎にありて教員の言葉の低聲又は不明なる爲め或は教室の板の間のガタ／＼する音窓外を轢る車馬の音などの爲め耳の悪しき者は教員の説明を十分に會得する能はず自ら不注意の様子現はれ教員の責むる所となることあり然れども是れ教員たるものゝ常に注意すべき所にして例へ醫者ならざるも聽官の働が普通なるか或は健康の人と異るなきかを試むるの必要あり此の如き者に對しては相當の位置に着席せしめて保護の手段を採らざるべからず

耳垂れ（耳漏）特に結核性中耳炎は膿中の菌肺結核中の菌と同一なるを以て他に傳染せしめざる様相當の手續を施すべきなり、中學以上の生徒にありては水泳又は發火演習等を行ふことあり斯る時には最初醫者の診察を受くることを要す然らすむば中耳に水の入りて大事に至ることあり又は銃砲の響が歐氏管の咽喉へ漏らすべき孔の塞がりたる爲め鼓膜をして破裂の不幸を至すことあり

●目も亦大切なる關門にして目の缺點は耳と異なり學校の教育が直接目を悪しくなしつゝあるは爭ふべからざる事實にして人の知る所なり

吾人の目は出生の當時は遠視眼にして初は偏平眼といふ平たきものなるが後方に丸身が付き漸次後方へ張出して圓形になりたる時は平視眼なり（故に兒童の中にも近視斗りでなく遠視眼あるも注意すべし）此際學校に入りて細字を見詰るか暗き教室にあるか机又は教室の構造不良なる等より首を書物に接近せしむるを以て平眼視にて止まるべき眼球が少しく後方に延ひて楕圓形となり遂に近眼となる

我國に於て是れ迄の調査に依れば小學生徒が近視となる割合は大抵二乃至三「パーセント」の間にあり稀には生徒の中遠視眼の者あり然も之を近視と同一視すべか

らず遠眼も亦細字は茫然として見えざるを以て近視眼ならんとて近眼鏡を用ゐなば更に病を増進せしむるのみ近視の遠眼鏡に於ける亦然り其他弱視亂視等の眼病あり子供のヂフテリア麻疹等に罹りたる病後は眼力舊に復せず眼中の筋肉の疲勞は他の疲勞と共に長く續き朦朧として物の見へぬとなり此の如く學齢兒童の煩ふヂフテリア麻疹等の病氣が病後に及びて眼の方に影響を及ぼすとを注意すべし

尚一の恐るべき者あり顆粒性結膜炎「トラホーム」之なり近來に至り世人の注意する所となりたるが佐渡の國にては生徒の半分以上此病の侵す所となれりと元來越後は瞽盲の名物にして北海岸の地たる眼病者の多き所と稱せらる抑も「トラホーム」の爲め大切なる眼を潰といふ其初は結膜の病より後ち「トラホーム」の爲に角膜に白色の雲懸り目翳みて遂に盲目となるものにして大に恐るべきなり然も傳染病なるを以て常に手拭などは他人の物を使用せざるの注意必要なり

耳の缺點は左程注意せざるも近眼は何故に世人は早くより恐るかといふに第一教育を受くる間 即ち教育をするに不便なると丁年に至り兵役に服すべき義務を缺くとあると又己が職業を營むに當り眼病の爲め細い仕事を爲すと能はず空しく學び得たる學業を棄てゝ他に新に業を求めざるべからざる等の不都合あり又目にて受くる所の快樂を減少す特に近眼は遺傳するものにして親が近眼なれば子孫は十分に豫防を爲すも掛り易すきものなれば大に之れが豫防に注意すると緊要なり

扨其豫防の注意に種々あり第一建物の缺點あるもの例へば窓小にして暗く或は窓大なるも其廻りに家屋の建込みたるを立樹の爲め光線を遮きらるゝと塗板の悪しき爲め書きたる文字の見分け難きと書物の版鮮明ならざるとストーブの爲めに逆上すると等あり第二授業の時間割の爲め近眼を來すとあり一時間眼を使用せば之

を休養せしめざるべからず次は眼鏡にして不適度なる物を掛け輕き度の近眼をして漸次强くせしむると多し而して近眼の生ずる影響を擧けなば自然頭を机の文字の方へ近寄する爲め遂に脊骨曲りて脊蟲となるとあり机の角にて胸部を押付け呼吸不十分の爲め肺病を引起すとあり又腹部を押付ける爲め腸胃病を生するとあり眼病の爲め不圖も胃腸病肺病の續いて起るとあり最も注意すべき事なり(三宅秀氏の説)

交詢

◎第六十五問(麹町君子君へ) 料理屋の主人などにて素人へ料理獻立の指南を爲す家は都下に有之候芝浦の海老徳などは好んで亦熱心に此道の教授致候

◎第六十六問(山梨高田君へ) 今夏東京市中に流行せし「アヅマ、ルート」とは始め「ルート、ビヤ」と稱せしが酒類なりとの嫌ありしため名稱を變じたり、「ルート、ビヤ」は酒類にあらず、二三ヶ月前亞米利加發行「家庭雜誌」にも廣告ありたり、ビールとラムネを混ぜしやうの味にて曾て本誌に掲載したる銀座函館屋販賣「シャンピン、サイダー」に類似せり、勿論夏季の飲料なり

◎第六十七問(麹町SM君へ) 祝儀に魚類を贈る時には、臺を横にし魚一つならば頭を我が左にし、海の魚は腹をむかふに川の魚は脊をむかふにすべし、數ある時には我が左より積り出し、河魚海魚の論なく脊を我が左へなし、腹を右に頭をむかふへなして積み、次に始めて積みたる魚と腹を合はせて積むべし、次は始めの如く積むべし

◎第六十八問(相州の華子君へ) 百日咳は固有の病毒によりて發する觸接傳染病にして數週間或は數月を經過するものにして血管運動神經は興奮性増劇し喉頭粘

膜の分泌機増進するものなり
本病は病毒の傳染に由りて發するものにして決して偶發することなし手拭衣服等より傳染す本病は小兒病なり併し初生兒及び十歳以上のものは稀なり時として妊婦或は產婦を侵すことあり故に充分御注意ありたし

◎第六十九問（富山政子君へ）　懷姙中悪しき食物は我國にては梨、梅、桃、杏子、李、生姜、慈姑、くずのこ、蓼、葱、韮、麵類、豆、餅、蕈、蓮根、虎杖、ひしほ、あけび、鯖、鮎、鱠、海老、鮨、蜆、鴨、雀、兎、猿、犬など言ひ傳へ候

◎第七十問（ＨＫ君へ）　石炭酸は二十倍のものを用ゆ石炭酸の効力をして一層强烈ならしめんとせば之れに百倍の鹽酸若くは硫酸を加へよその他昇汞水千倍のものは三四分時にして「バチルス」を撲滅す又經濟上も便なり惜らくはこのものは蛋白質物躰と化合する性ある故血液膿咯痰等の消毒に使用するは食鹽を加へよさすれば蛋白質と抱合せざればなりこのものは石炭酸の如く臭氣なし故に衣服等の消毒には適當なり併し金屬製の器物には消毒する能はず

◎第七十一問（無名君へ）　毛虱を治するは多く水銀軟膏なれど、此膏は衣を汚し濕疹を發するの嫌あり、此驅除法には甘汞の塗擦第一妙藥なりやに聞き及べり

◎第七十二問（筑後三宅定子君へ）　馬鈴薯は目下出盛りにて西洋料理には種ゝ用ゆれど、日本的には煮砕して砂糖煮にするか或は皮を剝ぎたるものを小さく刻み暫時水中に浸し置き軈て取出し鹽湯の沸騰せる内に投じ善く煮えたる時湯をこぼし更に鹽と砂糖にて加減し火に煮たるものをかけて食するも面白し。

◎第七十三問（岩手與市君へ）　英書にて家政の書はミセス、ビートンのゼー、ブック、オブ、ハウスホルト、マチーヂメント（家事書）宜しかるべし代價は三圓位其他にもパーネット夫人のゼー、メーキングオフ、ゼ、ホー

ムは小冊子なれど要を盡せり代價は五十錢位遊戲書類にはチヨルチ、ルートレッチ、エンド、ソンス社出版のエベリ井、ポイス、ブック種類變化多くして面白し、代價一圓五十錢位ページ數九百十頁何れも丸善にあり。

◎第七十四問（四谷南部君へ）　御尋の海棠などにつく蟲は多分桑木蟲と申すものにて可有之候始めに蜘蛛の巢の如く見え次第に葉を食ひ條のみ殘し網の如くになし後には葉を丸く卷き候此の種を發見候はゞ直ぐに其枝を切り捨つること得策に候へ。

◎第七十五問（大磯眞壁君へ）　麥藁帽子の汚れたるを新しくするには炭酸曹達にて洗ひ上げ其の上にアラビヤ護謨を薄く引き蔭乾にして置くべし。

◎第七十六問（淺草T T君へ）　近來諸新聞紙廣告に見ける水飴製葡萄酒とは從來一般世間にては其甘味を砂糖にて附加せるを、それにては葡萄液の精純を稀薄ならしむるの害あり且つ其色合の毒々しくなるを避くるため、新に晒水飴にて釀造することを發明せしが好結果を得、衞生試驗所の分拆結果も宜しく候麻布市兵衛町上原商店釀造販賣

◎第七十七問（越後齋藤政一君へ）　田舍の高等小學全科卒業の婦人にて更に中等教育より逐次高等教育を受けしむるには東京にて如何なる女學校へ入學致させて然るべきやの尋問、かゝる事は諸方より來り候が、先づ貴下及孃君は如何なる目的に候か、單に婦人の淑德を養ひ且つ良妻賢母たるの目的ならんには、私立女學校にして其塾主の名ある人に就くべく、其國粹主義たり西洋主義たるは各々好まるゝ處に從はるべし、良妻賢母たるの外職業を以て世に立んことを望まるゝ人は女子高等師範學校又は女子職業學校其他あるべし、されば宜しく先づ第一に孃君等をして其目的を明にし而して後學校撰定あるべきが順序かと存候

◎第七十八問（信州町田君へ）婦女子一人東京へ修學に出すは再考を要すべきものにて候目下東都の書生社會は大に亂れて男子さへ一人放しにするは危險掛からざる次第なれば女子は尚更に注意を要すべき大事に有之候東京に然るべき親類知己あらば之に囑托するか左なくば信用ある校舍に入らしめて諸事校主の監督の下にあらしむれば安全に近かるべく候女子に一人放しの遊學は再三熟考を要すべきものに有之候

◎第七十九問（京タイ君へ）衣服着用期日の答、東京の氣候より言へば正月は綿入の候にて胴着、襦袢の上に下着二枚上着一枚之に羽織を着せば厚着の方にて薄着は胴着なし下着は一枚にてよし、二月は此まゝにて三月に至らば胴着と下着一枚ぬぎて宜しく四月は花見時候なれば襦袢に下着一枚上着一枚袷羽織、五月は袷に袷羽織、六月は黒地の單衣に袷羽織かフランチル又はセルの時代なり、七月に至らば暑氣加ふるが故に單衣に絽の羽織、八月より九月上旬までは大暑、殘暑酷烈の候ゆゑ帷子に紗の羽織或は絽の羽織なり、九月は七月の衣服を取り合せ、十月に至らば袷に袷羽織又はフランチル時候なり、十一月は袷二枚に袷羽織十二月は綿入に下着一枚重ね綿入羽織を着するか或は厚着の人は胴着を着す、これ一通りの順序なれど東京は誠に不規則にして各々思ひ〳〵の扮裝を爲す月々の細目に至りては毎號の社交一斑内に記しあり時々參照あるべし

◎第八十問（陸前一貫生君へ）百八號健康策水浴法は毎朝手拭を冷水に浸し能く絞りこれにて頭部より脊腹四肢すべて赤くなり湯氣の立つまでに摩擦し後、乾きたる西洋手拭にて能々水氣を去るべく候、時間は一時間位を規定とすべく斯くすれば別に冷水を頭頂上よりかくるに及ばず候逆上の人ならば髮を一分刈にし氣分のよき日には冷水を頭上に注ぐもよろしく候

◎第八十一問(長崎IS生(一))　人間の壽命の答、人間が成熟する時期の長短は生命の長短に關係するものなりとある醫學博士は論せり人間の骨は始め軟かくして終に硬きものとなるこれを化骨と稱し軟かき骨の細胞より石灰を分泌し己れの上を被ひ硬固になす、化骨すれば成熟したるものにして其成熟が生命に關係する理由は早く成熟せるものは早く死する理にして人間にては通常二十歳にして化骨するが歐羅巴の生理學者は生命の時期は成熟期の五倍と言へりされば人間は二十歳の五倍即ち百歳生命ある理由となる馬は四年にして化骨するを以て二十年にして死すべけれど四十年は生存せり又蠶は蝶となるまでは非常に久しき間なれど蝶となれば直ちに死す故に五倍云々の説は信じられず人間は百年位は生命はある筈なれど種々の條件よりして生命を短かくす第一身躰營養不完全第二身躰勞働過劇なること第三生殖法等種々の事件この生殖法は非常に關係するものにして彼の雄蜂を見るに一度交尾すれば必す死す併し交尾せざれば久しく生命のあるものとは動物學者の説なりこの説はやゝ信を措くに足る又生殖機關を有せざる下等動物單細胞にては永久死せずと云ふ話あり彼の有名なる「ワイスマン」と云ふ生理學者の話には生命の長短は生躰がこの世にある目的は生殖保存である故にその目的を果たすまでの時間に關係ありと云へり

◎第八十二問(岩手松崎君(一))　獸肉中に馬肉の有無驗定の答、馬肉は比較的廉なるを以て狡黠なる肉店にてはこの肉を混するものありと故にこの驗定を知るは大に必要なり先づ試驗すべき肉十匁許出來得る丈こまかにくだき四十匁許の水を入れよく攪拌し鍋に入れ一時間程煮沸しこれをよく漉してその液の一部分をとり冷却したる後稀硝酸を丁寧に混合し蛋白質の多量を分離せしめその色素をとり、その色のなくなりし時沃度の

溶液の熱を十分加へて全く飽和したるものを徐々に傾瀉しこの二液は層をなさしめ必す互に混合することを勿れ、もしこの試驗せし肉中に馬肉ある時は兩液の間に鮮色なる赤色或は赤紫色の輪を生す、これによりて知るを得へしこの反應は他の肉類には決してなし、これ實驗上の事實なり

◎第八十三問(神田美土代生へ) ホヤの破損は隨分多し之を防ぐには第一火は始め弱くなし徐々に強くなせば必す破損せず何となれば凡て急劇に光を盛にせばホヤ内部の溫度と外界の溫度と平均する能はざればなり、併し誤て始めに盛になすことなきにしもあらす、その豫防にはホヤの內に熱の良導躰なる金屬をその中に挿入するを可とす、近頃鐵の線條をホヤの上端に懸垂するに大に理あり線條より鐵板を用ゐば一層安全ならん

◎第八十四問(本所綠町生へ) 石鹼は脂肪酸偏里設林依的兒即ち脂肪の中に含めるパルミチン酸、ステアリン酸及びヲレイン酸の亞爾加里鹽なりされはこれを製せんには牛の脂肪と椰子の油とを混じたるもの凡そ百分を苛性那篤倫滷六十分の湯煎になしたるものゝ中へ攪拌しつゝ溶解せしむれば脂肪及油は苛性那篤倫の爲めに分解され、パルミチン酸ステアリン酸ヲレイン酸偏里設林に分れ偏里設林は溶解せるも他の三つは堅硬なる固塊を得べし、この固塊を取りてボロ／＼に碎き餾水三百分を溶解し更に食鹽二十五分を餾水七十五分に溶解したるものを注入して煮沸し石鹼の凝固するを度として止めこれの冷えたる後餾水を以て充分能く洗滌してこれを布にて濾し鐵鍋に入れて溶解し箱中に注入して乾燥せしむれば上等の石鹼を得べし(色及香を付けるは鐵鍋にて溶解せる時付けるにて色付けには原名ラクーと稱するニトロベンゾールの金屬と結付た水に不溶解性の色素にて色付け香は何なりとも御勝手の

ものを入れて付けるを得べし）而して其凝まりたるものを針金にて（刄物などにては思ふ様に切れず）石鹸の型ほどに切り之れを摸型に入れて打ては見ごとなる思ひ〳〵の形の化粧石鹸を得べし、されど水にて洗滌する時洗の足らざれば亞加爾里を殘し或は食鹽を殘すの患あり亞爾加里及び食鹽のある如き石鹸は皮膚を侵すの虞れあれば充分洗滌すべきなり、若し尤も上等の石鹸を造らんとなればオレーフ油を取りて製せられなば彼の有名なるマルセーユ石鹸と同質なるものを得べし、若しまた海水浴用即ち食鹽水中にて使用し得る石鹸を得られんとならば椰子の油のみにて製せるべし之れはマリエン石鹸といふ、石鹸を以て身躰を清潔になす理由は石鹸を水中に入るや小部分分解す、これを水化作用と云ふ「アルカリ」と脂肪酸を分つこの遊離の「アルカリ」は皮膚に膠状をなすところの脂肪躰を溶解す、故に塵埃は洗滌し去るとも遊離の脂肪は新たに清浄せられたる皮膚に作用をなし柔軟となす又併せて殘留せる「アルカリ」を中和して表皮の溶解を防ぐ石鹸の悪質なるにはあらざれど非常に痛を感ずるものあり、是れ「アルカリ」の量多くして中性ならざるなり、石鹸に水なければ何の功能なし水ありて始てその作用を逞くするものなり、石鹸水は強き粘着力を有するもの故一度遊離の「アルカリ」を以て作用せられたる垢塵もこの粘着力の爲め吸收され除去せるなり、石鹸に硬石鹸と軟石鹸とあり硬石鹸とは脂肪酸曹達とより成るものにして軟石鹸とは脂肪酸と加里とより成るものなり故に軟硬の別は加里と曹達とに關するものなり

質問規則

本欄は家庭の實用に資するの目的なるを以て字義又は專門の學術技藝等に關する事件は答辨の要なし而して答ふべき質問は

一衛生に關する事譬へば小兒養育、養育の具、時候の衛生、疾病、治療法、藥劑、病院、看護

等に關する質問

一敎育に關する事譬へば小兒敎育、敎育書類、敎育の品具、學校等に關する質問

一衣食住に關する事、必用諸道具又は臺所品の得失善悪、購買法廢物利用、素人料理、食品の購買法、其得失善悪、衣服の購買法、其得失善悪、衣服の取合せ法、時々の流行等即ち簡易生活及家事經濟一切に關する質問

一家庭的手藝に關する質問

一家畜又は園藝等に關する質問

一家庭理財に關する事譬へば貯金、銀行、保險等に關する質問

一職業に關する事譬へば内職又は婦人的職業に關する質問

一其他家庭實用に關する諸種の質問

歌苑

亡妻を哭す

亡妻樂子、明治十二年一月三日、滋賀縣野州千代家に生る、其父子之祐氏、母高子、兩親の慈愛と、家兄水樂子の薫陶とに依りて婦道を脩めり、吾養母同家より出し縁故あるに由り、樂子を娶りて吾妻となせしに、不幸なる哉情交未暖かならさるに肋膜炎に罹り、肺結核に變じ終に藥石其効を奏せす、本日午下二點、生家に於て遠逝なしぬ、齡十有九、當安樂寺の住職森端瑞源師戒名を附す曰く、

紫光清室妙雲大姉

三拾年八月廿五日　東京　高谷白醉誌

斷腸歌

生者必滅のことわりを、
知らぬといふにあらねとも、
さりとはあまり敢果なし、
花にたとはゞさくらはな、
まだ咲きみたぬ其うちに、
哀れ無常の風ふきて、
八月二十と五の日に、

愛しき妻は誘はれぬ、
思ひ出せば三月まへ、
春過ぎ夏の初めかた、
弘法大師の命日に、
人の道てふ契をば、
契りし甲斐も情なや、
間もなく床に病つきぬ、
されど御身も我もまた、
今日の歎きを見るぞとは、
如何でか知らむ夢にだに、
程なく病のおさまりて、
元の家庭の樂みを、
うくることぞと思ひしに、
あだとなりしぞうらみなる、
思へ吾妻思へかし、
我とおん身の其中は、

親のゆるせし妹脊ぞや、
千代も八千代も變らじと、
誓ひしことを忘れしか、
さるをおん身は先立ちて、
殘りし我を如何にする、
あゝ歎くまじ思ふまじ、
人々生れいづるとき、
命は定めあるものを、
されば我又程もなく、
おん身のあとを追ひ行きて、
紫光靆く極樂の、
蓮の臺の淸室に、
いもせの力を樂まむ、
妙雲大姉待てよかし、

近着紹介

◎女子書翰文　下田歌子氏著　日本橋本町博文館

家庭文庫の第一編にして下田歌子女史の編述なり書翰文の定則、慣例、字句の使用法、書式の法を説き次に消息文の變遷を示しその今日にかなふべき文躰をあげつらひて數十の作例を網羅せり文章はやゝ硬きに過ぎて女子の文躰には如何がと思はるゝ節なきにはあらねど書翰文といふことにつきての説明はさすが有名の歌子女史の手になりしものとて洩れなく記述せしものなり（價三十五錢）

◎寫眞之栞　府下北多摩郡拜島村　青木善七發行

本書は大日本寫眞協會員青木善七氏及帝國醫科大學生黒田侗寛氏の合著にして能く理論と實地とを參酌し明に素人にも分り易きやう文章を平易にし且つ説明要を盡したれば就かば此道に入り易かるべし（價三十錢）

寄書百珍

健康策

北但　天涯一夫

健康は人生の最大幸福なり予の漸く人となりし以來或は先進に學友に醫師に諸子の學説を耳にし或は行ひ或は廢し今日に繼續し來るものを分ちて飲食の攝生、適當の運動、安心立命の三要綱とすとは予の現今適當の健康策と認め平素實踐する處の者なれば其眞否は諸君の判する處に任せん而已、予は早起を尊む曉目醒むれは直ちに起き上り起き上れは洗面所に立つて冷水にて躰の上部を拭ひ（皮膚を摩して赤くなるを度とす）神を拜して家の近傍を散歩す新鮮の空氣を呼吸せん爲めなり

其日の業務を終れは温湯に浴す夜は燈下四方山談に時を移し八時間は安眠せんと欲す、就床前必す數丁の途を散歩す安眠に大なる稗益あれはなり、予は眠るには虚心平氣家をも身をも打ち忘れ神の境に出入して安心立命以て日々の勞を一夜の安眠に贖はんと希へり」予は二三年前迄酒も烟草も飮まざりしが社會の習慣と身の娯樂として今は少々つゝ弄せり

予は飮食に就きては成るべく時を同ふし量を同ふせんとを望めり人は生活する爲めに食ふと云ふめれどなか〳〵攝養は出來ぬものなり茶漬は成るべく食はぬ樣に心得腹は八分に醫者無用の言を信せりされど口腹の慾は押へ難きものなり予は肉食せんと考ふれど片田舍の事なれは思ふ樣に出來ずされど一週に一度位は滋養の食物に飽かんと欲し其時には出來得べき馳走を調へ腹皷して太平樂を歌ふて佳境に入り以て胃腑の洗濯とも云ふべき方便を計れり物は扣へ目にし滋養にわき衛生に氣を付け所謂大切に取あつかひ過きると僅の障害にて挫折するものなれは務めて外來の困難に堪ゆるの身躰機關を作らざる可からず予の太平樂を歌ふも又宜ならすやそはいへ其の朝は勞働と運動は必す忘らざるなり諸君希くは予の所説を輕々しく見る勿れ

神田　養生子

予は身體中腸部が一番薄弱なるためか、屢々腸病のために悩まさるゝことあり、依て或人の勸告に從ひ春秋四季共腸部をフランネルにて卷き且つ少しく氣分惡き節は固形物を禁し成るべく消化し易き食物か流動物を用ゐ來りしが大に其結果あり爾來身躰頗る健全なり

日本橋區　一商人

小生の身躰の健康なるは全く禁酒の一事よりにて候昔つて友人と一樓に會し興に乘じて一升量の大酒を傾け

夢中にて歸宅致候が其翌朝始めて宿醉なるものを覺え候處來客ありなにこればかりの事と大に輕蔑して應接致す內に身躰頻に寒慄を覺え客去りし後にて蒲團幾枚も被りて寒慄を防ぎしに其日より胸カタル熱と變じ、胃痛をも併發し一轉して黃疸病にも及ばんと致候位か一夕の酒のために一ヶ月間程も苦痛を感し且つ多忙なる時間を空費致候事全く飲酒の業より起りしものにて今更後悔詮なく爾來酒を見ること蛇の如く再び盃を手にせざりしが身躰は酒を弄する時よりも至極丈夫に暮らし居候也

神田　一　平民

生は病氣は毫も恐るゝ處なく亦不健康などは夢にも見たることなし、何となれば生は二六時中勞働に從事するが故に元氣精神身躰に充滿し病魔の侵入するの餘地なし、たとへ生は少許の異狀を感ずる事あるとも元氣と精神——即ち勞働を以て敵に打勝つ覺悟なれば一日として病床に平臥したることなく勞働の間にいつの間にか厄病神は逃げて仕舞ふなり、生の健康策大率斯の如し



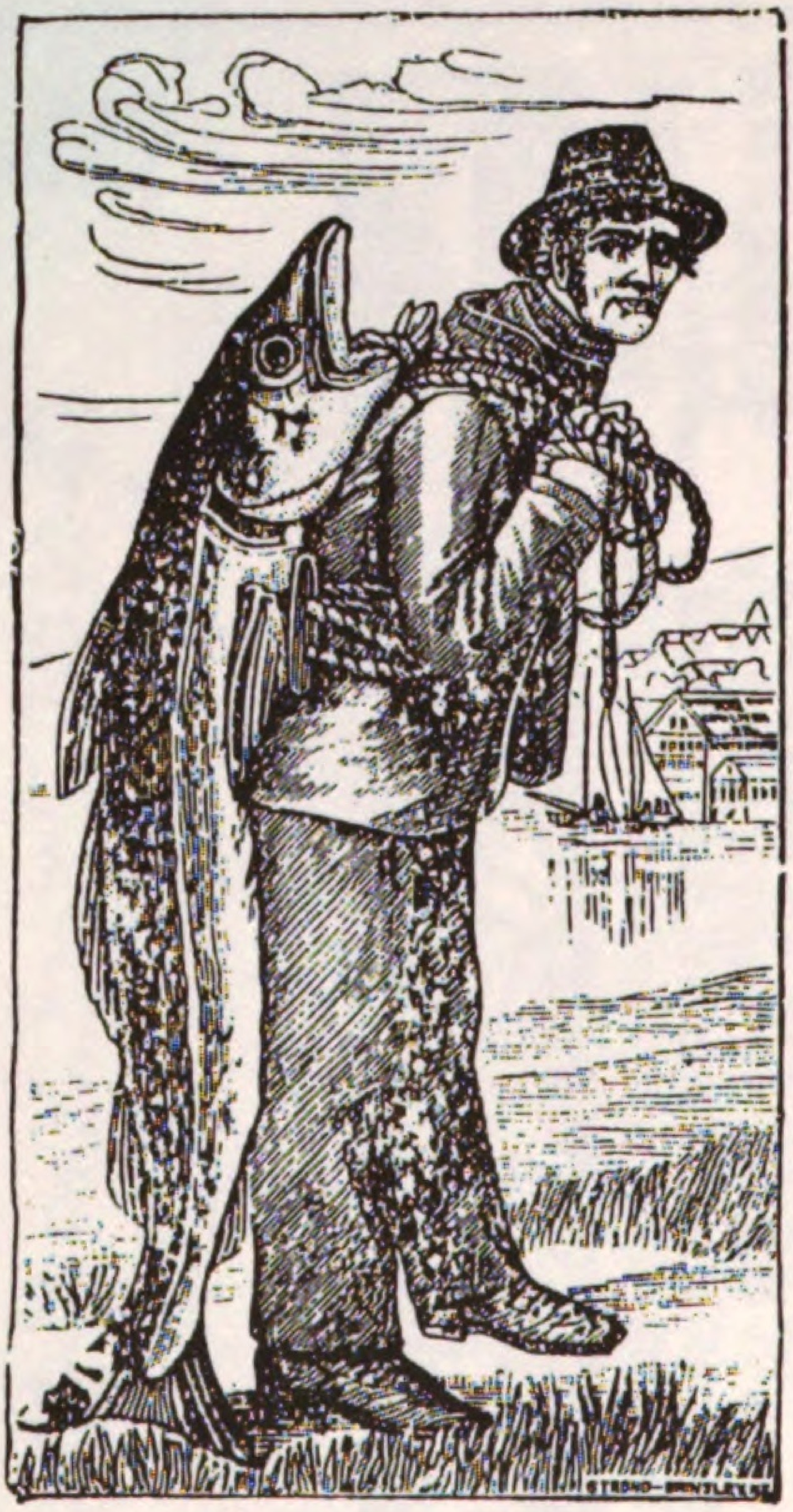
○小兒○はよく肥へて笑ひ顔の愛らしき筈のものなり痩せたる小兒は興味尠きものなり之れには彼スコット乳菓の有名なる肝油の精と次亞燐酸とを配合して飲み易く且つ味ひよく製造したるが最も適當なる食料にして忽ち肉を肥し發育を助くるなり●此の乳菓が滋養分に富むとは他に比類なきが故に虛弱なる人々は之れを用ゐて奇効を見べし

特に虛弱なる婦人は一度之れを服用せば忽ち健全なる身躰となること疑なし

○咳嗽及風邪○は病の初めなり、次に來るものは肺の衰弱にして身躰を痩せしむ、最後に彼の恐るべき肺病の萌芽を顯すなり彼の有名なる肝油の精と次亞燐酸の調合物なるスコット乳菓は能く咳嗽及風邪を去り肺臓を强くして活力を與ふること實に驚くべし●●●此の乳菓の洪大なる滋養分が嬰兒、小兒及虛弱なる母親を益すること實に大にして、其味も至て滋味なれば喜で服用するなり

此の乳菓が精氣を增し滋養分多く最も効驗あるものなるは世界の大醫の擧て證明するところなり

○スコット乳菓の說明書御入用なれば橫濱八十九番日本支那貿易商會へ此の雜誌にて御承知の旨御申越あれば無代價にて呈す



左の大取次所の外各藥舖にて賣捌き居れば御購求ありたし

橫濱境町	友田嘉兵衛
仝　境町	鳥居德兵衛
仝　太田町	大川佐兵衛
東京本町四丁目	鳥田久兵衛
仝　室町	資生堂
仝　本町三丁目	鳥田忠兵衛
大阪道修町二丁目	小西儀助
仝　道修町二丁目	武田長兵衛
仝　道修町三丁目	田邊五兵衛
仝　道修町二丁目	田畑利兵衛
仝　道修町二丁目	福田清右衛門
仝　道修町二丁目	鹽野儀三郎

新に發行されたる本書の價値如何、
乞ふ左の諸評を見よ、

平田久著

十九世紀外交史

上中下三篇合本
定價五十錢
郵稅六錢

太陽評
舞臺は歐羅巴外交界の最も多事なりし十九世紀、著者は健筆家平田久氏、壯快の筆を以て壯快の事を記し、那勃烈一世帝以後現時に至るまで、列國合縱連衡の活劇、原因結果とも、光景恍として紙上に躍る、

東京經濟雜誌評
歐洲の平和は列國の權力平衡を以て維持さるゝ者にして、世界の動機も歐洲若干の强國が合離するに依て左右せらるゝ者なり、政治家たるもの時勢に從て甲と和し乙に叛き縱橫に操縱して自國の利益を謀るに當ては道德も理論も亦絶無なりとす、千八百十四年奈翁敗れて巴理條約となりしより、英露の反目となり、露佛の同盟となるまで戰爭の間に樽俎の上に千變萬化の變態を呈せる歐洲の狀態は此書に依て簡明に說明せられたり、

都新聞評
春秋戰國の世の策士の輩出せるが如く歐洲諸國にも亦た外交策士其踵を絕たず蘇秦あり張儀あり藺相如あり孟嘗君あり其變幻奇怪なる外交上の術策は殆んど其眞相を知り難きものあり坊間既に歐洲外交政畧を說くの書なきにあらずと雖ども多くは權力平衡、同盟合縱の變遷を叙するに過ぎず未だ政治家の肚裏をまで洞察論斷したるものあらず此書はよく同盟の由來政治家の掛引等を寫して遺憾なきを覺ゆ

長崎新報評
史は外交史より面白きはなく史を著す外交史より難きはなし十九世紀の外交史は外交史中最も面白き「時期」たると同時に亦最も著し難き「時期」なり東京青年操觚者の才俊平田久氏此好題目を捕へて此著し難きを著す本書即ち是にして筆を千八百十三年對奈翁の列國カリツシユ條約に起し言を近年の露佛同盟に結ふ上下九十年の合縱連衡、線を引いて聯珠動き綱張つて目擧るが如く因果脈絡歴然として見るべく利害外交の大主義は潑剌として紙上に跳る只叙事往々簡に過ぐるの憾なきに非らずと雖も是れ小冊子に免かれざる所、兎まれ邦人漸やくに外交なるものを知り初め知らんと欲するの時に於て此書の出づる、蓋し渇時に醴泉湧き饑時に玉食の降りたらんが如くなるべし

鹿兒島新聞評
戰後世界の檜舞臺に上ぼり外交の事最も關心すべき帝國今日の場合此書の如きは好讀本なりと云ふ可し

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

（明治廿五年九月十四日遞信省認可）（明治卅年十一月十五日發兌）東京市京橋區西紺屋町二十六七番地株式會社秀英舍印行